

2019年度 文部科学省初等中等教育局  
「教員の養成・採用・研修の一体的な改革推進事業」

# 教員育成指標に連動した 体型的現職教員プログラム開発

## 成果報告書



和歌山大学 教育・地域支援部門  
2020年3月 発行



## 目次

・はじめに	3
・本事業の概要	5
(A) 現職教員研修プログラム	9
I 研修プログラム（出前講座）開発について	11
II 研修プログラム（出前講座）の実際	16
(B) 初任者研修履修証明プログラム	35
I 「初任者研修履修証明プログラム」の概要	37
II 初任教員 課題研究	41
III 訪問指導の実際	74
IV 大学（教職大学院）で履修する授業の紹介	85
V アンケート調査結果の概要	108
VI 成果と課題	118
(C) 有識者との意見交換会	128
(D) 研修プログラムの体系的構想について	142



## はじめに

和歌山大学では、和歌山県教育委員会及び和歌山市教育委員会とともに、平成 25・26 年度の二ヵ年にわたり、「初任者研修高度化モデル事業」を実施した。この事業により高度化研修プログラムを開発することができた。しかしながら、中央教育審議会答申「これからの中学校教育を担う教員の資質能力の向上について」（平成 27 年）で、教員が学び続ける意欲を維持し、身につけた能力や専門性の成果が評価され、実感できる仕組みにすることが、将来に向けての現職教員研修のあるべき形であると提言された。

そこで令和元年度に実施した本事業では、「教員育成指標に連動した体系的現職教員研修プログラム開発」として、次のような取り組みを行った。和歌山県では平成 28 年度（管理職は 29 年度）に教員育成指標が整備されたことを受け、教員の任命権者は、その指標に連動した教員研修計画を策定することとなった。そこで求められているのは、「質・量ともに指標に対応したもの」であることと共に、「学びによって得られた能力や専門性の成果が見える」、いわゆる「学びの軌跡」が可視化され実感を伴うものとなっていることである。現在、この目標に沿って教育委員会では既存の研修プログラムを精査・改善に努めているところである。

しかし、教育現場では、ベテラン教員の大量退職と新任教員の大量採用により、校内の学びのサイクルの成立が困難になるとともに、学校への支援を担当する者を確保・育成することにも苦労している。このような状況のなか、研修プログラムの大きな改善や新たな研修プログラム開発を行うには、多大な人的資源と時間的労力が必要となるが、現在の学校現場では多様で複雑な課題が日々発生しており、教育委員会もその対応・支援に時間や労力を割かなければならない。これまで多くの教育委員会では、大学教員を研修講師として派遣する方法を行ってきており、新たな情報や知識・技能の獲得を目的とする単発的な研修で有効である。しかし、大枠はあるものの研修内容の大部分を講師に依存する方法では、長い教員のキャリアを見通した学びの継続という観点から見たとき、十分効果的な方法とは言えない。

そこで本学では、これまで高度職業人としての教員の養成の中心として、養成・採用・研修を一体的にとらえた教職生活全体を支える観点からの新たな役割の提示として、初任者研修や拠点校指導教員および校内指導教員研修のプログラムを開発・実施してきた実績があり、大学が教育委員会と有機的連携を図りながら、大学の人的・知的・物的資源を有効に活用することで、教員育成指標に対応した体系的な現職教員研修プログラム開発に寄与できると考えた。さらに初任者研修においては、履修証明プログラム等を活用することで、「学びの軌跡」が可視化され実感を伴う体制を構築することが可能となる。

現職教員研修プログラムの開発に際しては、中核都市である和歌山市教育委員会との連携で行うことを基礎としつつ、県内の他の市町教育委員会による研修プログラムの利用も視野に入れ開発を行った。

上記の取り組みにより、「教員育成指標に基づいた研修一覧」の作成、「研修プログラム」の作成、和歌山市、岩出市、紀の川市、大阪府岬町における開発した研修プログラムの実施、初任者研修プログラムの改善・対象拡大に向けた実質的な検討、などが成果として挙げられ

る。これら成果については本報告書に詳細に記されているので参照されたい。

最後に、本事業の計画実施にご理解とご支援をいただき、協働して取り組んでくださった和歌山県教育委員会及び和歌山市教育委員会、また研修プログラムの実施にあたってご協力いただいた和歌山市立教育研究所、岩出市教育委員会、紀の川市教育委員会、大阪府岬町教育委員会、初任者研修の連携協力校としてご協力いただいた和歌山市立藤戸台小学校、和歌山市立松江小学校、和歌山市立砂山小学校、和歌山市立高松小学校、和歌山市立西浜中学校、和歌山市立日進中学校、和歌山市立楠見中学校、和歌山市立有功東小学校、和歌山市立紀之川中学校に感謝申し上げたい。

教育・地域支援部門長  
寺川剛央

## 本事業の概要

### 1. 目的

これまで本学が開発してきた現職教員研修プログラムや知見をもとに、教育委員会と有機的連携を図りながら、大学の人的・知的・物的資源を活用し、教員育成指標に連動した体系的で、学びの軌跡が可視化・実感できる研修プログラムを開発し、教育委員会や各学校等に提供することを目的とする。

### 2. 実施内容

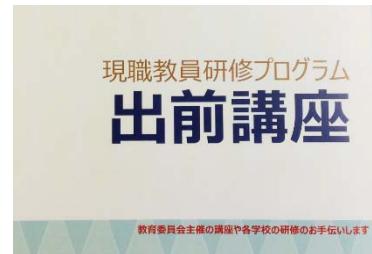
#### (A) 現職教員研修プログラム

##### ① 教員研修プログラム（出前講座）の開発

和歌山県教育委員会が整備した教員育成指標（後出）に基づいて、授業実践力やマネジメント力向上に関わった研修プログラムを開発する。また、これまで開発している拠点校指導教員・校内指導教員研修向けの研修プログラムや校内研修(授業研究)改善プログラムもこれに加え、「若手教員への指導力向上プログラム」「授業の質の向上のための教材研究プログラム」「講師対象プログラム」「学校経営力向上プログラム」「免許外教科指導者対象プログラム」として、リーフレットにまとめ教育委員会等に紹介する。

##### ② 教員研修プログラムの実施と改善

各教育委員会及び学校の要請にしたがい①で開発したプログラムを教育委員会主催の教員研修会や各学校の現職教育の場で実施する。また、それぞれの研修に参加した教員や教育委員会の指導主事の意見・感想等から、プログラムの内容の見直しを行ったり、新たな研修プログラムを考えたりする。



教頭向け研修会



現職教育研修会



拠点校指導教員向け研修会

## (B) 初任者研修履修証明プログラム

和歌山市教育委員会と連携、過去3年間実施してきた「初任者研修履修証明プログラム」を継続し、初任者育成の方法・内容を再検討しながら、より良い初任者研修の在り方について探る。また、初任者指導を通じて拠点校指導教員や校内指導教員の指導力向上も目指す。

連携校への訪問指導



授業カンファレンス



大学での集合研修

## (C) 有識者による意見交換会の実施

上記(A)(B)の取組を受け、教育委員会及び和歌山大学で教員研修に携わってこられた有識者の皆さんにお集まりいただき、本年度の取組について省察する。

## (D) 研修プログラムの体系的構想の作成

和歌山県教育センター学びの丘や和歌山市立教育研究所など直接教員研修に携わる部署と意見交換・検討委員会をもち、育成指標に基づいて、各資質・能力の積み重ねに則した研修プログラムを体系的に構想する。その際、受講する教師が自らの学びを設計することに寄与できるカリキュラム・マップ化を行う。また、個々の教師が研修した内容をさらに深めることができる発展的なプログラムについても検討を行う。

本書では、(A)「現職教員プログラム」及び(B)「初任者履修証明プログラム」を中心に報告する。(D)については、「教員育成指標」の各区分に現在本学で実施可能な研修をあてはめる作業を行い、次年度以降も継続実施を行うこととする。

## 教員としての資質の向上に関する指標

平成30年4月改訂  
和歌山県教育委員会

○若手教員の力量向上のための校内研修のしくみをつくり。自らも学び続けながら学校全体の教育力を高めようとする教員  
○同僚性・協働性を基盤とし、しなやかで創造的な「チーム学校」をつくろうとする教員  
＊教職に対する責任感、探究力、教職生活全体を通じて自主的に学び続ける力（使命感や責任感、教育的愛情）  
＊専門職としての高度な知識・技能  
＊総合的人材開発（豊かな人間性や社会性、コミュニケーション力、同僚とチームで対応する力、地域や社会の多様な組織等と連携・協働できる力）

\*校内とは、幼稚園内・認定こども園内・保育所内を含む。

O段階 養成期 (着任時)		1段階 基礎形成期 (目安:1年目～3年目)		2段階 伸長期 (目安:4年目～10年目)		3段階 充実期 (目安:11年目～20年目)		4段階 貢献期 (目安:21年目以降)	
教員志を志す者として大学卒業時に付けておくべき知識・技能について理解しようとする。		キャリア段階		2段階		3段階		4段階	
分野	資質・能力	分野	資質・能力	資質・能力	資質・能力	資質・能力	資質・能力	資質・能力	
教育に 関わる 理念や 理論  教職に 就くた めに 知識理 解基盤	めざす 具体的な姿 〔例示〕	授業実践の基礎	・授業計画や学習指導法の基礎、基本を理解し、それらを授業実践で生かそうと努めるとともに、現代の教育課題について把握し、その様々な解決方法や具体的な対応方法について理解している。  ・教育の理念、歴史・思想に関する基礎的知識を獲得している。  ・教育の制度や法律に関する基礎的知識を獲得している。  ・教科等に必要な学問的基本の知識を獲得している。  ・子供の発達に関する基礎的知識を獲得している。  ・現代社会における教育的課題を理解している。  ・人権に深い理解をもち擁護している。	授業構想能力	本時・単元のねらいに沿った授業構成及び評価計画(計画)  <u>P_lan</u>	本時のねらいを意識したあての設定やまとめるべき、本時の保育、授業計画を立てようとする、先輩教員の助言を得ながら單元計画や評価計画を立てることができる。	教材や教具、環境構成を工夫しながら、子供の興味を踏まえた本時の保育、授業計画を立てるとともに、付けたい力を明確にし、見通しをもつて單元計画や評価計画を立てることができる。	カリキュラム・マネジメントに基づき、指導と評価が一体化された保育、授業計画を立てとともに、学年や単元間の系統性を意識しながら、単元計画や評価計画を立てることができる。	各数字…それぞれのキャリア段階でめざす姿 全…全段階でめざす姿
		めざす具体的な姿〔例示〕	・教育課程の基礎的内容を理解している。 ・学習環境や学習規律の大切さを理解している。 ・学習指導の理論に基づいた授業構想ができる。 ・各教科の基礎と異なる学問的知識や子供の発達論に基づき、教科書教材などとの教科間連携の準備ができる。 ・本時の目標と授業実践を踏まえた学習指導を書き下せる。 ・明確な指示・説明や適切な範囲を定めることで、時間の授業を授業者として展開できる。 ・子供の取り組む姿を積極的に評価しようと努めている。 ・子供の発達に関する基礎的知識を獲得している。 ・現代社会における教育的課題を理解している。 ・人権に深い理解をもち擁護している。	めざす具体的な姿〔例示〕	学習指導と評価技術(実行)  <u>D_o</u>	子供の発言や机間指導により、子供の反応や理解を確かめながら保育、授業を行うとともに、子供の理解度を、設定した場面・評価規準により評価することができる。	子供のつぶやきや反応に適切に保育、授業中に、子供一人一人の理解度を発見や机間指導により把握し、子供の理解度に応じた効果的な指導ができる。また、学習状況に応じて子供に適切な評価・支援を行い、それらの見取りりを、次時以降の保育、学習指導計画の修正に生かすことができる。	各数字…それぞれのキャリア段階でめざす姿 全…全段階でめざす姿	
学校における教育実践の基礎	めざす具体的な姿〔例示〕	子供理解・支援の基礎	・子供集団に適切に関わる技能や子供たちの個性を尊重しながら個に適切な実践的指導方法の基礎的な知識を獲得しているとともに、特徴ある子供への配慮事項等についての基礎的な知識を理解している。  ・どの子供に対しても公平な対応ができる。 ・一人一人の子供を大切にし、信頼する態度が身に付いている。 ・子供の言いや意見を積極的に聞く姿勢が身に付いている。 ・子供の姿や活動のようすを見守ることができ。・子供同士の関わ合いを促すことができる。 ・学級運営に関する基礎的な知識を獲得している。 ・集団づくりの大切さを理解し、その実践方法についての基礎的な知識を得ている。 ・特別支援教育についての基礎的な知識をもち支援に生かすように努力している。 ・生徒指導・教育相談についての基礎的な知識をもち、指導や支援に生かすよう努めている。	指導技能	めざす具体的な姿〔例示〕	ICTを効果的に活用できる力(全) ○他者と関わる中で考究を深める「対話的な学び」を大切にした保育、授業展開を行う力(全) ○思考力、判断力、表現力等を身に付けさせる保育、授業の工夫改善を行う力(全) ○子供の興味や関心、興味から子供の姿勢や状況を見定めるとともに、ねらいに沿った保育、授業展開を行ったり主体的な活動を支援したりする力(全) ○保育、授業研究を通して、明確に指示・説明や適切な範囲等の指導技能向上に努める態度(全) ○子供が自己決定、自己決定し、主導的に活動する機会を作り、子供たちに表現したりする時間を取り入れた保育、授業展開する力(全) ○教育要領、学習指導要領の内容を理解して、保育、授業を行なう力(1～2) ○本時のねらいについて、定められた観点で評価を行う力(1～2) ○B評価に適しない子供に対して、学習状況を見ながら個別の支援を行う力(1～2) ○子供のつぶやきや反応に適応する力(2～4) ○B評価をA評価に引き上げるため、本時において個別の支援を行う力(2～4) ○本時の評価・支援を、次時以降の保育、学習指導に生かす力(3～4)	子供の発言や机間指導により、子供の反応や理解を確かめながら保育、授業を行うとともに、子供の理解度を、設定した場面・評価規準により評価することができる。	子供のつぶやきや反応に適切に保育、授業中に、子供一人一人の理解度を発見や机間指導により把握し、子供の理解度に応じた効果的な指導ができる。また、学習状況に応じて子供に適切な評価・支援を行い、それらの見取りりを、次時以降の保育、学習指導計画の修正に生かすことができる。	各数字…それぞれのキャリア段階でめざす姿 全…全段階でめざす姿
		反省	自身の授業を振り返る姿勢(分析・修正)  <u>C_hck Action</u>	めざす具体的な姿〔例示〕	日々の保育、授業実践を振り返り、自身の課題を把握・分析し、改善することができる。	進んで研究保育、研究授業等を行い、保育、授業実践の積み上げを図る。	自ら学び続けるという意識をもち、自身の保育、授業実践を積み上げるとともに、同僚や若手教員の授業力向上のため、適切な助言を行うことができる。	常に指導法研究や自身の資質向上のために学び続け、若手教員の保育、授業力向上や勤務校の教育目標達成に貢献する。	
学校における教育実践の基礎	めざす具体的な姿〔例示〕	生徒指導力	個に対する指導・支援	子供の内面を共感的に理解し、校内組織等の助言を得ながら、適切な指導・支援を行う。	子供の成育障害の背景を理解し、校内組織等と連携しながら、適切な指導・支援を行う。	子供の自己指導能力の育成を図るために積極的な生徒指導について、方針のもと、校内組織等においてリーダーシップを発揮する。			
		集団に対する指導・支援	子供は集団の中で育つことを理解し、校内組織等の助言を得ながら、規律のあるまことに集団づくりを行う。	子供同士が高め合おうとする集団づくりについて、校内組織等と連携しながら、適切な指導・支援を行う。	子供の社会と関わろうとする意欲や態度の育成について、校内組織等と連携しながら、適切な指導・支援を行う。	子供の自己指導能力の育成を図るために積極的な生徒指導について、方針のもと、校内組織等においてリーダーシップを発揮する。			
めざす具体的な姿〔例示〕	めざす具体的な姿〔例示〕	社会的なリテラシーの育成	子供の社会と関わろうとする意欲や態度の育成について、校内組織等と連携しながら、適切な指導・支援を行う。	子供の社会に貢献しようとする意欲や態度の育成について、校内組織等と連携しながら、適切な指導・支援を行う。	子供の社会に貢献しようとする意欲や態度の育成について、校内組織等と連携しながら、適切な指導・支援を行う。	子供の自己指導能力の育成を図るために積極的な生徒指導について、方針のもと、校内組織等においてリーダーシップを発揮する。			
		めざす具体的な姿〔例示〕	意図的・計画的な指導による学習規範の育成及び保育、学習環境の整備の実施(個/社:1) ○カウンセリングラインによる面接を行う力(個:1～2) ○コーチングを生かした指導力を有する力(個:2～3) ○教育相談の実施の向上(個:2～3) ○ケース会議を計画・運営する力(個:1～2) ○特別支援の観点に基づく適切な支援を行おうとする意欲(個:1) ○キヤウア教育の実施(個:1～2) ○自己管理を重ね、常に保育、授業改善に取り組む姿勢(全) ○先輩教員からの助言を聽いて受け止め、自身の保育、授業を振り返るとともに、積極的に先輩教員に助言を求める態度(1～2) ○校内研修・事前研修等における同僚、若手教員への助言を行う力(個:3～4) ○管理職・外部機関と連携しながら保育、授業実践を行う意欲(個:3～4)	学校に対する指導・支援 集団に対する指導・支援 社会的なリテラシーの育成 めざす具体的な姿〔例示〕	意図的・計画的な指導による学習規範の育成及び保育、学習環境の整備の実施(個/社:1) ○カウンセリングラインによる面接を行う力(個:1～2) ○コーチングを生かした指導力を有する力(個:2～3) ○教育相談の実施の向上(個:2～3) ○ケース会議を計画・運営する力(個:1～2) ○特別支援の観点に基づく適切な支援を行おうとする意欲(個:1) ○キヤウア教育の実施(個:1～2) ○自己管理を重ね、常に保育、授業改善に取り組む姿勢(全) ○先輩教員からの助言を聽いて受け止め、自身の保育、授業を振り返るとともに、積極的に先輩教員に助言を求める態度(1～2) ○校内研修・事前研修等における同僚、若手教員への助言を行う力(個:3～4) ○管理職・外部機関と連携しながら保育、授業実践を行う意欲(個:3～4)	個…個に対する指導・支援 集…集団に対する指導・支援 社…社会的なリテラシーの育成 総…個、集、社すべての項目 各数字…それぞれのキャリア段階でめざす姿 全…全段階でめざす姿			
学校における教育実践の基礎	めざす具体的な姿〔例示〕	マネジメント力	学級経営能力	学級担任の役割と業務内容及び学校、組織、校務分掌等について理解し、自分の役割を果たす。	学校教育目標と教育計画の関係を理解し、様々な教育活動を経験する。	学校教育目標を実現するための指導の中心を定め、教育活動を工夫改善する。	学校全体に気を配り、創造的なビジョンを構築するよう指導・助言を行う。		
		学校組織の一員としての取組	学校は、組織として成立していることを理解し、その一員として動くことができる。	学校組織の一員として、求められている役割を積極的に果たす。	学校組織の中核として、それぞれの力を生かして学校運営に参画する。	学校組織の特性を見極め、対応力を高めるよう指導・助言を行う。	学校教育目標達成のために、組織の特性を活用し、対応力を高めるよう指導・助言を行う。		
学校における教育実践の基礎	めざす具体的な姿〔例示〕	保護者・地域・外部機関との連携	保護者や地域等と積極的に関わり、連携に努める。	保護者や地域等との関わりを深め、連携して活動する。	保護者や地域等と連携・協働のネットワークを形成する。	保護者や地域等と連携・協働のネットワークを形成するよう、指導・助言を行う。	関係機関と連携を取りながら、常に改善を図り、組織的な取組を推進するために指導・助言を行う。		
		危機管理能力	危機管理の重要性を理解し、自分での学級の安全管理ができる。	様々な教育活動での危機について理解し、課題に応じて環境を整備する。	教育活動での危機を予測し未然に防ぐとともに、早期発見、早期対応に努める。	教育活動及び校務分掌における自身の取組を、学校教育目標と目標達成につなげることができる。	関係機関と連携を取りながら、常に改善を図り、組織的な取組を推進するために指導・助言を行う。		
めざす具体的な姿〔例示〕	めざす具体的な姿〔例示〕	省察力(自己実現)	教育活動における自身の取組を振り返るとともに、先輩教員の助言を得ながら工夫改善を行うことができる。	自身の取組を、多角的な視点から振り返るとともに、工夫改善に生かすことができる。	教育活動及び校務分掌における自身の取組を、多角的な視点から振り返るとともに、工夫改善に生かすことができる。	教育活動及び校務分掌における自身の取組を、学校教育目標と目標達成につなげることができる。	関係機関と連携を取りながら、常に改善を図り、組織的な取組を推進するために指導・助言を行う。		
		めざす具体的な姿〔例示〕	合理的配慮に基づいた学級経営(学:全) ○子供や保護者、地域住民との意思疎通・連絡調整(学級通信等)(学/保:1～2) ○コミュニケーションスキルについての理解(個:1～2) ○学級経営能力の向上を目的とした学校外の研修への参加(学:2～4) ○年次進行していく当該学年の運営計画を見据え、他学年や他年度とのバランスを考えた計画・実践案(学:2～4) ○スクール・コンパニオンズに基づいた、子供に対する安全管理の意識徹底と教室内外の環境整備(危:1～3) ○危機管理マニュアルの作成・見直し等の積極的な開拓・危(3～4) ○管理職等との情報交換・連絡・相談確認の重要性を理解し、実践しようとする態度(個:1～2) ○子供や保育、授業に対する同僚や先輩教員との協働の実施(個:1～2) ○校務分掌等による組織的取組の実施(個:1～2) ○子供に対する切迫感の緩和(個:1～2) ○教育活動の実施に必要な人材又は物的・体的資源づくり(個:3～4) ○教育活動の実施に必要な人材又は物的・体的資源づくり(個:3～4) ○子供や保護者、地域住民との横溝に立った省察の実施(省:1～2) ○若干教員の省察を支援する校内カウンセラーや面談等の実施(省:3～4)	合理的配慮に基づいた学級経営(学:全) ○子供や保護者、地域住民との意思疎通・連絡調整(学級通信等)(学/保:1～2) ○コミュニケーションスキルについての理解(個:1～2) ○学級経営能力の向上を目的とした学校外の研修への参加(学:2～4) ○年次進行していく当該学年の運営計画を見据え、他学年や他年度とのバランスを考えた計画・実践案(学:2～4) ○スクール・コンパニオンズに基づいた、子供に対する安全管理の意識徹底と教室内外の環境整備(危:1～3) ○危機管理マニュアルの作成・見直し等の積極的な開拓・危(3～4) ○管理職等との情報交換・連絡・相談確認の重要性を理解し、実践しようとする態度(個:1～2) ○子供や保育、授業に対する同僚や先輩教員との協働の実施(個:1～2) ○校務分掌等による組織的取組の実施(個:1～2) ○子供に対する切迫感の緩和(個:1～2) ○教育活動の実施に必要な人材又は物的・体的資源づくり(個:3～4) ○教育活動の実施に必要な人材又は物的・体的資源づくり(個:3～4) ○子供や保護者、地域住民との横溝に立った省察の実施(省:1～2) ○若干教員の省察を支援する校内カウンセラーや面談等の実施(省:3～4)	【凡例】 個…個に対する指導・支援 集…集団に対する指導・支援 社…社会的なリテラシーの育成 総…個、集、社すべての項目 各数字…それぞれのキャリア段階でめざす姿 全…全段階でめざす姿				
真理探求・自己実現	めざす具体的な姿〔例示〕	めざす具体的な姿〔例示〕	【凡例】 学…学級経営能力 組…学校組織の一員としての取組 保…保護者・地域・外部機関との連携 危…危機管理能力 省…省察力 各数字…それぞれのキャリア段階でめざす姿 全…全段階でめざす姿						
		めざす具体的な姿〔例示〕	【凡例】 学…学級経営能力 組…学校組織の一員としての取組 保…保護者・地域・外部機関との連携 危…危機管理能力 省…省察力 各数字…それぞれのキャリア段階でめざす姿 全…全段階でめざす姿						

# 校長・教頭及び主任等に求められる資質・能力に関する指標

平成31年4月改訂  
和歌山県教育委員会

和歌山県が求める 学校管理職の姿勢	<b>(組織マネジメント)</b> ○学校教育目標の達成に向けて学校の教育活動に邁進する、力強いリーダーシップと決断力を兼ね備えた逞しい経営者 <b>(人材育成)</b> ○教職員の資質・能力を的確に把握して長所を伸ばす、次代を担う人材を育成する優れた指導者 <b>(教育に対する使命感)</b> ○高い専門性と倫理観を身に付けた常に学び続ける教育者であるとともに、高い倫理規範に従って行動する信頼の厚い人格者
----------------------	--

視点	基準	求められる資質・能力		
		主任等	教頭	校長
組織マネジメント	<b>構想力</b> ○学校教育目標の達成のため、担当する学年又は分掌等において、学校の課題を分析して改善策を考え、管理職に意見具申を行う。  <b>【めざす具体的な姿】(例示)</b> ○担当する学年又は分掌等において、関係教員と協議して課題解決方策を構想し、自身の意見を教頭に伝える。(主) ○主任等からの報告・相談等をもとに、学年又は分掌の取組の進捗状況を把握・分析し、改善・充実に向けた自身の意見を校長に伝える。(教) ○自身の教育理念や経験、国内外の社会・経済の動向や教育法規・教育思想等を踏まえた幅広く高い見識をもとに、スクールプランを構想する。(校)	○学年又は分掌等の業務の構想や進捗状況を的確に把握・分析し、校長に対してスクールプランの実現に向けた意見具申を行う。  ○学校教育目標達成に係る課題を関係主任等に提示する。	○学校の現状と課題を明らかにし、学校教育目標実現に向けたスクールプランを構想する。	○学校の現状と課題を明らかにし、学校教育目標実現に向けたスクールプランを構想する。
		<b>調整力</b> ○担当する学年又は分掌等において、各教員相互の同僚性を高め、その能力を発揮できるような役割分担を行う。	○各教員が同僚性を高め、学年又は分掌等で力を発揮できるよう必要な支援を行い、校長と主任等を結び、取組の軌道修正を図る。	○教職員、保護者及び地域等と学校教育目標を共有し、達成に向けて、適材適所の人員配置を行い、校内環境を適切に整備する。
		<b>行動力</b> ○担当する学年又は分掌等におけるキーパーソンとして、学校教育目標の達成に向けた具体的な取組を進める。	○校長の指導のもと、教職員をリードしながら学校教育目標の達成に向け、主任等に適切な指導を行い、取組が進むよう、組織を活性化させる。	○学校教育目標の達成に向けたグランド・デザインの策定を進めるとともに、常に取組の進捗状況を的確に把握・分析し、成果と課題をもとに次年度のスクールプランに生かす。
	<b>連携力</b> ○担当する学年又は分掌等において、管理職の指導のもと、「きのくにコミュニティスクール」を活用し、外部組織と連携・協働しながら取組を進める。	○部会等を活用し、関係教職員をリードしながら担当する学年又は分掌を通じて学校教育目標の実現に向けた具体的な取組を行う。(主) ○授業や部会等への出席等を通して、各取組の現状と課題を的確に把握して教職員に対する適切な指導を行なうなど、PDCAサイクルを活用することにより学校教育目標の実現を図る。(教) ○学校経営におけるPDCAサイクルの取組を統括し、成果と課題を明確にしながら、学校教育目標の実現に向けた学校づくりをけん引する。(校)	○学校運営において、校長の指導のもと、「きのくにコミュニティスクール」を活用し、外部組織と連携・協働しながら、主任等に適切な指導や調整を行い取組を進める。	○「きのくにコミュニティスクール」を活用し、保護者や地域、関係機関等との信頼関係を築き、外部人材等の協力を得ながら、的確な学校経営を行う。
		<b>【めざす具体的な姿】(例示)</b> ○担当する学年又は分掌等に係る取組を、教職員、保護者及び地域等と連携・協働しながら進める。(主) ○熟識等を通して、保護者、地域及び関係機関等からの意見や情報の収集に努め、外部組織と連携・協働して取組を進める。(教) ○保護者、地域及び関係機関等、外部人材との協力・協働体制を確立することにより、学校教育目標の実現をめざす。(校)		
人材育成	<b>育成力</b> ○担当する学年又は分掌等において、適切な指導・助言を行うとともに、組織的なOJTの工夫や現職教育の企画等の提案により、教職員の専門性の向上に寄与する。	○教職員の資質・能力を的確に把握し、校長の指導のもと、適切なOJTや研修等により、人材育成を着実にすすめる。	○教職員の資質・能力の現況をもとに、キャリア発達を促すための組織的・計画的な人材育成を行う。	
		<b>【めざす具体的な姿】(例示)</b> ○若手教員のメンターとなり、教科会等で積極的に発言したり、分掌業務の一部委譲により、若手教員に活躍の場を与えていたりする。(主) ○教職員一人一人に対して授業観察や面談等を行い、実態を的確に把握・分析し、指導・助言を行う。(教) ○OJTを通して教職員の自己目標を明確にさせ、適切な指導・助言を行うことで、資質・能力の向上をマネジメントする。(校)		
教育に対する使命感	<b>省察力</b> ○絶えず自己研鑽に励み、振り返りを行なうとともに、担当する学年又は分掌等におけるキーパーソンとしてリーダーシップを發揮するために必要な資質・能力の獲得に努める。	○絶えず自己研鑽に励み、振り返りを行なうとともに、校長を補佐し、教職員を指導・支援するためには必要な資質・能力の向上に努める。	○絶えず自己研鑽に励み、自らの経営姿勢や力量を振り返るとともに、教育活動を組織化するリーダーとして、自身の資質・能力の向上に主体的に取り組む。	
		<b>【めざす具体的な姿】(例示)</b> ○研修の機会等を有効に活用しながら、カリキュラム・マネジメントや危機管理等について学び、その成果を自身の教育実践に生かす。(主) ○国や県、市町村の動向、教育施策、法令・規則等の把握・理解に努め、組織マネジメント、危機管理、人材育成等について学び、その成果を教頭の職務に生かす。(教) ○国や県、市町村の動向、教育施策、法令・規則等の把握・理解に努め、学校の現状と課題を踏まえた改善方策を考えるとともに、学校経営者としての自身の在り方にについて常に振り返る。(校)		
組織においてリーダーシップを執る力	<b>垂範力</b> ○担当する学年又は分掌等において、自己の業務遂行の態度や姿勢により、他の教職員の良きモデルとなるよう、めざすべき模範的な教職員像を提示する。 ○法令遵守等について自らの姿勢で示し、関連法規を踏まえた行動を行う。	○学校運営において、自己の業務遂行の態度や姿勢により、教職員の良きモデルとなるよう、めざすべき模範的な教職員像を提示する。 ○校長の指導のもと、教職員の服務管理や法令遵守の意識向上の取組を統括する。 ○法令遵守等について自らの姿勢で示し、関連法規を踏まえた行動と組織管理を行う。 ○個別の関わりを通して、教職員のメンタルヘルス等の把握及び支援を実践する。	○学校経営において、高い倫理規範にもとづいた自己の業務遂行の態度や姿勢により、教職員の良きモデルとなるよう、めざすべき模範的な教職員像を提示する。 ○法令遵守等について自らの姿勢で示し、関連法規を踏まえた行動と組織管理を行う。 ○教職員のメンタルヘルス支援、ハラスメント防止や危機管理等を実現する組織的手段を確立する。	
		<b>【めざす具体的な姿】(例示)</b> ○学年や分掌での取組における若手教員の職務に対する姿勢を見取り、先輩として助言するとともに、自らモデルとなって行動する。(主) ○法令遵守や多忙化解消に係る意識の向上に向け、日々の業務や幼児児童生徒との関わりにおいて、自ら理想の教職員像を示すとともに、教職員に対して面談等による指導を行なうなど、率先して組織管理を行う。(教) ○高い倫理規範をもち、法令遵守や多忙化解消に向け、教職員の先頭に立って組織管理を行うとともに、自律的な教職員集団の形成に努める。(校)		

## (A) 現職教員研修プログラム



## I 研修プログラム（出前講座）開発について

今回開発・考案した研修プログラムは、和歌山県教育委員会が整備した「教員育成指標」に基づくものであり、各資質・能力の積み重ねに則した研修プログラムである。とくに本年度は、「若手教員を指導する立場の教員向けプログラム」「若手教員の授業力及び学級経営力向上プログラム」「管理職向け学校経営力向上プログラム」が中心となっている。

この研修プログラムの基となっているのは、文部科学省受託「教員の養成・採用・研修の一体的な改革推進事業」として、H28 年度より和歌山市教育委員会と連携実施して行ってきた「初任者研修履修証明プログラム」の開発、また、同じく H30 年度の和歌山市周辺の地域と連携し行ってきた「校内研修(授業研究)支援プログラム」「拠点校指導教員及び校内指導教員研修プログラム」の開発である。

これらの実践経験を土台として、今年度新たに以下のような研修プログラムを考案した。

### 【プログラム 1】初任者や若手教員への指導・支援の在り方

(対象) 拠点校指導教員・校内指導教員等、初任者や若手教員を指導・支援する先生向け  
(目的) 初任者や若手教員の授業力、学級経営力向上

### 【プログラム 2】授業を通しての校内研修の在り方

(対象) 現教主任・研究主任・教科主任向け  
(目的) 研究授業を通しての協議会のもち方

### 【プログラム 3】ねらいを貫く授業 授業改善の在り方

(対象) 現教主任・研究主任・教科主任向け  
(目的) “質” を向上させるための授業改善について

### 【プログラム 4】個別支援の必要な児童生徒への対応

(対象) 若手教員・中堅教員等向け  
(目的) 個別支援の必要な子どもへのかかわり方

### 【プログラム 5】講師の学級経営力向上

(対象) 講師向け  
(目的) 子どもの学級規律（学習・生活）を向上させるために

### 【プログラム 6】講師の学級経営力向上

(対象) 講師向け  
(目的) 自身の授業力を向上させるために

### 【プログラム 7】学校経営力・危機管理能力向上

(対象) 新任管理職（新任校園長・新任教頭）向け  
(目的) 管理職として大切にしたいこと

### 【プログラム 8】免許外教科指導教員のために

(対象) 免許外教科担任を行っている教員向け

(目的) 音楽・家庭・技術・美術等芸術科の専門性を高めるために

**【プログラム9】学校経営力・危機管理能力向上**

(対象) 管理職を目指す教員向け

(目的) 学校運営上大切にしたいこと

詳しくは後出 出前講座リーフレット 参照

研修プログラムは、大別すると初任者を含めた若手教員（講師を含む）向け講座、初任者や若手教員を指導する立場の教員向け講座、各校で教科等の研究の中心になる中堅教員向け講座、また管理職向けの講座等に分類され、現在の学校現場の教員構成を考え、必要とされるであろう研修内容である。

これらのプログラムは、「出前講座」としてリーフレットに印刷、和歌山県教育委員会・和歌山市教育委員会及び和歌山市近隣の市町村教育委員会に配布した。また、県および各市町村教育委員会が開催する研修の一部にこれらの新しい講座を組み込み、大学と教育委員会が協同した現職教員研修を構築していくことを提案した。

また、本年度初めて行う「出前講座」、少しでも多くの教員に知ってもらうため、和歌山市の小・中学校長会、また和歌山県連合小学校長会事務局でも研修プログラムの趣旨を紹介、各学校で行う現職教育での「出前講座」実施も重ねてお願いした。

**【訪問・協力をお願いした教育委員会】**

- ・和歌山県教育委員会
- ・教育センター学びの丘  
(含 共同研究会)
- ・和歌山市教育委員会
- ・和歌山市立教育研究所  
(含 現職教員研修検討委員会)
- ・岩出市教育委員会
- ・紀の川市教育委員会
- ・海南市教育委員会
- ・田辺市教育委員会
- ・(大阪府) 岬町教育委員会



**【協力をお願いした校長会等】**

- ・和歌山市小学校長会
- ・和歌山市中学校長会
- ・和歌山県小学校長会事務局



2/17 和歌山県教育センター学びの丘との共同研究

主に1学期に広報活動を行ったが、各教育委員会や学校から「出前講座」実施の依頼があり、以下のような研修を行った。

【出前講座一覧】

NO	日時	依頼元	研修名	参加人数	研修内容	講師名
1	H31.04.11 14:30~15:30	和歌山市 教育研究所	初任者研修 拠点校指導教員 等研修	15 名	講座 1 初任者・若手 教員育成の ために	南・中家・貴志
2	R1.07.24 9:30~12:00	和歌山市 教育研究所	新任校園長研修	16 名	講座 7 学校経営力 UPのために	南・中家・貴志
3	R1.07.30 9:30~12:00	和歌山市 教育研究所	拠点校指導教員 校内指導教員 研修	57 名	講座 3 ねらいを貫 く授業づくり	南・中家・貴志
4	R1.08.01 14:00~16:00	和歌山市立 福島小学校	夏季現教	12 名	講座 2 現職教育の 活性化のた めに	貴志
5	R1.09.10 14:00~16:00	岩出市 教育委員会	教頭研修	11 名	講座 7 学校経営力 UPのために	南・中家・貴志
6	R1.10.17 14:30~16:00	和歌山市 小学校教頭会	教頭会 職員管理部 研修	40 名	講座 7 学校経営力 UPのために	貴志
7	R1.11.21 15:00~17:00	大阪府岬町 深日小学校	授業研修 模擬授業	15 名	講座 2 研究授業を 通しての校 内研修	南・中家・嶋坂 貴志 森下・伊澤 (教職大学院)
8	R1. 11.28 11:25~16:35	大阪府岬町 深日小学校	授業研修 研究授業	15 名	講座 2 研究授業を 通しての校 内研修	南・中家・嶋坂 貴志 森下・伊澤 (教職大学院)
9	R2.01.29 10:30~12:00	紀の川市 教育委員会 紀の川 教頭会	紀の川市 教頭研修	26 名	講座 7 学校経営力 UPのために	南・中家・貴志
計				207 名		

## 【講座1】初任者や若手教員 どう指導する？

(対象) 抱点校指導教員・校内指導教員等、初任者や若手教員を指導・支援する先生向け  
(目的) 若手教員の授業力、学級経営力 UP させるために  
(時間) 60 分～120 分

(内容)

- ① 若手教員へのかかわり方について
- ② 若手教員の悩み、指導者の悩み
- ③ カンファレンス（授業指導）のもち方
- ④ ワークショップ「こんな初任者 どう指導する？」
  - ・サンプル授業の視聴（初任者の授業風景）
  - ・グループ協議
  - ・まとめ



## 【講座2】授業を通しての校内研修 どう企画する？

(対象) 現教主任・研究主任・教科主任向け  
(目的) 研究授業を通しての協議会のもちの方 UP  
(時間) 90 分～120 分

(内容)

- ① 授業を観る観点について
  - ② サンプル授業の視聴（小学校国語科）
  - ③ ワークショップ
- 「授業評価シートを使った校内研修」
- ④ 国語科の授業の進め方にについて
- ※事前に授業を参観させていただいた  
その授業についてのワークショップを  
することも可能です。

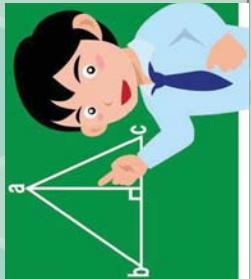


## 【講座3】ねらいを貫く授業 どう組み立てる？

(対象) 中堅教員・若手教員向け  
(目的) “質”を向上させるための授業改善について  
(時間) 90 分～120 分

(内容)

- ① 授業を観る観点について
    - ・授業構成・板書
    - ・子どもとのやりとり
  - ② サンプル授業の視聴（小学校道徳科）
  - ③ ワークショップ
- 「ねらいを貫く授業にするために」
  - ・観点別グループ協議
  - ・まとめ
- ④ 道徳の授業の進め方について

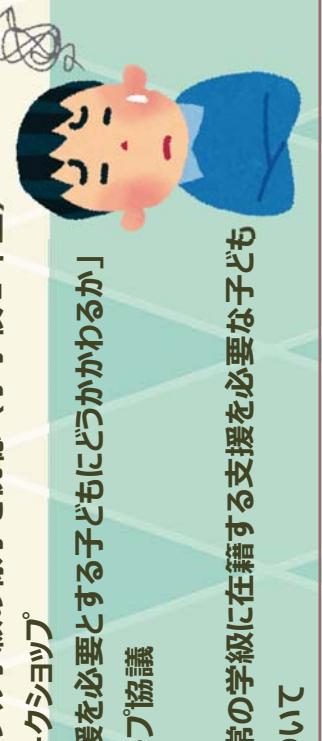


## 【講座4】支援の必要な子ども どうかかわる？

(対象) 若手教員・中堅教員等向け  
(目的) 個別支援の必要な子どもへのかかわり方  
(時間) 90 分～120 分

(内容)

- ① 通常の学級に在籍する支援を必要な子どもの実態
  - ② サンプル学級の様子を視聴（小学校1年生）
  - ③ ワークショップ
- 「支援を必要とする子どもにどうかかわるか」
  - ・グループ協議
  - ・まとめ
- ④ 通常の学級に在籍する支援を必要な子どもについて



## 【講座5】教師力 UP 学級経営力 UP どうする？

(対象) 講師（これから採用を目指すみなさん）向け①  
(目的) 子どもの学級規律（学習・生活）を向上させるために  
(時間) 60分～90分  
(内容)

- ① サンプル授業の視聴（小学校道徳・理科）
  - ② 教室で大事にしたい学習規律
  - ③ ワークショップ
- 「考え方！規律を整えるポイント」
- ・“4つの魔法”を考える
  - ④ 規律はどう定着させか
  - ⑤ まとめ



## 【講座6】授業実践力 UP どうする？

(対象) 講師（これから採用を目指すみなさん）向け②  
(目的) 授業力を向上させるために  
(時間) 60分～90分  
(内容)

- ① 授業づくりのポイントについて
  - ・授業評価シートを使った授業づくり
- ② サンプル授業の視聴（小学校道徳科）
- ③ ワークショップ
  - 「あなたの授業は？」
  - ・自身の授業を振り返る
  - ・グループ交流
  - ・まとめ



## 【講座7】学校経営力 UP どうする？

(対象) 新任管理職（新任教頭）向け  
(目的) 管理職として大切にしたいこと  
(時間) 90分～120分  
(内容)

- ① わたしが目指した学校経営～管理職経験者による実践例～
  - ・学校づくり コミュニケーションのはかり方
  - ・校内カンファレンスの充実による授業力 UP
- ② ワークショップ
  - 「初任者が大変！ どう支援する？」
  - ・グループ協議
  - ・まとめ



## 【講座8】免許外教科指導 どうする？

(対象) 免許外教科担任を行っている教員向け  
(目的) 音楽・家庭・技術・美術科の専門性を高めるために  
(時間) 60分～90分  
(内容)

- ※以下の講座も今後作成する予定です。
- ## 【講座9】教師力向上 どうする？
- (対象) 中堅教員（これから管理職を目指す教員）向け  
(目的) 学校運営上大切にしたいこと  
(時間) 60分～90分  
(内容)

- ① 教師力向上～各教科指導方法についての講義・演習
  - ・職員管理
  - ・についての講義・演習

## II 研修プログラム（出前講座）の実際

以下、実際に行った出前講座の一部を、当日使用したスライドやプログラム、また研修に参加した先生方の声と共に紹介する。

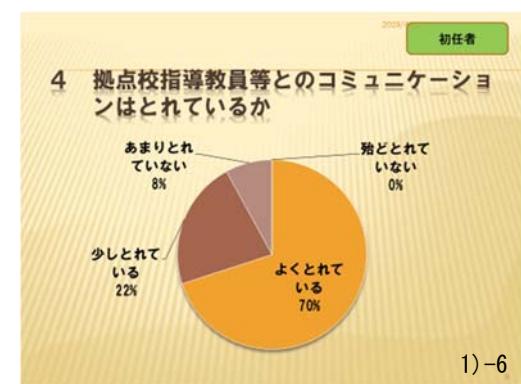
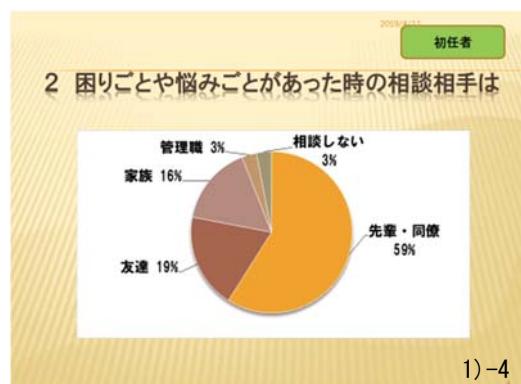
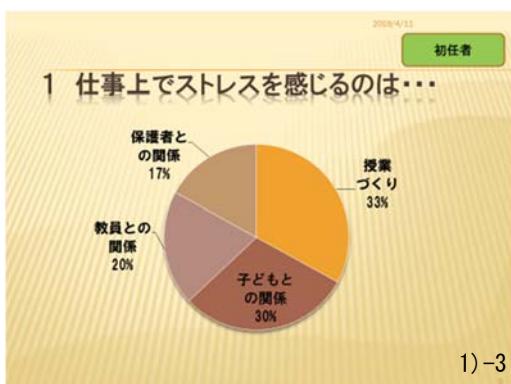
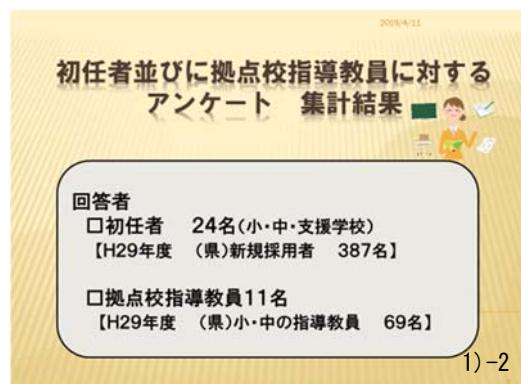
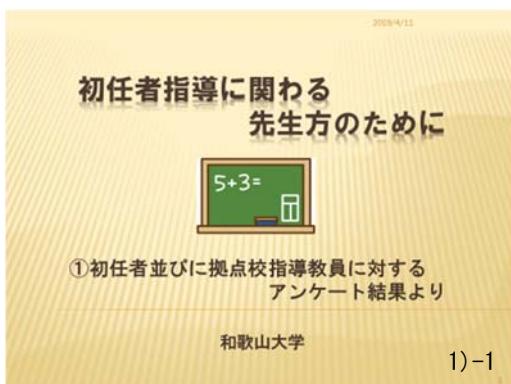
### 1) H31.04.11 和歌山市 小中学校拠点校指導教員研修

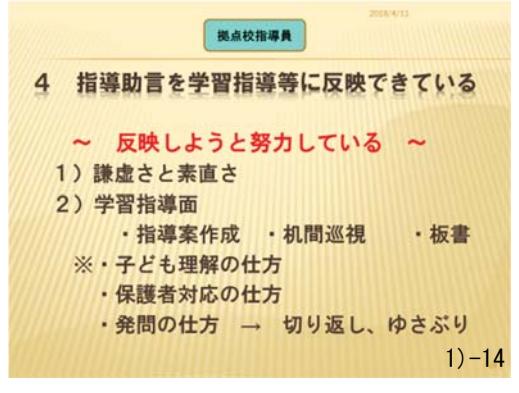
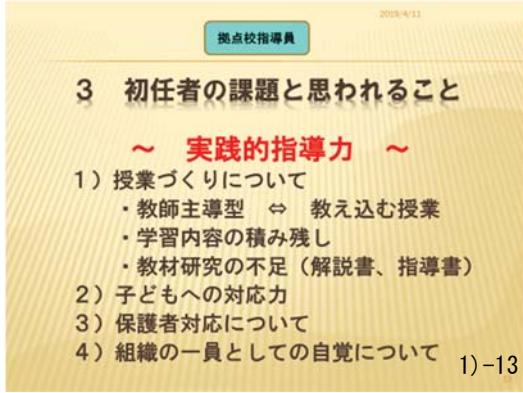
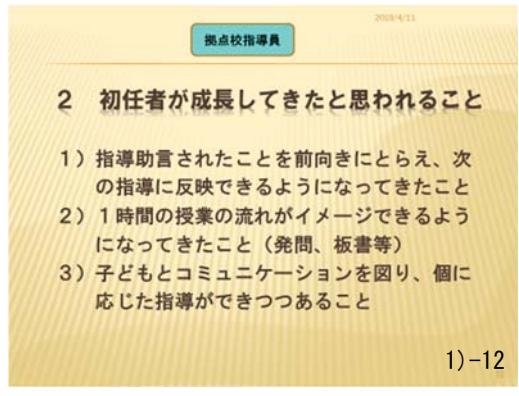
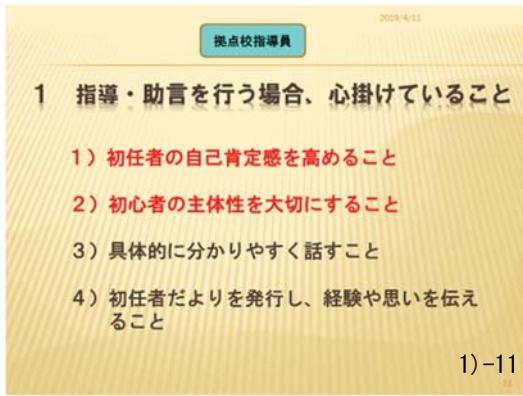
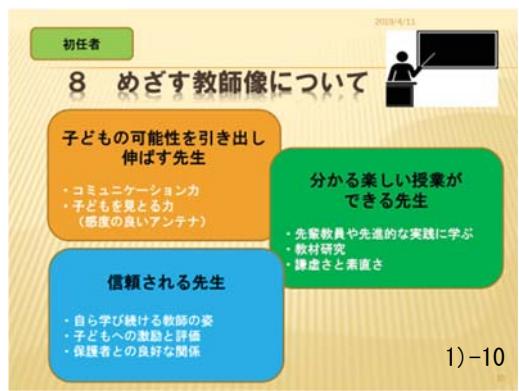
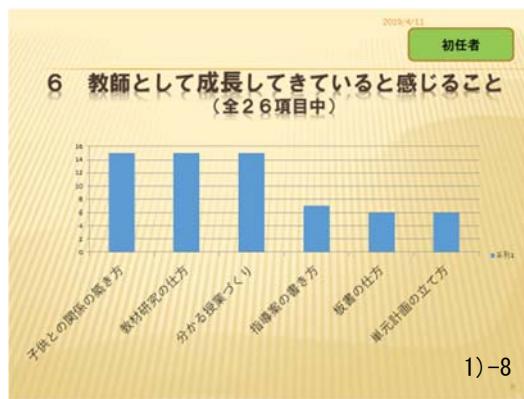
【内容】講座1：初任者・若手教員育成のために

【対象】拠点校指導教員

#### ① 初任者及び拠点校指導教員アンケート結果の考察

初任者や初任者を指導する拠点校指導教員を対象に行ったアンケート結果より、初任者の実態、拠点校指導教員の悩み等について触れた。





2018/4/11 指導校指導員

### 5 指導上、困っていることや悩んでいること

- 1) オーバーワークと精神的なフォロー
- 2) 新しい教育の流れについての理解  
(アクティブラーニング、プログラミング教育等)
- 3) 専門教科外についての指導助言

※ 若い教員とともに・・・

1)-15

2018/4/11 指導校指導員

### 6 指導校指導教員としての難しさ

- 1) 学級内でのトラブルへの迅速な対応  
・兼務校での勤務
- 2) 初任者の課題に応じた指導助言  
・新卒の初任者と講師経験のある初任者
- 3) 専門教科外についての指導助言
- 4) メンタルヘルスへの対応

1)-16

2018/4/11 集計を終えて

### ～ 初任者が教師として自立していくために ～

- ・謙虚さ ・貪欲に学ぶ姿勢 ・社会性

- 「先の見通し」がもてるようになること
- 気軽に語り合う職員団体があること
- 学び合う場と機会が保障されていること

**【指導校指導教員】**

- 初任者を育てる指導者として
- 初任者の良き理解者、相談者であるとともに良きアドバイザーとして
- 学校のコーディネータとして

1)-17

## ② 初任者指導、カンファレンスの進め方

カンファレンスにおける初任者への支援の仕方を実際の授業ビデオ等を使って説明する。

**初任者指導に関わる  
先生方のために**

### ②カンファレンスの進め方

～教師として成長し続けるために～

和歌山大学

1)-18

初任者指導年間計画(月別の重点的な指導事項)		
月	大項目	小項目
4	○教師の身体的技術 □子どもへの対応 ○学習環境 ○教材研究・授業展開	・授業への心構え、声、言葉遣い。 ・児童の仕方 ・学習環境は、開始と終了 <b>・審査</b>
5	○教師の身体的技術 □子どもへの対応 ○学習環境 ○教材研究・授業展開	・自信、表情 ・乳歯の仕方、進め方 ・学習環境は、 <b>・審査</b>
6	○教師の身体的技術 ○教材研究・授業展開 ○授業技術	・分析、立ち位置、ユーモア ・教材研究、教科書、めあて ・板書、ノート指導
7	○教材研究・授業展開 ○授業技術	・本日の指導計画、導入 ・時間、指導、確認
9	○教材研究・授業展開 ○授業技術	・構成・時間配分、まとめ ・想言、会話の取り上げ方

1)-19

**映像を見ながらの  
ふりかえりのポイント**

**月別の重点的な指導事項に沿って**

**到達してほしい  
場面と到達して  
いる場面**

1)-20



### 授業評価シート



1) -22

### 授業評価シート

	Step0	Step1 授業実践力の準備段階	Step2 授業実践力の基礎形成段階
授業への心構え	0	元気に授業を行おうと心の準備ができ授業に臨んでいます。	1 元気に明るく授業を行おうと、心と体の調子を整え、ゆとりをもって授業に臨んでいます。 2
話す 声 (voice)	0 いていている。	1 開き取りやすい大きさの声で話すことができる 2	3
言葉遣い (word)	0 がけている。	1 丁寧な言葉を選んで話すことができる 2	3
話術 (speech)	0 こどもたちに語りかけることができる	1 適切なスピードで無駄な言葉が少ない話し方ができる 2	3
			4

1) -23

### 授業評価シート



1) -24

### 初任者 よく見かける場面

1) -25

### 場面1 目線・表情 BEFORE



1) -26

### 場面1 目線・表情 AFTER



1) -27

### 場面2 導入の工夫 BEFORE

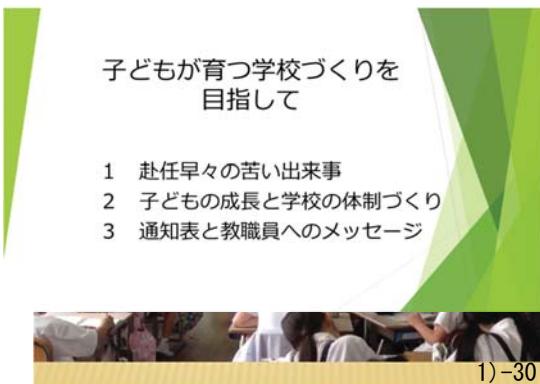


1) -28

### 場面2 導入の工夫 AFTER



1) -29



### 【参加者の声】研修後のアンケートより

(良かった点)

- ・授業評価シート 6
- ・実際の初任者の映像（ビデオを使うこと） 6
- ・具体的な話、実際の指導事例 2
- ・初任者の授業のふり返り 1
- ・カンファレンスの進め方 1
- ・初任者や拠点校指導教員のアンケート結果からの話 1

(改善点・お願い)

- ・他の話も聞きたい、もっと聞きたい 3
- ・学期に1回このような研修を 1
- ・教員多忙対策を 1
- ・指導教員の負担にならないよう 1
- ・初任者指導を相談できる機会を 1
- ・タブレットの貸し出しを 1

(自由記述)

- ・評価シートに観点が記されていたのでとても助かると思いました。  
あれもこれもではなく、その日、次回への観点を示して協議するのはとても有効であると分かっていながら、色々と気になるので、1つか2つに絞って話すための視点を与えてもらいたいかったです。
- ・本日はありがとうございました。実際に初任者の先生や担当の先生のアンケート結果をもとにお話しをいたいたり、映像を用いた初任者の先生方への関わり方を具体的にお話し下さいました。初めての担任で分からないことが多い、不安な気持ちでいっぱいだったのですが、目指していく方向が見えてきました。初任の先生方と有意義で楽しい1年になるように励んでいきたいと思います。機会があれば、ご紹介いただいた他のお話も伺いたいと思います。



第1回 和歌山市 拠点校指導教員研修

- ・初任者並びに拠点校指導教員のアンケートの話の中から、初任者の先生や拠点校の先生の悩みの多さに驚かされました。それとともに、初任者の先生にどのように関わっていくかを考えさせられました。初任者に関する指導の中で、先生に寄り添って行うことの大切さも感じました。色々と工夫しながら、初任者とともに取り組んでいく大切さを感じました。ビデオの中にも参考になることも色々あったので参考にしていきたいです。評価シートもポイントを決めて取り組んでみたいと思いました。
- ・拠点校指導教員として初任者にどのように接していくべきか、少しイメージがわきました。具体的なお話だったので分かりやすかったです。本校の初任者は教職大学院のプログラムを受けるので楽しみになりました。
- ・実際の指導教員の指導事例で、大変参考になりました。自分でもやろうと思っていたこと、そうすればいいなと感じたこと、勉強になりました。ありがとうございました。もっと聞きたかったです。
- ・具体的に授業評価シートを提示していただき、ポイントや初任者の振り返り等で、1年後の目指す教師像（評価）が理解できました。カメラで録画する方法などもこれから試行錯誤していきたいと思います。
- ・初任者だけでなく教諭又は講師として担任を持つためには、お話をしましたが、4月当初から1ヶ月が本当に大切な時期だと思います。だからこそ、拠点校指導教員としてかかわることの難しさを感じています。私自身、拠点校指導教員の経験はありませんので、自分の経験を思い出し、学級担任として、より良く一年間でお互いに成長できるように努めたいと考えています。授業評価シートも参考にさせて頂きます。
- ・初任者がぶつかる様々な場面について再確認させていただきました。特に評価シートの各項目については、初任者指導に活用させていただきたいと思います。いろいろなタイプの子どもたちがいるように、いろいろなタイプの初任者がいて、いろいろなタイプの先生がいることを踏まえて指導していきたいと思います。今年度も毎回、初任者指導資料「白墨一握」をつくっていきます。
- ・私も断続的にスマホで動画（授業風景）をとっているが、一時間の流れの中で、気になる場面を取り上げて研修を深めることができるので活用していきたいと思う。  
“授業者がどれだけ本時のこと語れるか”というフレーズは、ギクッとしたポイントである。「反省 それだけ？」と思うことが多々あったからだ。そういう視点も忘れないでおこうと思う。問題点はわかっているのに、そう指導すればいいかわからないことがある。また、指導していることを取り入れようとしない初任者もいる。そんなとき相談できる場があればと思う。 授業評価シートを活用していきたい。
- ・とても参考になりました。特にカンファレンスの進め方 参考になりました。  
初任者が自分に気付くことが大切だと思いましたが、さまざまな手法を教えて頂いたように思います。ビデオもいいですね。又、撮る位置も工夫することがわかりました。  
今日で4日目になるのですが、初任者さんの授業を見せていただくと気になって、すぐ声

をかけたくなります。主体性を尊重しなければならないのですが、がまんの日々です。又、このような研修を行っていただけたら勉強になります。初任者さんと共に成長できればと考えています。よろしくお願ひします。

- ・初めての初任者指導で、これから「指導」にあたっての参考になることを聞くことができた。また、初任者へのアドバイスで、どこまで踏み込めばいいのか、といった点で現在若干悩み中である。
- ・初任者研修の課題や成果がパワーポイントやビデオにより分かりやすく参考になりました。このような拠点校指導教員の研修が学期に一回あってもよいと思います。
- ・参観授業の記録を細かくとって、初任者と話し合いをしましたが、ビデオはいいですね。でもタブレットを持っていないので・・・。(貸し出してくれるといいのですが)参観前に1つ今日の課題を決めて授業に望むのは、初任者にとって取り組みやすいな~と思います。初任者は十人十色なので、その人その人に合わせた指導をしていきたい、共に学ぶつもりで取り組みたいと思います。

## 2) R1.07.24 和歌山市 新任校園長研修

【内容】講座7：子ども・教員が育つ学校づくり

【対象】新任小中学校長・新任幼稚園長

① 子どもが育つ学校づくりを目指して

学校長としての経験談をもとに自らの目指した学校づくりについて紹介する。

2)-1: 子どもが育つ学校づくりを目指して

- 1 赴任早々の苦い出来事
- 2 子どもの成長と学校の体制づくり
- 3 通知表と教職員へのメッセージ

2)-2: 1 赴任早々の苦い出来事

- (1) 学校運営方針についての話  
□5つのワークと凡事徹底について
- (2) 入学式翌日の出来事  
□想定外の出来事への対応と報・連・相
- (3) 出来事から気づいたこと・分かったこと  
□校長としてのビジョンや想いは・・・?  
□具体的に、分かりやすく、丁寧に、繰り返し

2)-3: 2 子どもの成長と学校の体制づくり

交換授業（3年～5年）	T・T指導（5・6年教員等）
例 3A担任（社会科担当） 3Aと3Bの社会科を指導 3B担任（理科担当） 3Bと3Aの理科を指導	～算数科を中心に～ 1年生 ④ 6年担任（各3） 2年生 ④ 5年担任（各3） 3年生 ④ 専科教員（国工）各2) 4年生 ④ 専科教員（家庭）各2) 5年生 ④ 教頭（各2時間） 6年生 ④ 校長（各2時間）
■新しい教員との出会い ■教員の意識の変化 ■教材研究の強化（軽減） ■他学級の学級づくりに学ぶ ■学級の風通し	■個別の指導と支援の充実 ■同僚教員の指導方法に学ぶ ■学級の風通し

2)-4: 3 通知表と教職員へのメッセージ

- 通知表所見は下書き時に提出  
◇誤字・脱字のチェック・不適切な表現の添削  
◇若手教員から殆どの教員への広がり
- 校長から教職員へのメッセージ（校長所見）  
◇学期末に教員一人ひとりに手渡す  
◇プラスの評価と校長の思い

### メッセージ例（1）～中堅女性教諭～

6年生主任として、また6Aの担任として、1年間子どもたちの指導ありがとうございました。

経験と実践に裏打ちされた卓越した指導力で素晴らしい成果を挙げてくれました。何よりも子どもたちの変容した姿がそのことを物語っています。初めての6年生担任でプレッシャーも大きかったと思われます。しかし、見事期待に応えてくれました。「○○先生が担任でよかった。」と学級児童の誰もが思っていること思います。

いよいよ卒業の日が迫ってきました。当日、子どもたちの灑々しい姿を目にした時、一年間の苦労や疲れが一瞬にして吹き飛ぶことでしょう。6年生担任にしか味わえない至極のひと時です。感激のうれし涙をいっぱい流しましょう。そして、ゆっくりと1年間の思い出にひたりましょ。

お疲れさまでした。

2)-5

### メッセージ例（2）～2年目女性教諭～

所見は、子どもたち一人ひとりの伸びやかんぱりをつぶさに捉え、簡潔・明瞭に表現できています。子どもたちの励みになる所見の書きぶりに、○○さんの大きな成長を感じました。もらった子どもや保護者も大いに喜んでくれることでしょう。このことが、学級担任への援るぎない信頼へつながります。

2学期も引き続き、子どもたちの指導をよろしくお願ひします。

「お母さんを亡くす」というとても悲しい出来事がありましたが、よく頑張ってくれました。お母さんもあなたが、「子どもたちから慕われる先生」「職員から可愛がられる先生」になってくれることを、天国から願っていると思います。

「がんばれ、○○」私はいつもあなたを応援していますよ。

2)-6

### メッセージ例（3）～中堅男性教諭～

所見は、丁寧且つきれいな文字で書かれとても読みやすいです。

○○さんの子どもたちをやる気にさせる「話術」には、いつも感心しています。抑揚のある口調と子どもたちの琴線をくすぐる言葉かけはすばらしかったです。○○さんの大きな宝物だと思います。

また、先日の研究授業は、国語科の指導の在り方について貴重な一石を投じてくれました。私自身もおおいに勉強させてもらいました。授業力向上は、私たち教師にとって一丁目一番地です。学校の良き牽引役になってくれることを期待しています。

お疲れさまでした。

2)-7

## ② 若手教員の育成を目指して

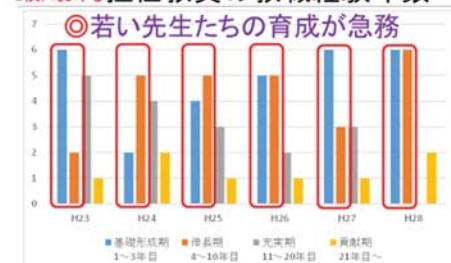
学校長としての実践例をもとに初任者を含めた若手教員の育成方法について考える。

### 初任者指導に関わった若手教員の育成



2)-8

### S校における担任教員の教職経験年数



「教員としての資質の向上に関する指標」(県教委H30.5.4)

2)-9

### 若手教員に言い続けたこと

#### 子どもにとって「楽しい授業」の創造



2)-10

### 若手教員の“伸びしろ” “ジャンプ力”



2)-11

若手教員の“伸びしろ”“ジャンプ力”



2) -12



2)-13

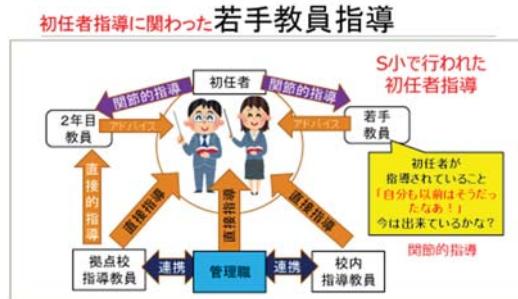
## 初任者指導に関わった若手教員の育成

#### ①月2回～3回程度の訪問指導

- ・**初任者授業** + 若手教員（講師も含む）授業  
※ 5分でも様子を観に行く
  - ・**放課後カンファレンス**  
※できるだけ参加

②月1回程度の講師授業日 > 校長参観  
・放課後個別カンファレンス

2)-14



2)-15

◎授業ビデオをもとに参加者全員で検証

- ・初めの5分
  - ・字習規律
  - ・教師の所作
  - ・ほめ方
  - ・発問、指示、説明
  - ・ねらいを貫く
  - ・捨てる教材
  - ・構造的板書
  - ・理論と実践の往還



2)-16

## 若い先生に言い続けたこと

### ◎子どもにとって「楽しい授業」の創造



2) = 17

#### 【参加者の声】研修後のアンケートより

(良かった点)

- ・管理職としての経験・体験 7
  - ・具体的な事例 2
  - ・気づきの多い研修 2
  - ・ワークショップの話し合い、  
他のグループの発表 2



和歌山市 新任校園長研修

(改善点・お願い)

- ・先輩からのアドバイスや体験談を聞ける機会を 1

(自由記述)

・様々な事例をもとにお話いただいたので大変ありがとうございました。本校も様々な課題がありますが、職員が前を向いて踏ん張ってくれています。このことについて感謝の気持ちをもち、そして言葉で伝えるように心がけています。苦しいけれどその中に「楽しみ 愉しみ」を見つけながら仕事に励んでいきたいと思います。本日はありがとうございました。



・今回の研修では和歌山大学の3名の先生方から具体的な事例も多く含めたお話を聞くことができ大変参考になりました。新任校長として、日々の業務に追われているところもあるので、今回の研修で教えていただいたことをもとにもう一度学校運営について考えていきます。本日はありがとうございました。

・それぞれの先生方が管理職として大切にしてこられたことを伺うことができ、貴重な時間をいただきました。中家先生からは、子供を観察する力をもたせ、子どもの良さを引き出す力を育てる学ぶことができました。南先生からは、校長のビジョンや想いは伝わりにくいこと。伝えるためには具体的に分かりやすく丁寧に繰り返す必要があり、教職員の思いをしっかりと受け止めることができました。

貴志先生からは、若手育成のためのノウハウを伺うことができました。

グループワークでは、「こんな初任者どうする?」と題して、学校として若手教育の育成、保護者からの苦情対応について協議することができた。授業改善、授業規律の確立、学習環境の整備、保護者への説明等、様々な視点で考えていかねばならないと思いました。今後も、先輩からのアドバイスや体験談を伺える機会をいただければありがたいと思います。

・3名の校長経験者から、過去の話を取り入れながら、対処方法を伝授していただき、今後の参考になりました。管理職が想っているほど教頭は理解していないので、何度も同じことを繰り返し伝えていることが重要だと感じました。楽しい授業をするのは、準備等が充分出来ていなければならないこと、おもしろい授業、力のつく授業も工夫が必要であることを再確認しました。

・4月以降、相次いでいろいろな問題が起り、毎日大変な日々を過ごしています。今日の講師先生方も、校長先生時代に大変だったというお話を聞きしてやはりなと思いました。校長職を続けられるか心配になりました。

特に新採教員について、本校ではここしばらくなかったため、本年久しぶりに配置となり、対応は手さぐりの状態でした。今日いろいろとお話を聞きして、校長としてやっていくことがいろいろあるなと感じました。また、後半のワークショップで、各先生方との話し合いで、いろいろな意見を聞かせて頂いたので、本当に困った時はまわりの先生方に

相談するのもよいなと感じました。本日は本当にありがとうございました。

- ・3人の先生方の経験に基づいた事例について話をうかがい、とても参考になりました。ありがとうございました。特に先生方が意欲的に頑張れるよう様、校長室に気軽に来れるように飲み物を用意するなど、先生方との関係づくりの大切さについて教えていただきました。

校長の思いや考えは、なかなか先生方には伝わらないことや問題が起こった時の先生方の協力体制や校長のリーダーシップの大切さなどについても理解できました。先生方のメッセージなどについては、ぜひ参考にしたいと思いました。ありがとうございました。

- ・3人の先生方のお話を聞きして、校長としての職務のために改めて気づきの多い研修となりました。まず、苦情対応では、親の言い分やいろいろな状況もあるが、一番大切なことは「目の前にいる子どものために何が一番大事であるか」ということからずれないようにということが重要であると思いました。校長からの教職員へのメッセージ（校長所見）はすばらしいなと思いました。若手教員の育成については、伸びしろを見込んで、よりジャンプできるように、相担教員を組み合わせたり、人事の面でも配慮する方法について聞かせていただきとても参考になりました。

### 3) R1.07.30 和歌山市 小中学校拠点校指導教員・校内指導教員研修

【内容】講座3：ねらいを貫く授業づくり；初任者の授業ビデオを観てのワークショップ

【対象】初任者研修拠点校指導教員並びに校内指導教員

【研修の流れ】

① 初任者が行った授業 DVD 視聴

- ・3年生道徳 資料名「明るくなった友達」（出典 学研「みんなのどうとく」）  
内容項目B(9)友情・信頼
- ・授業日 9月3日（2学期初めての訪問日での授業）
- ・観点に沿って気づいたことや改善点（初任者へのアドバイス）を付箋に書き込む作業を行う。

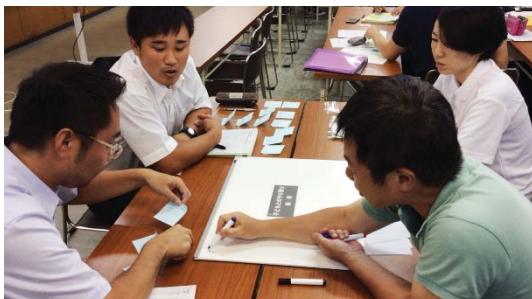
② 授業改善の手立てについての観点別グループ別協議

（協議の観点）

- ・授業構成（導入、場面構成、教師の発問、内容項目への迫り方等）
- ・子どもとのやり取り、所作（子どもの発言を受けて）
- ・板書（構成、内容項目への迫り方）

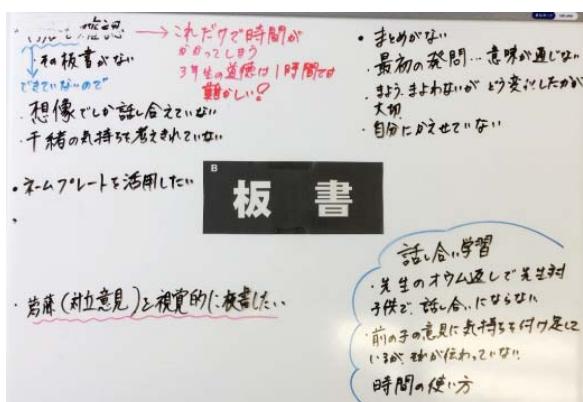
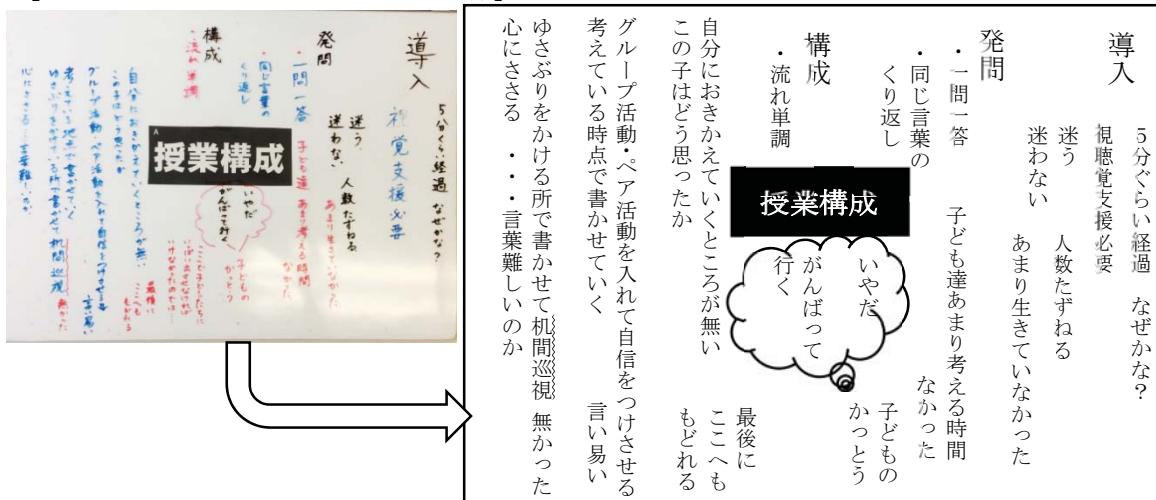
各々、付箋にメモしたことを出し合いながら、それぞれの観点をさらに細かく分類し、初任者が行った授業を分析、初任者へのアドバイスについて考える。

### 【グループ別協議の様子】



## 初任者の授業改善の支援方法について真剣に話し合う参会者

## 【ホワイトボードにまとめられた内容】



### ③ グループよりの発表



観点（授業構成・板書・子どもとのやりとり）別に各グループの意見を提案

### ④ まとめ

#### 【参加者の声】研修後のアンケートより

(良かった点)

- ・グループで意見交換ができたこと、他の先生の意見を聞けたこと 25
- ・実際の初任者の授業 DVD を観たこと 22
- ・南先生のまとめのお話 10
- ・授業を観る観点や話し合いの観点が決まっていたこと 7
- ・初任者の授業ビデオを撮り、カンファレンスで使うこと 5
- ・異校種の先生の意見を聞けたこと 2

(改善点・お願い)

- ・指導教員同士が話し合える時間の確保 3
- ・時間が短かった 2
- ・授業に入り込めない子どもをもつ初任者へのアドバイス 1
- ・計画書、報告書の簡略化 1
- ・初任者への指導時のビデオ研修の必要性 1
- ・授業以前の事への指導>初任研で 1
- ・初任研でも今回のようなビデオ研修を 1
- ・拠点校指導教員と校内指導教員が初任者の授業を参観できる機会を 1

(自由記述)

- ・初任者の授業映像を見てグループディスカッションすることで、初任者指導について考えることができた。初任者に指導することはもちろん、一方的に指導するだけではなく、初任者が自分自身で振り返り、気づき、改善し、実行していくような機会・支援が必要だと感じた。今回の研修を活かして今後の初任者指導に生かしていきたい。
- ・今回の講義を受けて、私が普段から初任の先生との関わりについて考える良い機会になりました。様々なところで改善すべき点があるのなら、最後の説明であったように伝えていけたらよいと思いました。

- ・今回のグループ別協議はたいへん意義深かったと思う。自分の授業を見る目が如何か？と思っているので、様々な指導員の意見を聞き安心しました。ありがとうございました。
- ・初任者の授業の視聴をもとにグループ内で意見交換できるという本日の研修はとても有意義であった。初任者の授業力を高めるために「そんなこともアドバイスすべきだな」「もっときびしくした方がいいな」など今までのカンファレンスでの話を振り返ることができた。初任者を育てるという意識をもっと強く持っていきたいと思う。時間が短かったのが残念だった。
- ・道徳の授業に対する意見を聞き、どう指導すべきなのか、どう助言すべきなのかということを学ぶことができたと思います。ただ校内指導員として自分自身に至らぬ点があり、初任者の指導まで手が回らないのが現状であります。授業参観する時間が無かったり、参観してもらう機会も少ないと感じています。指導員として自分自身の授業力を上げること、伝え方を工夫することなど、身に付けなければならぬことがたくさんあると実感しました。生徒を相手にするよりも初任者を相手にすることのむずかしさ一学期中感じたことです。何倍もエネルギーのいることだと思います。私もたくさんの方たちに教えていただいて今があるので、次は教える立場として努力していきたいと思います。
- ・実際に自分の実践を記録してみんなと自分の姿、授業をふりかえることは有意義なことだと改めて感じたので、校内でもまた取り上げていきたいと思う。自ら気づきを考え、課題解決方法を探すこと、授業をたくさん観ること、同じ学年だけでなく休憩時間にもいろいろな教室の板書や学習教材、環境を見ながら歩く、わからなかつたら教師に話しかけてくることをお互いにしようと声をかけっています。私も初任者もいろいろなことを経験する、どうすれば子どもにそのことをかえしていくかがこれから実践につながるよう思います。
- ・授業の映像をふり返る今回の研修はとても有意義でした。グループごとに異なった視点で視聴し協議することで、他の先生方の意見も聞かせていただけたので、自分自身も振り返るよい機会となりました。さらに全体の発表でも、視点ごとに様々な話し合いの内容が出され、普段の研究授業の協議会以上に学ぶことが多かったと思います。実際、校内指導教員として初任者の授業を見せてもらう機会はほぼありません。拠点校指導教員の先生といっしょに初任者の授業を参観する時間がたとえ学期に1回でもあれば、学び合える機会になるのではと考えています。
- ・新採の先生にどんな言葉かけをするのか日々悩むところではありますが、今日の研修で色々と指導の観点や気づかせることの大切さも教えてもらいました。子ども同様にあれこれ言いたいこともあるけれど、まずはほめることもはじめられたらなと思いました。初任者に指導すると共に自分自身も一緒に学び合えたらと思います。
- ・グループワークを通して、指導教員の初任者指導の視点を構築することができた。ほめること、課題を改善するための支援・手立ての方法が様々あり、感心するところも多くあった。その中で、今の立場で意識が希薄であったことは、初任者をほめることだ。「ほめる」

は大切であることは理解しているが、あまり実践していなかったように思う。今日の協議会の中でほめることの大切さが出てきた。自分が初任の時、その時の指導教員にたくさんほめてもらったことを思い出した。ほめてもらうと自信がつき、自分の課題点にも前向きに向き合うことができた。今、本校にいる初任者にも失敗を恐れず積極的に子ども達に向き合ってほしいと思っている。そうなるためにも、今の自分がどうあるべきかふり返る機会となった。ありがとうございました。

- ・本日はよい機会をいただきました。ワークショップでは、よいグループに入れていただき、私自身の日々の実践のふり返りもさせてもらいました。初任の方とはお互いの今日の様子で、うまくいったこと、困ったことなどを交流し、次の課題を見つけ教材の準備をしています。今後も気づきを広げていけるように接していくうと考えました。そのため、今日教えていただいた三つの観点を大切にすること、ほめることを大切にしていきたいと思います。なによりも自分のステップアップをしていかなければと強く感じました。ありがとうございました。
- ・グループに分かれ3つの観点で協議することができ、自分では気づかない指導すべき点に気づかされました。子ども達のやり取りだけでなく、所作やくせにも助言が必要なのだなと思いました。たくさんの課題の中で、どの事柄について助言が必要か、最終的にどんなことを理解させたいかを考えて支援していきたいと思いました。子どもの反応によって指導案通りに進まないこともありますが、1時間ごとの山場を大切にしながら展開の幅を一緒に広げていきたいと思いました。
- ・今日の研修会に出席するまでは、3人の先生方の講義なのだなと思っていました。初任者の授業を視聴してのグループカンファレンスでしたので少し驚きましたが、実際の授業を通しての話し合いでしたので、本当に授業を切り取ってピンポイントの指導内容について研修することができました。授業録画を初任者自身に見せることで、自分の授業での姿勢について、実際の画像で自己発見できるのが良いと思いました。本校でも活用していきたいと思いました。また、南先生の実践をお話していただき、初任者のおかれている授業への思いや悩み、指導者としての心構えや手立てについてとても勉強になりました。ありがとうございました。
- ・実際の授業を見て、他の指導員の先生方の貴重な指導のポイントを聞くことができ大変ありがとうございました。日々授業が進む中で、なかなか実践していくことが難しい場面もありますが、指導していくことの大切さを改めて認識しました。ほめることも。校内指導員も学級担任を持つ中での指導は、前回、校内指導員を担当した時より、大変多忙を感じています。初任者と向き合う時間が取れないのが実情です。いつでも相談してもらえるよう関係性を築いていきたいと思います。
- ・校内指導教員として、改めて自覚を持ち、どう2学期をスタートさせるのかを考えるきっかけを頂ける協議会でした。特に実際の授業から考えた上でどういった視点でアドバイスを送っているのか、大学の先生方からお話を聞いていただいたので、今後の参考にしたい

です。

- ① 全てを伝えるのではなく視点をしづらすこと
- ② 気づきを促がすこと

この2つを大切にすることで、自分も初任者にとってもよいと思える一年間にしたいと思います。校内指導員はたいへんやりがいのある仕事だが、計画書や報告書の提出等が少し大変だと思う。（特に1学期）簡略化できればありがたいと思いました。初任者とともにビデオでの研修を見たが、本当に必要なか疑問に思った。初任者は提出するものが多いので、不慣れな初任者がする業務を減らし、より良いものにしてあげたいと思いました。

・拠点校指導員、校内指導員ともに新採用員が向上できるようにという思いは同じである。

しかし、校内での指導の視点は多少なりとも違いがあると思う。拠点校指導教員同士、校内指導教員同士の話し合いの機会があるとよいと感じる。校内指導教員として、他校でどんな指導、接し方をしているかが気になる部分が多いと感じるので・・・。

・初任者の授業力をどう延ばすをテーマにご講義をいただきました。映像を見るることはとても有意義だと私も思います。優れた授業を見るとともに、大事なのは初任者ご本人の普段の授業のVTRを見ながら、支援・反省等をしていくことだと考えます。本人自身のくせ（いいくせならいいのですが）を指摘してもらうだけでは納得できないところもあるので、映像を見ながら確認できると思います。

初任者の授業VTRを通して、①授業構成 ②板書 ③教師の所作・子どもの反応 の大きく3つの要素に分けて、それぞれ感想、意見を述べあった。多くの方々の意見を聞く中で自分にとって多くの事を学んだ。授業一つとっても切り口はいろいろあり、自分の考えの及ばないことがたくさんあった。今後の指導に役立てていきたい。

南先生のお話で、初任者ご自身のVTRを見ながら協議することは自分自身が欠点や弱点に気づくことになる。やはり効果的であると言えます。私も事業にとても大切なのは、リズム・テンポ・子どもへの評価だと思います。

#### 4) R1.11.28 大阪府岬町立深日小学校 校内現職研修

【内容】講座2：研究授業を通しての校内研修の持ち方

【対象】小学校全教員（現職教育の一環として）

この講座は各学校が行っている現職教育でご利用いただけるよう開発したプログラムで、研究授業を通したカンファレンス（授業協議会）の進め方の研修会です。大学で用意したサンプル授業のDVDを視聴してカンファレンスを行ってもらうことができますが、この日は4年目の若い先生が研究授業を行ってくれ、そのカンファレンスを放課後に行いました。

【研修の流れ】

- ① 研究授業参観
  - ・1年生国語科 「見つけたことを しらせよう」（教育出版）



深日小学校 校内研究授業の様子

② 研究授業カンファレンス

- ・授業者のふり返り
- ・授業ビデオ視聴
- ・参観者からの授業者への質問・意見
- ・大学教員からの指導



深日小学校 研究授業カンファレンス

【参加者の声】研修後のアンケートより

① 本日の研究授業はあなたの今後の授業づくりに役だったと思いますか？

役立った	ある程度役立った	あまり役立たない	役立たない
8	2	0	0

② カンファレンス（協議会）の流れ、持ち方は、適切であったと思いますか？

適切であった	ある程度適切であった	あまり適切でない	適切でない
7	3	0	0

- ③ カンファレンスの中での大学教員の助言・アドバイスはあなたの今後の授業づくりの参考になりましたか？

参考になった	ある程度参考になった	あまり参考にならない	参考にならない
8	2	0	0

- ④ 次回このような研修を開催すればご参加頂けますか？

参加したい	都合がつけば参加したい	あまり参加したくない	参加しない
9	1	0	0

(自由記述)

・2回も来校いただき貴重なご意見をたくさんいただきほんとうにありがとうございました。この授業で”子どもたちに付けたい力”をもっと明確にしておくことで、めあてもはつきりし、さらに子どもたちがワクワクしながら書く力を引き出せたかなあと今になって思います。今回改めて思いました。

「授業は難しい でも楽しい」

これからも楽しみながら授業づくりをしていきたいと思います。

・何度授業をしても「こうすれば良かった」といろいろ後悔が出てくることが多く、気づけるだけでも次の一步にはなるのですが、実際にベテランの先生方の授業を見てみたいと思いました。

・ちょうど書く単元をしているので、文の型の提示等工夫したいと思います。

日本語には色々な表現があるので、様々な方を知ってもらいたいです。

・貴重な経験ありがとうございました。このように丁寧に親切に関わっていただけて、より良い授業ができたのではないかと思います。今日のことを参考にこれからも毎日の授業に取り組んでいきたいと思います。

・今回はたくさんの先生方が研究授業のために来ていただきありがとうございました。授業に子どもたちがのってくる上で大切な事、とてもためになりました。意識して取り組んでいきたいと思います。ありがとうございます。

・このような機会を持てたことがとても良い学びになりました。谷内先生と共に考え、悩んだことは自分自身の力になったと思います。これからも学ぶ機会があれば積極的に参加していきたいと思います。

・単学級ですので、単元を見通して相談しながらつくるということが日常的にできません。ぜひ機会があれば、単元計画から相談しながらつくってみたいです。

・1年生の授業をみせていただいてとても勉強になりました。模擬授業から参加させていただきましたが、子どもの実態に合わせて考えることができてよかったです。ありがとうございました。

・模擬授業からみさせてもらったので、今日の公開授業をとても楽しみにしていました。今日の授業の中で、1年生の授業の難しさを教えてもらい、また授業での疑問点等を大学の先生のお話から学ぶことができました。ありがとうございました。



## (B) 初任者研修履修証明プログラム



# I 「初任者研修履修証明プログラム」の概要

## 1. 初任者研修履修証明プログラムについて

2016年度4月の和歌山大学教職大学院開学と同時にスタートした「初任者研修履修証明プログラム」は本年度で実施4年目になる。もともとこの取組は、2013・2014年度に行つた「教員免許状修士レベル化に向けた和歌山大学教育学部と和歌山県教育委員会との連携・協働による初任段階の研修の高度化システム構築のための和歌山モデル事業（通称：初任者研修高度化モデル事業）」の成果を取り入れ、それをさらに発展させた形で実施されているものである。

本プログラムでは、教員採用初任年度から2年をかけ、科目等履修で修得した単位によって専修免許状の取得が可能となる。在職4年目以降に申請すれば、「教育職員免許法別表三」による軽減措置適用によって専修免許状の取得が可能となるものである。

本取組には和歌山市教育委員会の協力の下、平成2016年度は小学校6名・中学校4名の計10名、2017年度は小学校7名・中学校2名の計9名、平成2018年度は小学校4名・中学校6名の計10名、さらに本年度は小学校7名・中学校3名の計10名の新規採用教員を対象として実施してきた。

## 2. プログラム協力校 下線は本年度協力校

- ・和歌山市立藤戸台小学校（2016年度2名, 2017年度2名, 2018年度2名, 2019年度2名）
  - ・和歌山市立松江小学校（2019年度2名）・和歌山市立高松小学校（2019年度2名）
  - ・和歌山市立砂山小学校（2019年度1名）
  - ・和歌山市立西浜中学校（2018年度2名, 2019年度1名）
  - ・和歌山市立日進中学校（2018年度2名, 2019年度1名）
  - ・和歌山市立楠見中学校（2018年度1名, 2019年度1名）
  - ・和歌山市立有功東小学校（2017年度1名, 2018年度2名）
  - ・和歌山市立四箇郷北小学校（2016年度2名, 2017年度2名）
  - ・和歌山市立貴志小学校（2016年度2名, 2017年度2名）
  - ・和歌山市立貴志中学校（2016年度2名, 2017年度2名）
  - ・和歌山市立紀之川中学校（2018年度1名）・和歌山市立河北中学校（2016年度2名）
- （ ）内は実施年度と初任者数、なお、協力校はストレートマスターの実習校を兼ねている。



初任者研修履修証明プログラム協力校

### 3. プログラムでの学び

初任者研修履修証明プログラムでは、次の4つの学びによって研修を行った。

#### ① 訪問指導による授業参観および校内カンファレンス：初任者及び2年次教員対象

初任者には月3回の訪問指導を実施した。教職大学院や教育・地域支援部門の教員（研究者教員や実務家教員）が、各校に配属されている拠点校指導教員の先生方と連携しながら初任者の指導や支援にあたる。訪問時には原則初任者の授業を1校時参観し、放課後に行われる授業カンファレンスでは、授業の映像や画像をモニターに映しながら授業者による省察を行う。大学教員や拠点校指導員は、具体的な授業場面を取り上げながら初任者への指導を行う。ストレートマスターの実習校では、ストレートマスターもカンファレンスに参加し一緒に学ぶ。

2年次教員に対しては月1回の訪問指導を行った。初任時の授業づくりや学級づくりと比較しながら、個々の教員の成長を挙げ、さらに教師としての技量を高めていくための課題について話し合う。自身の課題を明確にするために授業評価シート（教職大学院作成）も使用した。



写真1：初任者による授業風景



写真2：2年次教員による授業風景



写真3：放課後に行うカンファレンス風景

## ② 教職大学院授業（講義・演習）；初任者対象

初任者は原則月1回大学で授業を受ける。県や市が実施する初任者研修がこれにあたる。

教職大学院では1年間を4つのクオーターに分ける4学期制をとっており、それぞれのクオーターで以下の内容の授業を行った。

### ◎第1クオーター（4月2日～6月10日）学校・学級経営I

#### <扱った主な内容・キーワード>

- ・4月2日 … 「学級」「学級開き」「学級経営案」
- ・4月18日 … 「学級通信」「家庭訪問」「学級懇談会」
- ・5月9日 … 「子ども相互のコミュニケーション」「こころの地図」「学級地図」
- ・5月30日 … 「校内外の安全指導」「学級集団の発達」「評価と指導の一体化」

### ◎第2クオーター（6月13日～8月8日）授業・教材研究I

#### <扱った主な内容・キーワード>

- ・6月13日 … 「示範授業①」「優れた授業とは」
- ・7月4日 … 「示範授業②」「学習指導案」「評価基準・規準」
- ・7月25日 … 「示範授業③」「ICTを生かした授業づくり」「模擬授業①」

### ◎第3クオーター（8月26日～10月30日）授業・教材研究II

#### <扱った主な内容・キーワード>

- ・9月5日 … 「単元研究」「教材研究」「模擬授業②」
- ・10月3日 … 「2学期の学級づくり」「示範授業④」「模擬授業③」
- ・10月31日 … 「模擬授業④」「ICT教育の先進例」「総合的な学習の時間の単元構想」

### ◎第4クオーター（11月25日～2月6日）授業・教材研究III

#### <扱った主な内容・キーワード>

- ・12月5日 … 「教科書研究」「プログラミング教育」「模擬授業⑤」
- ・1月9日 … 「子どもの実態」「外国語活動・外国語科」「理科教育指導法」
- ・2月6日 … 「模擬授業⑥」「教材研究」「課題研究 成果と課題」

授業シミュレーション教室で行う上記の授業は、教職大学院生（授業実践力向上コース）6名と初任者10名が共に受講する。ここで行う授業は、講義の他、教職大学教員による示範授業や初任者の代表者による模擬授業、また、グループ協議や単元づくりの演習等が組み合わされたアクティブラーニング形式の授業となる。



写真4：教職大学院での講義・演習風景



写真 5:初任者による模擬授業の様子



写真 6:教職大学院教員による示範授業

### ③ 集中講義履修；初任者及び2年次教員対象

8月、12月、1月には、専修免許状取得に向けた次のような集中講義を行った。

- ・「道徳教育(小)(中)」8月21日～23日、12月8日、1月12日 … 初任者対象
  - ・「学校・学級経営Ⅱ」8月21日～22日 … 2年次教員対象
  - ・「子どもの権利」12月14日、12月21日、1月11日 … 2年次教員対象
- これらの授業も教職大学院生（授業実践力向上コース6名+学校改善マネージメントコース9名）と共に受講する。



写真 7:道徳 集中講義



写真 8:学校・学級経営Ⅱ 集中講義

【初任者研修履修証明プログラム 2019 課題研究】

II 初任教員 課題研究

初任者研修履修証明プログラム 課題研究タイトル一覧 (2019年度)

	初任者名	学校名	担当学年・クラス 教科 等	課題研究タイトル
1	小西 海	藤戸台小学校	3年生4組	主体的に学習に取り組むことができる グループ活動の活用場面について
2	松井 豪	藤戸台小学校	2年生1組	自らの考えを持ち友達と関わり合いながら 問題解決に取り組むことができる授業づくり
3	稲井 杏里	松江小学校	5年生2組	学びの深めあいができるペア・グループ活動
4	小坂 祐貴	松江小学校	2年生2組	豊かな心と生きる力をはぐくむ道徳教育 ～人を思いやるやさしい子を育てる～
5	辻本 貴大	高松小学校	3年生2組	理科の授業における問題解決学習 ～「なぜ」「どうして」という問い合わせから授業を作る～
6	崎濱 木実	高松小学校	4年生2組	「社会的な見方・考え方」を働かせるための場面転換 ～個人・ペア・グループ～
7	伊東 弘輝	砂山小学校	3年生2組	クラス全員がつながる対話的活動をめざした授業づくり
8	森下 真実	日進中学校	1年 国語	話し合い活動を通じて、自分の意見を伝える学習
9	地阪 大祐	楠見中学校	1年・3年 技術	ワークシートの有効活用による 効率的な授業展開と評価の充実
10	小畠 秀介	西浜中学校	1年 家庭	ICT機器を効果的に生かし、わかりやすく生活に直結する 授業づくりについて

## 課題研究計画書

記入日：2019年8月29日

学校名	和歌山市立藤戸台小学校	氏名	小西 海
担当教科・学年・組	3年生4組担任		
研究課題 (研究題目)	主体的に学習に取り組むことができるグループ活動の活用場面について		
課題設定の理由 (問題意識)	<p>本学級は、比較的に学力が高い児童が多く、学級全体として活気がある。グループ活動の際は、自分の考えや意見を話し合うことができているが、課題についての解答を言うだけで、なぜそのようになったか理由を述べることができる児童は少ない。そこで、考えに課題や理由を順序立てて発表できるようにしたい。</p> <p>また、それぞれの児童がどのような考え方をしているのかを共有し、他者の考え方を理解し取り入れるなど、考えを広げ、深められるようにしたい。</p>		
研究目的	児童自身が自分の考えを持ち、主体的に学習に取り組む子どもを育てたい。そのため、授業の中でグループ活動を取り入れ、主体的に取り組み、全体での話し合いから、考えを広げるようになしたい。		
研究方法・評価	<p><b>【研究方法】</b></p> <p>自分の考えを進んで発表するためには、自分の考えに自信を持つことが大切である。そのためには適切な発問をし、適切な場面でグループ活動を行い、意見の交流を行うようとする。その際、自分の意見と違う場合に他者の意見を否定するのではなく、認めたうえで自分の意見を発表するように意見交流を行う。</p> <p>さらに、グループから全体へと意見を広げ、考えを深められるようにする。</p> <p><b>【評価】</b></p> <p>自分の意見をノートにまとめ、それらをグループ活動や全体発表の際に順序立てて発表できているか、ノートやワークシートの記述により、他者の発表を聞いて自分の考えがどう変わったか、考えを深めることができているかを評価する。</p>		

## 課題研究計画書

記入日：2019年8月9日

学校名	和歌山市立藤戸台小学校	氏名	松井 豊
担当教科・学年・組	2年生1組担任		
研究課題 (研究題目)	自らの考えを持ち友達と関わり合いながら、問題解決に取り組むことができる授業づくり		
課題設定の理由 (問題意識)	本校の研究主題は「問題解決に向けて主体的・協働的に学ぶ個と集団の育成～子ども同士の関わりを通して、学びを深める授業づくり～」である。これまでの授業の姿から、個人思考や発表など、「個」として取り組む活動は、行うことができる。しかし、「集団」として取り組む活動は、これから高めていけると感じている。自らの考えを発表するだけで満足してしまわず、自分の考えをもとに友達と話し合い、考えを深めることができる授業づくりを展開していきたい。		
研究目的	児童自身が自分の考えをもって、発表していくことだけではなく、友達の意見を取り入れ考え方の幅を広げていき、自身の考えとして活用していく力をつけることを、授業での意見の交流を通して、児童自身が感じることができることを目的とする。		
研究方法・評価	<p><b>【研究方法】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ペア学習やグループ学習の場を必要に応じて取り入れる</li> <li>・話し合い活動によって考えが深まる場面では、自身の考えを友達に伝え、友達の考えを聞く時間を十分に確保する</li> </ul> <p><b>【評価】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・初発にあった自身の考えが、友達との話し合い活動でどのような変容をし、深めることができているのかをグループ活動の話し合いや、問題解決の過程や授業後の振り返り等のノートの記述から見る。</li> </ul>		

## 課題研究計画書

記入日：2019年5月9日

学校名	和歌山市立松江小学校	氏名	稻井 杏里
担当教科・学年・組	5年2組担任		
研究課題※ (研究題目)	学びの深め合いができるペア・グループ活動		
課題設定の理由 (問題意識) ※	本学級の児童は、大変活発で、どんなことにも粘り強く頑張る児童が多い。これまでの授業の中でも、グループ活動を取り入れてきたが、ただ単に書いたことを報告するだけで児童間での話し合いが浅く、なかなか考えを深めることができず、学びの深め合いの点で課題が残った。そこで、グループ活動を通して児童間での考えが深まる取り組みができればと考え、この課題を設定した。		
研究目的	<p>以下の3つが価値あるグループ活動であると考える。</p> <p>(1)自分の考えに自信を持つ (2)違う考えを知る・受け入れる (3)自分の考えを修正する</p> <p>これらのペア・グループ活動を授業の中にいかに入れるかを研究する。</p>		
研究方法・評価	<p><b>【研究方法】</b></p> <p>特に算数科に絞り、深い学びあいのグループ活動について考える。ただ単に意見交流を行うのではなく、自分とは違う考え方を探したり、わからないところをグループ活動の時間を用いて友達に聞いたりする。</p> <p><b>【評価】</b></p> <p>ふりかえりによる児童の声（自分の意見が友達の発表によって変化したり、違う考えを知ることができたりしている）</p>		

## 課題研究計画書

記入日：2019年8月31日

学校名	和歌山市立松江小学校	氏名	小坂 祐貴
担当教科・学年・組	2年生2組担任		
研究課題 (研究題目)	豊かな心と生きる力をはぐくむ道徳教育 ～人を思いやるやさしい子を育てる～		
課題設定の理由 (問題意識)	本学級の児童は、明るく元気である。しかし、お互いを思いやる心はあまり見られず、自分の思いを強く主張しすぎてしまい、相手とけんかになることが多い。一人ひとりの児童が人を思いやり、やさしくできるように、道徳科を通じて思いやりの心情を育てる。また、それらの道徳的実践力を養う場として、生活科や特別活動を充実させる必要があると考えた。		
研究目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・道徳科の授業で児童の思いやりの心情を育てる。</li> <li>・道徳的実践力を養う場として、生活科や特別活動を充実させるための計画を立てる。</li> </ul>		
研究方法・評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>・道徳科の授業で思いやりの心情を育てる教材を複数時間扱い、授業中の様子、発言の内容、ワークシートの内容から思いやりの心情が深まったのかどうかを評価する。</li> <li>・生活科や特別活動で、1年生と一緒に取り組む活動等を計画し、実践する中で、思いやりのある言動が見られたかを評価する。</li> </ul>		

## 課題研究計画書

記入日：2019年9月6日

学校名	和歌山市立砂山小学校	氏名	伊東 弘輝
担当教科・学年・組	3年生2組担任		
研究課題 (研究題目)	クラス全員がつながる対話的活動をめざした授業づくり		
課題設定の理由 (問題意識)	<p>これまでの授業では、課題に対する教師の発言や説明が多く、子供達が主体的に取り組み、話し合いをするという機会が少なかった。さらに子供の実態として、自身の考えをもったり、それをノートには書いたりはするが、発表はできないことが多い。また、人の話や意見を聞く姿勢がよくなく、他者の発言に対する意見や反応が薄く感じた。一部の児童のみが意見を交換して終わる授業では、それ以外の児童が置き去りにされているような状況になってしまうだけでなく、そのような活気のない授業が続いてしまうと発言や発表の意欲はいずれ落ちてしまうだろう。</p> <p>クラス全体が授業に参加し、考えを繋げあうことで、一人でも多くの児童がわかる喜びを実感し、学びに向かう力を高まるようしたいと考え、この課題を設定した。</p>		
研究目的	<p>研究目的は以下の2点である。</p> <p>① 子供に興味関心を抱かせ、主体的に授業に臨む姿勢を作るためにはどのような導入が有効であるかを検証する。</p> <p>② 課題に対して子供たち一人一人が自分の考えを持ち、集団で思考する場面や話し合い活動で、子供同士が考えを繋ぎ合い、自身の考えを深めるためには、どのような教師の手立てが必要かを明らかにする。</p>		
研究方法・評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子供と過ごす学校生活の中で、どのようなものやどのような話題が子供たちの興味関心を抱かせるのかを発見し、授業の展開に積極的に取り入れる。毎週の指導教員の学校訪問の際の授業記録から、どのような変化があるかを検証する。</li> <li>・子供自身で、举手の回数や発表回数、目標の回数などを記入する“自己評価カード”を作成し、継続的な記録を取りその意欲の変化を読み取る。</li> </ul> <p>また作成時には「誰のどのような意見がよかったです？」のような、人の意見を聞くことを意識した項目や、人の意見と関連付けて発表できたかを問う項目も作りたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教科の指導以外にも、子供たちの興味をひきやすい話題などを用い、話し合いをする際の姿勢やきまりの基礎を学ばせる。</li> </ul>		

## 課題研究計画書

記入日：2019年8月20日

学校名	和歌山市立高松小学校	氏名	辻本 貴大
担当教科・学年・組	3年生2組担任		
研究課題 (研究題目)	理科の授業における問題解決学習 ～「なぜ」「どうして」という問い合わせから授業を作る～		
課題設定の理由 (問題意識)	1学期の理科の授業において、子どもたちは意欲的に取り組んでいた。しかし、主体的に問題を見出し、解決していくという単元や授業を計画することが不十分であった。そこで、子どもたちの「なぜ」「どうして」という疑問や不思議を生かした授業を展開することで、自ら調べてみたいと意欲的に学習に取り組むのではないかと考えた。		
研究目的	2学期の「電気で明かりをつけよう」の単元において、子どもたちの「なぜ」「どうして」を生かした授業づくりに取り組みたい。子どもたちの興味を引くような導入を工夫し、主体的に学習に取り組むことができるようとする。また、本時で追及していきたい学習課題を子どもたちが見出せるように、活動を工夫していきたい。		
研究方法・評価	本単元で子どもたちに身につけてもらいたい力を明確にし、単元を計画する。子どもたちが自ら問い合わせを見出し、その問い合わせを解決していくという問題解決型の単元を計画したい。そのためには、子どもたちが興味を持って学習に取り組むことができる導入の工夫を行う。  単元が始まる前に子どもたちに理科の授業についてのアンケートをとり、子どもたちの予備知識や疑問を授業に生かせるようにする。授業中の反応やノートのふり返りなどから授業についてふり返る。授業の振り返りには、今日の授業で分かったことと、これから調べてみたい疑問を書くようにし、そういった疑問や不思議を生かす授業づくりを行う。		

## 課題研究計画書

記入日：2019年9月23日

学校名	和歌山市立高松小学校	氏名	崎濱 木実
担当教科・学年・組	4年生2組担任		
研究課題 (研究題目)	「社会的な見方・考え方」を働かせるための場面転換 ～個人・ペア・グループ～		
課題設定の理由 (問題意識)	1学期に実施した社会科の単元「ごみのゆくえ」「わたしたちの暮らしをささえる水」では、子どもが楽しくいきいきと学んでいたものの、質の高い学びではなかった。それは、教師が学習の場を上手く設定できていなかったことによる。子どもを飽きさせないようにしたり、話しやすくしたり等、活動的にするためだけの場面転換であって、よりよい学びにするためのものではなかった。効果的な場面転換をし、子どもが思考を活性化させ、「社会的な見方・考え方」を働かせることができるような授業について考えたい。		
研究目的	「社会的な見方・考え方」を働かせるために効果的なペア学習・グループ学習の場面転換のタイミングを探りたい。また、子どもたちに仲間と学ぶよさを実感させたい。		
研究方法・評価	<p><b>【研究方法】</b>            社会科の大単元「安全なくらしをまもり隊！」（警察・消防のしくみ）における構想の際、子どもの実態や学習のめあて・内容に照らして、ペア学習やグループ学習が適切であると考えられる場面を設定する。実際に授業を行い、それが効果的であったか検証する。</p> <p><b>【評価】</b>            授業中の様子（発言、態度）、ノート、ワークシートを1学期のものと比べる。</p>		
その他 (質問・依頼・要望事項等あれば)	子どもの学びを記録したり比較したりするために適切な方法を教えていただきたいです。		

## 課題研究計画書

記入日：2019年8月25日

学校名	和歌山市立西浜中学校	氏名	小畠 秀介
担当教科・学年・組	1年生4組担任（家庭科）		
研究課題 (研究題目)	ICT機器を効果的に生かし、わかりやすく生活に直結する授業づくりについて		
課題設定の理由 (問題意識)	<p>本校の教育重点目標は、『自ら学び、ともに生きる』であり、目指す生徒像に『すすんで学び、考える生徒』という努力目標がある。私達は未来を切り拓く人材を育成するという使命のもとに、これらの目標を達成していく必要ある。そのためには、生徒が主体的に学習したいという気持ちを揺さぶる授業を開発し、自ら行動に移すことができる能力を育成する必要があると考える。家庭科は、自分達の生活との直接的な繋がりがわかりやすく、実習を通して自分の能力の向上が非常にわかりやすい教科である。そのような視点から、自分の身の回りの事柄に目を向ける習慣をつけ、家庭科の授業で身につけた能力を使い、日常生活に応用できるようにさせたい。</p>		
研究目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どのような場面でどのような課題を設定すれば、ICT機器を効果的に活用できるのかを考えていく。</li> <li>・生活に直結するために、どのような場面や課題設定が効果的であるかを考えていく。</li> </ul>		
研究方法・評価	<p><b>【研究方法】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業の導入にICT機器を利用し、学習意欲を刺激するような教材を提示する。</li> <li>・教科書から出発し、それを基に自分たちの身近な疑問や問題について考えるような発展的な学習をする。</li> </ul> <p><b>【手立て】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教室に手軽に使えるICT環境を整える。</li> <li>・生徒の生活や年齢に適した興味をひくデジタル教材を準備する。</li> <li>・効果的なグループ活動をするための環境づくりや雰囲気づくりに配慮する。</li> </ul> <p><b>【評価】</b></p> <p>ノート・ワークシートから、生活に結び付けて考えられているかについて生徒の達成状況や学習の深まりを検証・評価していく。</p>		

## 課題研究計画書

記入日：2019年8月30日

学校名	和歌山市立日進中学校	氏名	森下 真実
担当教科・学年・組	1年生4組担任（国語科）		
研究課題 (研究題目)	話し合い活動を通じて、自分の意見を伝える学習		
課題設定の理由 (問題意識)	新学習指導要領では第1学年の目標のひとつに「人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを確かなものにすること」があげられている。しかし、現状では話し合いを苦手とする生徒や意見を上手に伝えることが苦手な生徒が多くいる。話し合い活動を数多くこなすことで、自分の考えを伝える、そして相手の意見を聞き、自分と比較する力につけることができると考える。自分の意見を言う、そして相手の意見を聞くという両方を行うことで自分自身の思考を深めることが、今後生徒たちが大人になっていくうえで必要な力だと考え、この課題にした。		
研究目的	普段の授業で話し合い活動や自分の考えを発表する機会を多く作ることで、自分の意見を相手に伝えるための工夫を生徒自身が行うようになれるようにすること。		
研究方法・評価	<p><b>【研究方法】</b></p> <p>各単元で、少なくとも一回は話し合い活動を行えるように、単元を構成し授業環境を作る。現段階では、話し合いに集中することが難しい生徒も見られ、私語が多くなってしまっている。段階を踏みながら、少しづつ底上げをできるようにしたい。</p> <p>はじめは、「自分の言葉でまとめ、表現すること」を第一ステップとする。次に、「相手に伝わりやすい表現の仕方を考えて発表すること」である。さらに、「相手の意見を聞いたうえで自分の考えを整理し、とらえなおすこと」である。</p> <p><b>【評価】</b></p> <p>上記のことを基準として、授業中の活動、発表の仕方を評価する。また自己評価も生徒自身にさせ、それも評価方法として活用したい。</p>		

## 課題研究計画書

記入日：2019年8月30日

学校名	和歌山市立楠見中学校	氏名	地阪 大祐
担当教科・学年・組	1年生副担任（技術科1年・3年）		
研究課題 (研究題目)	ワークシートの有効活用による効率的な授業展開と評価の充実		
課題設定の理由 (問題意識)	<p>技術科と日常生活はとても密接に関係している。しかし日々あたりまえのように生活している生徒は身の回りや社会の変化に対し、疑問に思うことが少ないと感じる。またそういうものに興味関心も少ないので現状である。</p> <p>週一回の技術の授業は限られた時間であるため、授業時間内で教科書のすべての内容を終わらせることが難しい。そのため授業においては基本的に自作のワークシートを用いて、要点を絞りつつ、自己評価の充実や学びの振り返りに有効活用していきたいと考えている。</p> <p>特に、導入や展開などで生徒を引き付ける教材・教具を考え、技術科が日常生活に密接に関係していること、技術科で得た地域・技能が将来役立つことを示すことで、興味関心を持たせていきたい。それによって、高いモチベーションを抱くことで、技術科で技術を身につけたいといった思いにつながるのではないかと考える。</p> <p>なお、実技ではペアに分かれ生徒同士で支援し合い、評価しあうことで、より技能が深まっていくことを目指したい。</p> <p>このような点から、座学授業・実技授業にいずれにおいても、自作の「ワークシート」の作成と、それを用いた評価方法の工夫によって、授業を充実したものとしていきたい。</p>		
研究目的	技術科において、生徒の興味関心を活かした授業の展開を考え実践し、生徒が自ら考え主体的に実技を行っていけることを目的とする。そのため、自作のワークシートの作成・工夫をおこない、その効果を検証する。		
研究方法・評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>・作成するワークシートが授業を効率的に進め、且つ生徒らの興味関心を引き出すものとなっているか。また、自己評価等の充実に役立っているかを検証する。そのため、生徒らの記述済みのワークシートの記録・分析を継続的におこなう。</li> <li>・導入や展開で示す興味関心を引き出すための教材・教具について、それらが生徒のモチベーションにつながったかどうかをワークシート等から検証をおこなう。</li> <li>・授業に対する姿勢や態度、話し合い活動から、ワークシートに生徒の達成状況や学習の理解度を評価させる。(生徒間評価 → 自己評価)</li> <li>・相互評価のために、ペア学習を中心とした生徒間交流の時間を増やす。</li> </ul>		

## 課題研究「成果報告書」

記入日：2020年1月30日

学校名	和歌山市立藤戸台小学校	氏名	小西 海
担当教科・学年・組	3年生4組担任		
研究課題 (研究題目)	主体的に学習に取り組むことができるグループ活動の活用場面について		
研究の達成状況	<p>4月当初に比べ、発表の際に理由を述べることができる児童が多くなった。日頃から理由を含めて発表をすることが少ない児童も、少しづつではあるが自分の考えを詳しく発表ができるようになってきた。</p> <p>これは、発問の際、理由も発表できるように考えておくように伝えたからだと思う。さらにグループ活動の際、理由まで考えている児童から発表するようになっていたので、それを聞いて理由の発表の仕方を知ることで、グループ全員が自分の考えの根拠を発表することができた。</p> <p>個人思考の時間には、ノートになぜそうなったのか理由を書かせた。そのまま全体発表にいかずに、先にグループで共有する。共有の際も、友達の考えを否定せず、付け足したり質問させたりした。そのようにして自分の考えた理由をグループ間で共有することで自信がつき、全体発表へつなげることができた。</p>		
研究達成に関して の根拠・証明等	<p>① 授業での様子</p> <p>式や答え、意見などは以前から発表できていたが、グループ活動で先に考えてその理由を共有しておくことで、自分の考えた理由も発表できるようになってきた。さらに、全体発表の際も理由を含めた友達の考えに対して質問をしたり付け足したりすることで、より理解を深めることができた。</p> <p>② 児童のノート</p>		
課題研究に関して 行った工夫・手立て や具体的な実践事例等について	<p>発問の際は、「考えた理由を説明できるようにしておくこと。」と言い、その後、自分の考えた理由を説明できるようにグループ活動を取り入れた。その際、理由を説明できる児童から発表させ、その発表を聞いて、質問があれば聞くよう具体的な例をあげる等声掛けの仕方を工夫した。考えた理由を4人グループで共有した後、全体発表につなげた。グループでの共有は、課題の難易度が高いときに頻繁に取り入れた。</p>		
当研究に関する 課題と展望	<p>今後も課題解決のためのより効果的なグループ活動を行っていきたいと考えている。また、3学期は、グループ活動で理由を共有してから全体発表するだけではなく、個人思考から全体発表で理由を説明できるようにもしていきたい。</p> <p>現在では、4人グループでの活動だが、課題に応じて活動人数を変えたり、活用場面を工夫したりしていきたい。これからも、学習に対して主体的になり、学びを深めるようなグループ活動をしていきたい。するだけではなく、疑問点や共感点を発表できるような工夫をしていきたい。</p>		

## 【初任者研修履修証明プログラム 2019 課題研究】

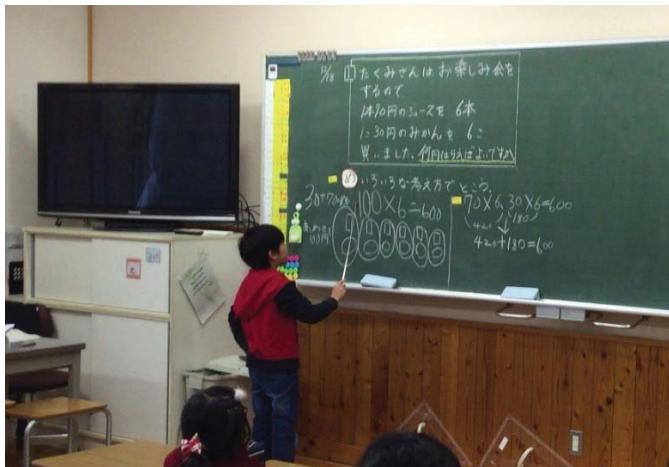
### ① 授業での様子

#### 【考えた理由の共有（グループ活動）】



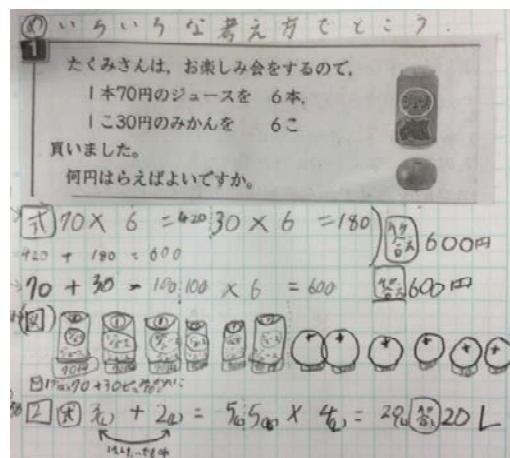
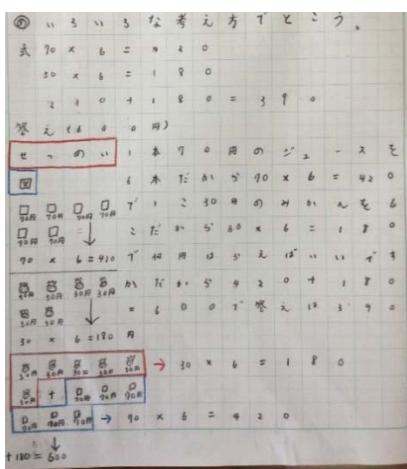
算数の「べつべつに、いっしょに」の授業で、別々に計算する方法を考えた児童が、考え方を説明して共有している様子。

#### 【理由の説明（全体発表）】



グループで考えを共有し、自分の考え方や説明の仕方に自信をつけた後に、全体に向けて考え方を説明する様子。

### ② 児童のノート



ノートに考え方の絵や説明を書くことで、自分がどのようにして考えたかを整理することができた。考え方を整理することで、その後のグループ活動での共有や全体への発表につなげることができた。

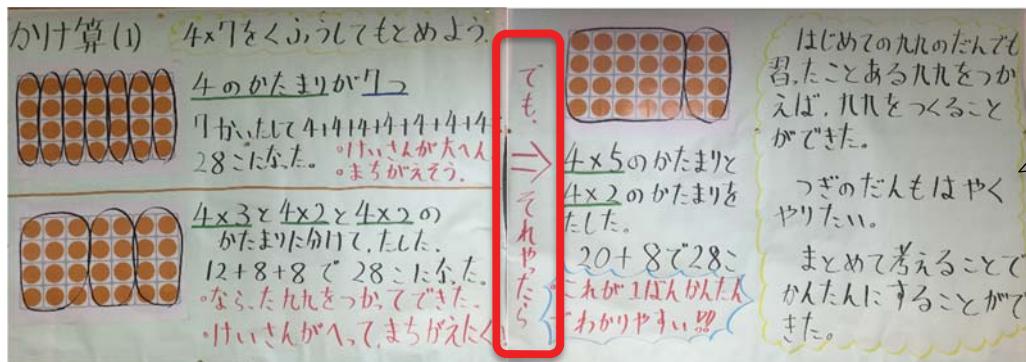
## 課題研究「成果報告書」

記入日：2020年2月10日

学校名	和歌山市立藤戸台小学校	氏名	松井 豊
担当教科・学年・組	2年生1組担任		
研究課題 (研究題目)	自らの考えを持ち友達と関わり合いながら、問題解決に取り組むことができる授業づくり		
研究の達成状況	<p>個人思考の時間でほとんどの児童は、自分の考えを持つことができた。しかし、中には自分の考えを持つことができずに、友達の考えに頼っている児童もいる。このように自分の考えを持つことが苦手な児童も、友達の考えをもとに自らの考えを持つことができていたので、目標に向かって進むことはできていると考える。</p> <p>話し合い活動の中で問題解決に取り組むことができてきている児童は、クラスの半分ほどである。まだまだ友達の意見を聞いて主体的に関わろうとする児童の育成が進んでいないのが現状である。</p>		
研究達成に関しての根拠・証明等	<p>算数科「かけ算（2）」の学習で、アレイ図を活用して九九を構成する時間に、より簡単にアレイ図を見る方法を探す際、「付け足して」や、「それだったら、こうした方が良いと思います。」などの、友達の考えに自分の考えをつなげていく発言が見られた。このような発言をきっかけにして、考えを深めたり、考えの変容につなげたりしていく授業の展開にしていくことができた。（資料1）</p>		
課題研究に関して行った工夫・手立てや具体的な実践事例等について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クラスの発表のルールを改めて確認し、発表方法の土台を整理した。 →举手をせずに自分の意見を発表する児童が多くいたので、意見を発表するときは、ハンドサインを活用しながら举手させ、意図的指名を行うようにした。（資料2）</li> <li>・自身の考えを持ち、話し合い活動に取り組ませたかったので、個人思考の時間を多く確保した。（資料3） →自分の考えを持つことが苦手な児童も参加できるように、既習事項と結びつけながら、考えていくように声掛けを行った。</li> </ul>		
当研究に関する課題と展望	<p><b>【課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・考え方を持つことはできるが、友達に考え方を分かりやすく伝えることが苦手な児童が多いので、考え方を分かりやすく友達に伝える語彙力の育成も必要になってくると感じた。普段から教師が説明に必要な用語を使っていくことが、大切だと感じた。</li> <li>・聞く側の児童にどれだけ「できた」「わかった」「次に使いたい」と感じさせができるかを意識していきたい。そのために発表を聞いて、うなずいたり、返事をしたりするだけではなく、疑問点や共感点を発表できるような工夫をしていきたい。</li> </ul> <p><b>【展望】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・課題に向かって友達の発表をもとに考え方を深めていくように、効果的な発表の仕方、関わり方を模索していき、実践していく。</li> </ul>		

【初任者研修履修証明プログラム 2019 課題研究】

(資料1)



友達の工夫からより良い工夫を図の中から見つけ出し、「付け足し」の考え方引き出すことができた。

(資料2)

ハンドサインを活用することで、児童同士の相互指名でも円滑な指名につながった。



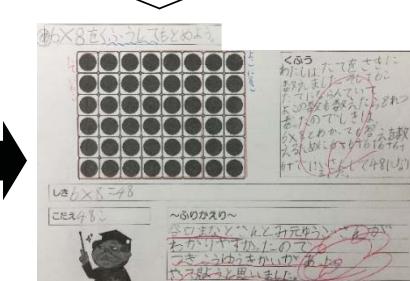
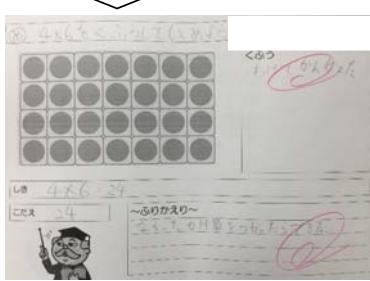
ふりかえりポイントを整理することで、その時間の学習の学びに気付きやすいうようにした。

(資料3)

自ら考えを持ち、活動に取り組めたが、自分の考えを書くだけにとどまった。

自らの考え方を書くことができ、友達の考え方を基に、次時への意欲が見られた。

図に直接考え方を書き込むことで、友達に考え方を伝える時に分かりやすくすることができた。



単元を通して、似た形のワークシートを使うことで考え方を書くことが苦手な児童も書くことができた。

## 課題研究「成果報告書」

記入日：2020年2月12日

学校名	和歌山市立松江小学校	氏名	稻井 杏里
担当教科・学年・組	5年生2組担任		
研究課題 (研究題目)	学びの深め合いができるペア・グループ活動		
研究の達成状況	<p>主に算数科の授業で実践した。意見が出にくい時には、ペア学習で自分の考えていることを一度交流する時間をとった。グループ学習に関しては、1学期に比べて多く取り入れることができ、子どもたち同士で考えを交流し、議論する姿が見られた。グループ学習によって、教えあいや深め合いが生まれ、1つの考え方だけでなく、2つ3つの考えを生み出すことができていた。一方で、話し合いが終わって時間ができてしまうと、授業とは関係のない話をしている様子も見受けられたのが反省点である。</p>		
研究達成に関する根拠・証明等	<p>(資料1) 毎時間振り返りをノートに書かせた。友達の考えが参考になったり、理解の手助けになったりしたことを書いている児童が見られた。</p> <p>(資料2) グループで出た意見を黒板に書いたり、ホワイトボードにまとめたりした。真剣に発表を意識しているので、活発な話し合いになった。</p> <p>(資料3) 子どもたち同士での教えあいをさせた。教える側は聞く側の状況を理解しながら説明することができた。</p>		
課題研究について行なった工夫・手立てや具体的な実践事例等について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1人学びは、できるだけ自分の考えを書くことができるようとした。問題を解くことを諦めてしまう子でも、少しでも頑張って解こうとする意欲が見られるようになった。</li> <li>・子どもたちが自分の考えを書きやすいようなワークシートの作成を考えた。</li> </ul> <p>(資料4) 特に図形の単元では、図でも言葉でも、友達の意見から分かったことを書けるようなワークシートの作成を心がけた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ホワイトボードを用いる際には、さまざまな意見が出るように、1つの意見だけでなく、他の班は絶対考えていないだろうと思う意見があれば、積極的に発表するように声かけをした。また、分からない子や、違う考え方をした子に自分の意見を分かりやすく伝えられるように、説明の仕方を工夫させた。説明を聞いている児童には、分かった時にうなづくように言うと、意欲的に問題を分かろうと友だちの話に耳を傾ける様子が見受けられた。</li> </ul>		

【初任者研修履修証明プログラム 2019 課題研究】

当研究に関する 課題と展望	グループ活動を通して、自分で考えた意見が友達と同じであれば、自分の答えに自信を持つことができているようであったが、他の児童の考え方の違う意見に対しては、考えていることは理解できても、自分のやりやすい解き方で解けばよいと、結局1つの考え方で固定化されてしまうことが多かった。課題に応じてより早く正確に解ける方法を使えるようになってほしい。今後は、単に自分の意見や考えの出し合いに終わるグループ活動ではなく、算数科以外の教科でも互いの意見をぶつけ合い、そこから新たな考えを導き出したり掘り下げたりできる質の高い話し合い活動を保っていきたい。
------------------	--

(資料1)

② 文字がよく分かっている。四角の  
手もしかば、ことかややこしくて  
えずかしくて思った。最もこの問題  
は、手するのうしなのがやや  
こしくてわざり分からなかつた。  
また四角形は手しないやりを  
考ス。 [REDACTED] ふに教えてもら  
うせんたん方が、てきた。じよ  
で当たつて分からなかつた。  
これら人文字をうんはう  
した。

友達の考え方から分かったこと・思ったこと・感じたこと  
[REDACTED] ざんかからなくあしゃたらじきいたのひ  
ばといしんもうれしかったです。

③ 平均はこれを覚えていいればかん  
たんだと覚えます。(今やっているだけ)  
[REDACTED] さんの答えはすぐに計算  
できいいと思います。 

④ [REDACTED] くの手のやり方がおん  
まりあからむか。たのぞましま  
いやりたくないなと大もつだ。

友達の考え方から分かったこと・思ったこと・感じたこと  
自分の考え方とちがう考え方か分かった。  
考え方にはじめないとと思った。  
考え方からても答えは同じだった。  
2人の発表で自分の考えて少しちがって、  
たての長方形じゃなくて横の長方形だった  
からそういうやりもあるんだと思った。

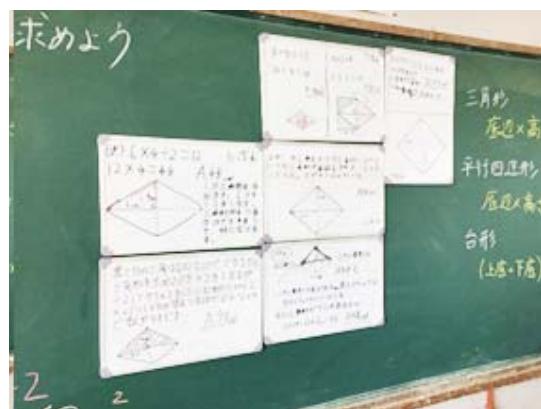
友達の考え方から分かったこと・思ったこと・感じたこと  
わたしのねはねおと同じ考え方か3人いました。  
[REDACTED] さくはばんさんと同じ考え方を次からじょうとす。ていました。  
わんはてわすまじょうと見えました。

友達の考え方から分かったこと・思ったこと・感じたこと  
いままで、「の少ない四角形で下に移動させね  
かたやわるとするやり方がわたくしが  
こいつかたやつはほじて上のやつを下に  
やつげしたがこんかいは下のやつを上にさげ  
てまうあたうといつががまつがまつじこ

友達の考え方から分かったこと・思ったこと・感じたこと  
[REDACTED] くんのやり方がやりやすかった。  
[REDACTED] ちゃん[REDACTED] か「分からない」とい  
っていたので、[REDACTED] のやり方で教えてあげた。  
だからみんな同じ考え方だった。  
まだいろいろあったけど、全部[REDACTED] は、この  
やり方がやりやすかった。

【初任者研修履修証明プログラム 2019 課題研究】

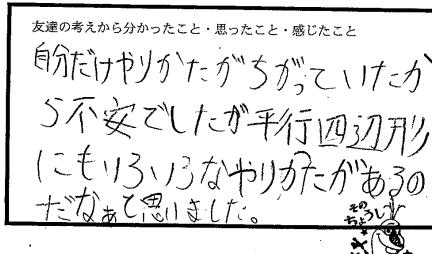
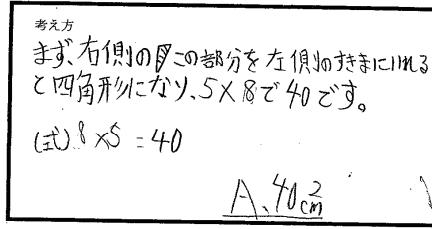
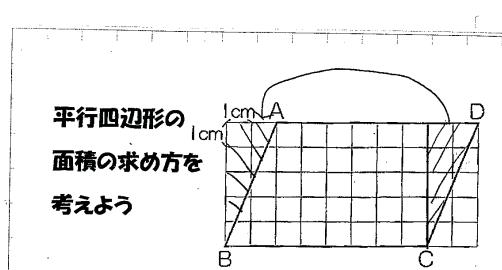
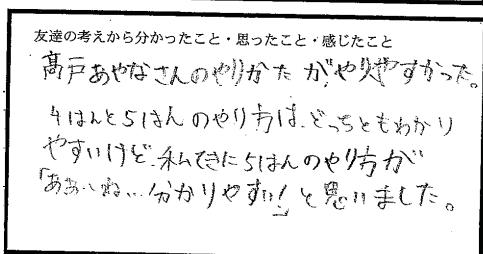
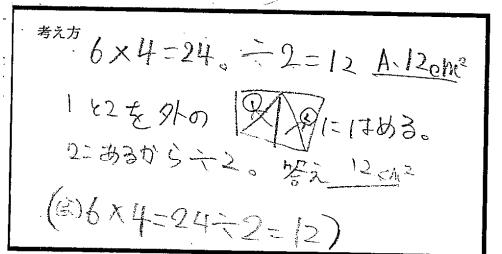
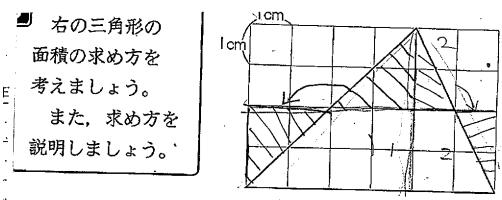
(資料2)



(資料3)



(資料4)



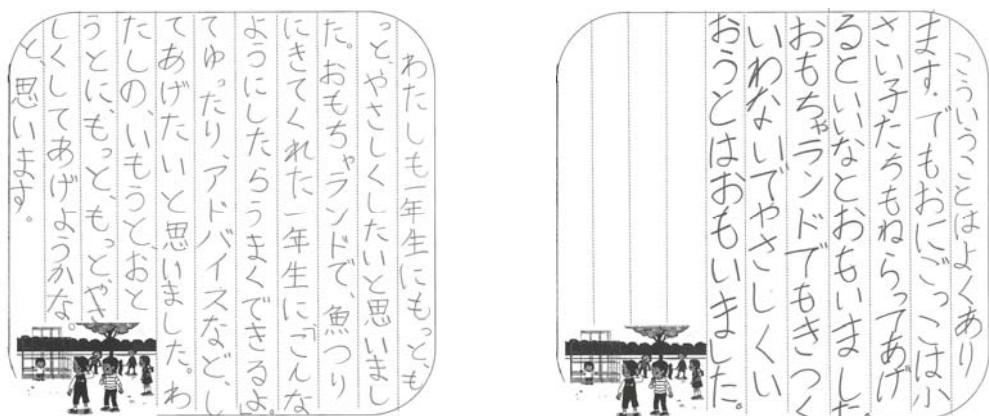
## 課題研究「成果報告書」

記入日：2020年2月5日

学校名	和歌山市立松江小学校	氏名	小坂 祐貴
担当教科・学年・組	2年生2組担任		
研究課題 (研究題目)	豊かな心と生きる力をはぐくむ道徳教育 ～人を思いやるやさしい子を育てる～		
研究の達成状況	人を思いやるやさしい子を育てることについて、困っている子や年下の子に対して親切に関わる様子が多く見られるようになった。道徳科で「親切、思いやり」について考えたことが、1年生との活動などの実生活に活きたと考える。		
研究達成に関しての根拠・証明等	<p>生活科の「おもちゃランド」では、準備の際に、「簡単に遊べるおもちゃを作ろう」「1年生が分かりやすいルールにしよう」など、1年生が楽しめるかどうかを考えている姿が見られた。</p> <p>道徳科では「公園のおにごっこ」を授業し、相手のことを思って行動する心情を育もうと取り組んだ。(資料①) その結果、授業の翌日にあった、おもちゃランド本番では道徳での学びを生かすことができていた。おもちゃの遊び方を書いた紙を使って説明したり、遊び方のコツをアドバイスしてあげたり、応援してあげたりする姿が見られた。このように、1年生の気持ちを考えた行動ができたことで、子どもたちだけで大きなトラブルなく、1年生に楽しんでもらうことができた。(資料③)</p>		
課題研究に行った工夫・手立てや具体的な実践事例等について	<p>生活科の「おもちゃランド」で、おもちゃを「1年生が楽しめるように」という意識で準備し、遊び方やルール、それらの伝え方をどうするのか、について考えた。また「おもちゃランド」への招待状を1年生に作り、1年生に喜んでもらおうと時間をかけて作った。(資料②) 「おもちゃランド」の本番直前に、道徳科で「公園のおにごっこ」を授業し、「相手の気持ちを理解して、親切に行動する」ことを学び、おもちゃランド本番につなげられたと考える。(資料①)</p> <p>そして、本番後の振り返りでは、「一年生のために頑張れたこと」について書くように指示したことで、自分が一年生のために親切にできたことや、もっと工夫できたことを考えることができた。(資料④)</p>		
当研究に関する 課題と展望	「おもちゃランド」では、相手が1年生であったので、自分より年下であるからこそ、親切にしようという心情が、自然と高まったと考えられる。その一方で、自分の同級生や年上の子に対して、「相手の気持ちを理解して、親切に行動する」ことを、自分から進んでできる子はあまり多くなかった。例えば、3年生と遠足で一緒に行動する機会があったので、その際にも道徳科の授業と関連させて、「親切、思いやり」の態度を高められれば良かったと考えた。		
その他	体験活動と道徳の授業を組み、道徳的実践力につながる実体験をさせることは効果的であると考える。しかし、普段の学校生活ですぐに実践につながることは期待してはならず、継続的な指導ができるような計画を立てることが、今後の課題であると考える。		

## 【初任者研修履修証明プログラム 2019 課題研究】

## 資料① 「公園のおにごっこ」の児童の感想



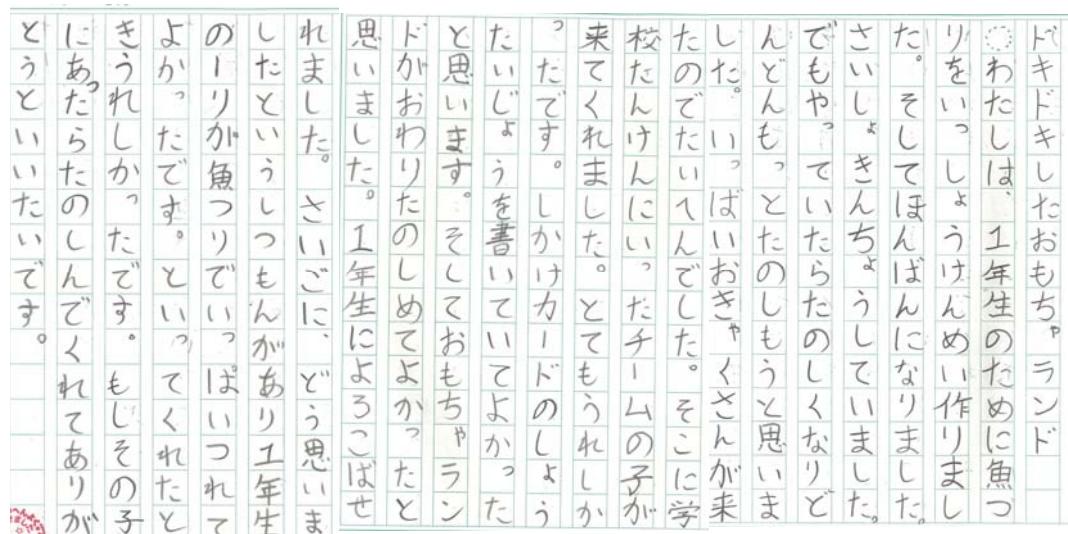
## 資料② おもちゃランドへの招待状



### 資料③ おもちゃランド 当日の様子



#### 資料④ おもちゃランド本番の児童の感想



## 課題研究「成果報告書」

記入日：2020年2月14日

学校名	和歌山市立砂山小学校	氏名	伊東 弘輝
担当教科・学年・組	3年生2組担任		
研究課題 (研究題目)	クラス全員がつながる対話的活動をめざした授業づくり		
研究の達成状況	<p>人の意見を聴く姿勢をよくすること、発表に対する反応をしっかりとすること、人の意見に対する自分の意見（「似ていて」「ちがって」「質問」など）を言えることをを目指し、指導してきた。その結果、クラス全体的に非常に低かった発表への意欲は少しづつではあるが上昇傾向にある。一部の児童しか挙手しない、その児童たちの意見だけで授業が進むという状況は徐々に改善されてきた。依然、挙手したり発表したりしない児童は少なからず存在するものの、そのような児童も人の発表に対する姿勢や反応は良くなり、挙手はせずとも授業に対して積極的に参加するようになったと感じている。</p>		
研究達成に関して の根拠・証明等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業記録（資料①） 毎週、拠点校指導員の先生に授業記録をとってもらい、その記録から挙手して発表している児童や、教師と児童の発言回数がどのように変化したかを考察した。</li> <li>・発表カード（資料②） 発表カードを作成し、一時間の中で発表に対しての自己評価、相互評価ができるようにした。自分が発表するという点だけでなく、人の意見を聴くという点にも重きを置き、自己評価欄に聞く姿勢の項目を作り、さらにその1時間のキラリさんを書くようにした。</li> </ul>		
課題研究に関して 行った工夫・手立て や具体的な実践事例等について	<p>少しでも興味関心を高く持った状態で授業がスタートできるように、授業の導入部分にも注目した。授業内容を身近に感じることができるように、可能な限り実物や実物に近いものを用いて授業の課題につなげたり、楽しさや面白を感じることができるようゲーム要素を入れたりした導入となるよう意識した。（資料③）。</p> <p>そして、対話をを行う上で最も重要かつ初歩的なことは「人の話を聞くこと」であると考えた。そこで人の意見に対して反応するということを意識して日々の授業に取り組んだ。人の意見を聞いたことによる反応やつぶやきを大切にしたり、発表する際にはハンドサインを用いて人と比べてどうなのかを意識して発表するようにしたりするなどして、とにかく人の意見を聞くことを子供たちが意識できるよう心掛けた。</p>		
当研究に関する 課題と展望	<p>今後も子供同士が意見をつなぎ合うことを目指して日々の授業に取り組んでいきたい。現段階では児童が対話をしながら授業がすすめているかというと、そのレベルには達していない、まだその初歩段階の聞く姿勢がようやく整いつつある段階である。今後の課題として、子供が他者の意見を聴いたことを踏まえて自分の意見を発表できるよう指導する必要がある。また、子供達が出した意見をつなげていくために教師自身の技術や見通しがより高いレベルが必要であると感じた。</p>		

【初任者研修履修証明プログラム 2019 課題研究】

## 資料① 授業記録

## 【実際の授業記録】

## 資料② 発表カード

## 【授業記録より発言数を整理】

	5月20日 4時間目 算数		7月1日 4時間目 算数		2月9日 4時間目 算数	
1					○	
2						
3					○	○
4			○		○	
5						
6						
7			○		○	
8					○	
9	不参加		不参加		不参加	
10			○		○	○ ○ ○ ○
11			○		○	○ ○
12					○	
13					○ ○	
14					○	
15	○	○		○		○ ○ ○
16	不参加		不参加		不参加	
17						
18	○				○	○ ○ ○ ○
19	○			○		○ ○ ○
20						
21			○			欠席
22						
23	不参加		○		不参加	
24					○ ○	
発言数	教師: 15	児童: 13	教師: 12	児童: 12	教師: 16	児童: 33

1年を経て、一部の児童のみの発表、発言で進んでいたが、より多くの児童が発言するようになったこと、より活発に意見が飛び交うようになったことが分かる。

教師の発言数はそれほど増えていないのにに対して、児童の発言がより多くなっている点から、児童がより積極的に意見を交換し、考えをつなげようとしていることがうかがえる。

○ : 発言、発表  
数字 : 女子

☆3年2組 発表チャレンジカード☆

2月3日 木曜日										年齢	今日の点数	今日のポイント					
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10		50	58					
11	12	13	14	15	16	17	18	19	20								
21	22	23	24	25	26	27	28	29	30								
31	32	33	34	35	36	37	38	39	40								
41	42	43	44	45	46	47	48	49	50								
今日の自分の得点はどうだったかな?										でかっこてね!							
1. 我の頭の問題																	
ふくさん頭をあげたよ!					しづしおあげたよ!					お見出しあれなかったら、 次はがんばるよ!							
2. あなたの頭を聞く時間																	
読みこなせる人を見て、 はのううなうなうなうによ!					一でっちかわした方は できたよ!					国語のあかれたなあ、 次はがんばるよ!							
3. 「つむだし」「じつもん」「あまだけ」などを たくさんつかえたよ!										つかえたよ!					うきうき大きなから 次は使うよ!		
今日の発展の歩み(△さん)										△さんです。なぜかといふと インフルエンザで倒れていた時に、色いうちの表 をしてもらってきてます。							

☆3年2組 発表チャレンジカード☆

☆3年2組 発表チャレンジカード☆

発表への意欲が高く、さらに人の意見に付け足そうとする姿勢が感じられる。

はじめは「自分につけたしてくれた」「たくさん発表していた」という意見が多かったが、少しずつ自分と比べてどう思ったのか、どう良いのかを書けるようになった。積極的に挙手して発表しているわけではないが、人の話を集中して聞けていることがわかる。

### 資料③ 導入の工夫



授業のスタートで興味関心を高く持てる  
よう工夫。  
子どもの生活、具体物を使っての導入。

## 課題研究「成果報告書」

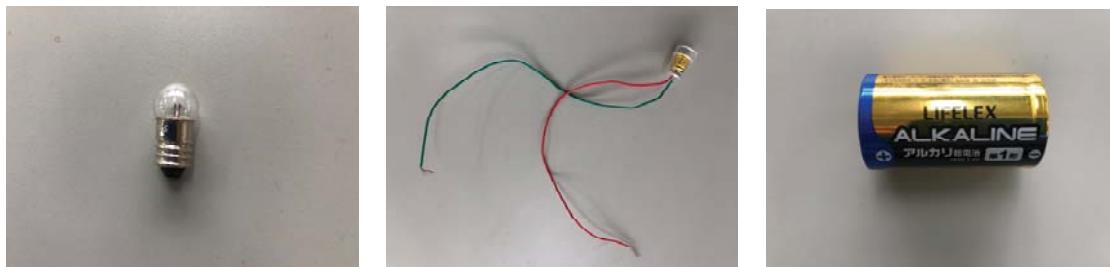
記入日：2020年2月12日

学校名	和歌山市立高松小学校	氏名	辻本 貴大
担当教科・学年・組	3年生2組担任		
研究課題 (研究題目)	理科の授業における問題解決学習 ～「なぜ」「どうして」という問い合わせから授業を作る～		
研究の達成状況	「電気で明かりをつけよう」の単元の学習で、子どもたちは活動の中で多くの「なぜだろう」「どうしてだろう」という疑問を持ち、「自分で調べてみたい」という意欲的な姿が見られた。そういった子どもたちの発言や活動を取り上げながら、子どもたちとともに問題を作ることはできたと考える。		
研究達成に関しての根拠・証明等	導入で子どもたちは不思議な現象に出会い、「なぜ明かりがつくのだろう」「どうつないだら明かりがつくのか」と意欲的に学習に取り組むことができた。また、活動から「回路の中にものをはさんでも明かりがついた」「明かりがつくものとつかないものがある」「何が違うのだろう」など多くの気づきや不思議を出していた。そういった発言を取り上げ、「回路の間に何をはさむと明かりがつくのだろうか」という学習課題を作り、間にはさむと明かりがつくものの共通点を探ることができた。		
課題研究に関して行った工夫・手立てや具体的な実践事例等について	<p>①授業づくりに関して 生活経験が豊かな子どももいれば、そうでない子どももいるため、子どもたちの活動や試行の時間を十分に確保するようにした。</p> <p>②アンケートの活用 単元や授業を計画するために、子どもたちが、電気についてどの程度予備知識があるのかを把握する必要があると考え、事前アンケートを行った。</p> <p>③導入の工夫 子どもたちが、疑問を見出し、主体的に学習に取り組むために、自作教材で導入を行った。</p>		
当研究に関する課題と展望	子どもたちが自ら学習課題を作っていくためには、子どもたちの生活経験が重要になってくる。しかし、子どもたちの生活経験や体験は異なるため、教室の中に磁石や天秤などを置き、休憩時間に触れるようにした。しかし、安全面や適切に使用できるように指導する必要がある。そのような、経験をたくさん積んだ子どもたちが問い合わせや不思議を生み出すことができると思う。また、社会科などの他教科でも子どもたちの疑問を生かした授業を行っていきたい。		

## 【初任者研修履修証明プログラム 2019 課題研究】

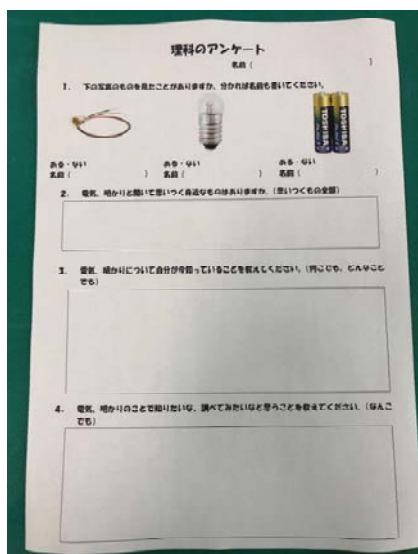
### ①授業づくりに関して

(明かりがつくつなぎ方とつかないつなぎ方を調べる実験を行った際の実験道具)



自ら疑問や不思議を見出すためには、豊かな体験や生活経験が重要である。そのため、1人1つの実験器具を用意し、試行の時間を十分に確保した。たくさんのつなぎ方を試す中で、明かりがつくつなぎ方とつかないつなぎ方を比較して、共通点や差異点を見出すことができた。

### ②アンケートの活用



本単元の学習の前に、電気についてどれほどどの知識があるのかを確認するための事前アンケートを行った。そのアンケートから、身の回りの電気に関するものについてどの程度知っているのか、どういった事に興味があり調べていきたいのかといった結果を基に、単元計画や授業づくりを行った。

### ③導入の工夫（自作教材の開発）



単元の導入に自作の教材を開発した。箱の裏で導線と電池をつなぐと表面に見えている豆電球の明かりがつくものである。本教材は、豆電球が点滅する現象を見ることができるが、箱の裏は児童から見えないため、「箱の裏はどうなっているんだろう」と意欲的に取り組めると考える。

## 課題研究「成果報告書」

記入日：2020年2月12日

学校名	和歌山市立高松小学校	氏名	崎濱 木実
担当教科・学年・組	4年生2組担任		
研究課題 (研究題目)	「社会的な見方・考え方」を働きかせるための場面転換 ～個人・ペア・グループ～		
研究の達成状況	「安全なくらしをまもり隊！」の単元の中で、学習課題や児童の実態に応じて、場面転換を行うことで、おおむね子ども同士がそれぞれの生活経験をもとに積極的に話し合うことができ、仲間と学ぶ良さを感じることができている。 (図2)		
研究達成に関しての根拠・証明等	小学校社会科における「社会的な見方・考え方」の内容を踏まえ、子どものノートやワークシートの記述においてそれを働きかせているものを数えた。また、アンケート(図1)を実施し、子どもの意識との相関を調べると、正の相関が見られた(図3)。児童が「社会的な見方・考え方」を働きかせることができるように、学習課題や実態に応じて場面転換をしたため、このような結果であると推察される。		
課題研究について 行った工夫・手立てや具体的な実践事例等について	山場となる場面では、全体で話し合いたいと考え、児童同士がお互いを意識できるよう、「コの字型」の形態を取った。ペアは、簡単な確認作業として使うことが多かった。気づいたことや考えたことを、全体の場で発言することに抵抗がある児童が多い。そのため、意見交流を一旦4人グループの形態で行った。全体の場で意見を言うよりも、4人グループという少人数にすることで、話しやすくなる。その後、グループで出た意見として全体の場で発表することにした。また、授業者が「社会的な見方・考え方」を働きかせることに注目できるような板書や発言を心がけた。		
当研究に関する 課題と展望	本研究で児童が積極的に話し合うことができたり、思考が活性化したと見られたりする姿が確認されても、確実に場面転換の工夫から得られた効果であるかは不明である。		
その他(新たに生まれた課題・問題意識等あれば)	目の前の子どもがどんな形態で授業に参加するのかが適切であるのかを見極めようすることは、教員の子ども理解の力や授業での洞察力を伸ばすことに繋がると考えられた。		

## 【初任者研修履修証明プログラム 2019 課題研究】

社会科の学習についてのアンケート

名前( )

①社会科の学習で、がんばっていることは何ですか。あてはまるもの全てに○をつけましょう。				
(ア) 気付いたことやぎもんに思うことをノートやワークシートに書くこと。 (イ) 気づいたことやぎもんに思うことを友達に話すこと。 (ウ) 気づいたことやぎもんに思うことを発表すること。 (エ) 資料(教科書・地図帳・パンフレット・展示物など)を見て、わかることや疑問に思うを見つけること。 (オ) 友達の発言を聞くこと。 (カ) 友達の発言を聞いて、自分の考え方と比べたり、さらに考え方たりすること。 (キ) ぎもんに思うことを資料などで調べること。 (ク) グループの友だちと協力して調べること。				
以下の質問を読んで、自分に当てはまると思うところに○をつけましょう。				
②気づいたことやぎもんに思うことを積極的に 交流していますか。	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
③友だちの発言を聞こうとすることができていますか。	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
④友だちと一緒に勉強してよかったですと思いませんか。	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない

図 1

### 社会科の学習における子どもの意識について (4年2組)

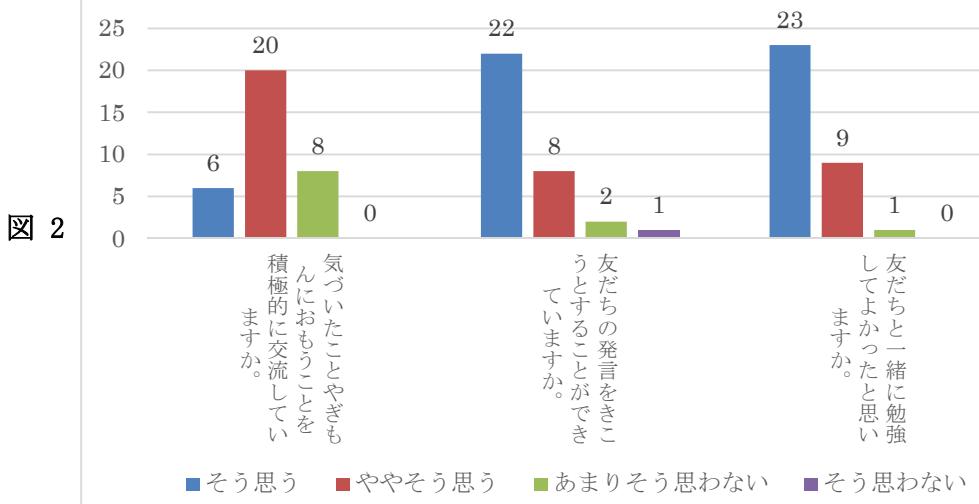
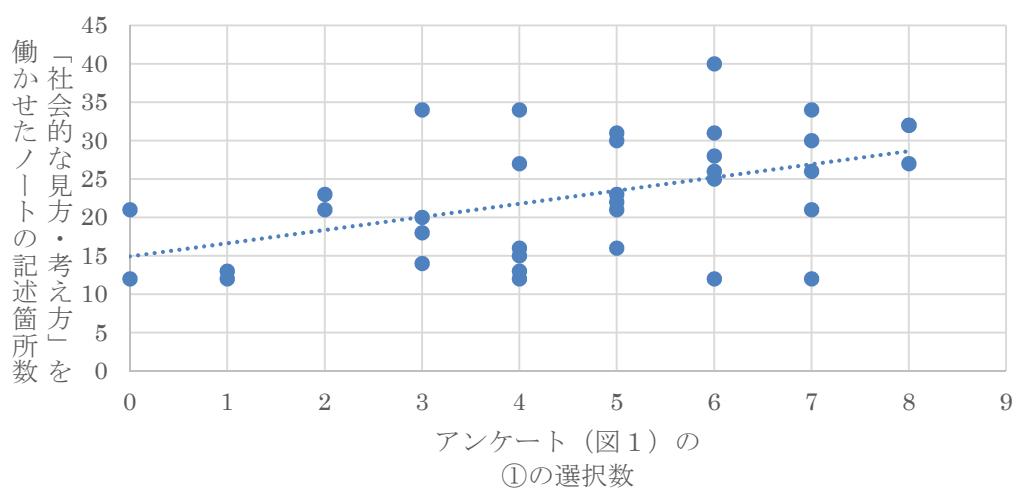


図 2

### 社会科の学習における参加態度と 「社会的な見方・考え方」を働かせることの関係について

図 3



## 課題研究「成果報告書」

記入日：2020年1月31日

学校名	和歌山市立西浜中学校	氏名	小畠 秀介
担当教科・学年・組	1年生4組担任（家庭科）		
研究課題 (研究題目)	ICT機器を効果的に生かし、わかりやすく生活に直結する授業づくりについて		
研究の達成状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・導入や展開にICT機器を取り入れる授業を平均的に行うことができた。</li> <li>・動画を使用することで、自分達の生活と結び付けて考えやすい環境を作ることができた。</li> <li>・教材研究の負担を減らしつつも、伝えたい情報を直感的に伝えることができた。</li> <li>・日頃からICT機器を使うようになったことで、ICT機器への敷居が低くなつた。現在では、なくてはならないツールとなつた。</li> </ul>		
研究達成に関して の根拠・証明等	<p>①授業の様子            ②資料や板書            ③生徒へのアンケート調査</p>		
課題研究に関して 行った工夫・手立てや具体的な実践 事例等について	<p>家庭科という教科の特性上、ICT機器の使用は非常に相性が良く効果を發揮した。例えば『縫い方や作り方の説明』を動画でリピート再生することで、作業や手順がわからなくなつた生徒を待たせることなく効率的に授業を進めることができた。また、『昨日のニュース』のような時事問題を動画として見せることで、自分達の生活に直結させやすくするための効果的な手立てとなつた。</p> <p>教師側の利点としては、ICT機器を使った授業に慣れてくると、教材作成の時間の削減につながり、かつ直感的でわかりやすい授業づくりができたように感じた。</p>		
当研究に関する 課題と展望	<p><b>【課題】</b>            動画や画像などの教材の編集は、家庭のパソコンで作業することが多かつたため、持ち帰ってやらなければいけない仕事の量が増えた。こだわり始めると終わりのない作業になつてしまうため、ねらいに焦点をあてた教材づくりを意識しなければいけないことに気付けた。</p> <p>ICT機器を活用した授業は、生徒の興味関心を高めることはできるものの、実際の生活で行動を起こせているかは不明である。そのため、それを評価するような授業展開が必要になってくると感じた。</p> <p><b>【展望】</b>            ICT機器を用いた授業づくりは敷居が高いイメージがある。環境が整っていない学校では実施しにくいという現実ではあるが、アンケートの結果からも生徒の興味関心も高く、少しの工夫でとてもわかりやすい授業になるため、今回で経験したことを共有していきたい。しかし、アンケートの中には別紙資料③にあるような、生徒からの意見もあったため、今後の授業改善に生かしていきたい。</p> <p>今後のICT機器を用いた授業デザインには、より生徒の生活に直結させるための手立てとして、生徒自身がICT機器を用いて、自らの生活の中にある問題解決ができるような糸口を見つけたり、情報を活用して、他の生徒に発表できるような機会を設ける必要があるのではないかと考える。</p>		

## 【初任者研修履修証明プログラム 2019 課題研究】

### ①授業の様子



災害時の食事を考える

### ②資料や板書



授業時の提示資料



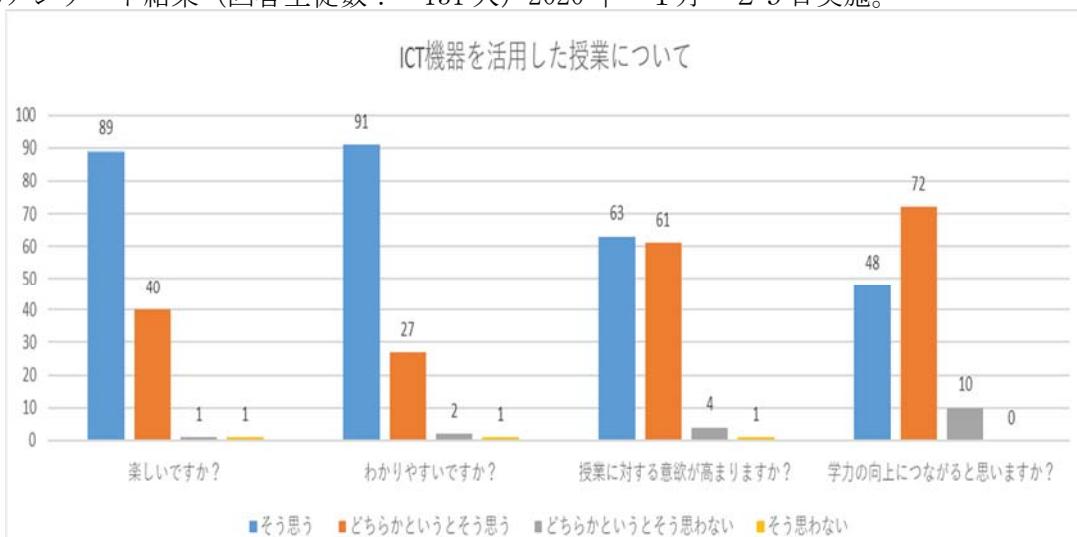
和歌山防災センターの提供する資料



本時の板書

和歌山の防災センターの出前授業で実際に使われたものを参考に、家庭科の視点を入れながら授業を組み立てた。

### ③アンケート結果（回答生徒数： 131人）2020年 1月 29日実施。



生徒からの意見の中には、肯定的な意見もあった一方で、『画像や動画が増えたため、黒板に書く文字が少なくなった』、『動画に時間がとられて、発表する時間が失われている』、『後ろの席だと見えにくい』、『動画ばかりだと飽きてしまいそう』などという意見もあった。

## 課題研究「成果報告書」

記入日：2020年1月27日

学校名	和歌山市立日進中学校	氏名	森下 真実
担当教科・学年・組	1年生4組担任（国語科）		
研究課題 (研究題目)	話し合い活動を通じて、自分の意見を伝える学習		
研究の達成状況	<p>4月から、単元ごとに話し合い活動を入れてきた。はじめは自分の意見を伝えるのが難しい生徒もいた。自分の意見をもっていない生徒、どのようにまとめればよいのかわからない生徒など、話し合いを行う前に躊躇する生徒がいた。そこで、①自分の思っていることを箇条書きでも書き出す。②どんなことを思ったか、考えたかを書きだす。などの段階を踏んで授業を行った。今は、自分で意見を持つということは大方可能になった。しかし、課題とする生徒はまだおり、全体の底上げは完ぺきとは言えない。段階をおってすることで、少しずつ意見を持って話し合うことができている状況である。</p>		
研究達成に関しての根拠・証明等	<p>①グループ学習 花曇りの向こうという作品では、「花曇りの向こう」という題に込められた思いとは何だろう」をテーマに話し合い活動を行った。希望や明るい未来といった意見が出た。班で話し合いを行い、必ず一つの意見でなくてもよいとした。互いに意見を尊重できる関係であるために「肯定する」というのを話し合いの中に取り入れた。</p> <p>②評価シート 「少年の日の思い出」を、視点を変えて物語にし、相互に読み回しを行った。作品についての評価をつけ、各班で話し合い代表者を決めて発表した。他の人の意見に関しても正直に評価することが大切である。「友だちだから」を抜きにして、個人の評価をつけてもらえた生徒の表情はよかったです。</p> <p>③話し合いの結果 「ダイコンは大きな根？」では、各班に分かれて段落分けをして要約した。それぞれの班でまとめたことを黒板にまとめた。前時では、段落ごとの役割や意味ということを考えた。様々な意見を共有できて、生徒がより考えるという経験をできただろう。</p>		
課題研究に関して行った工夫・手立てや具体的な実践事例等について	<p>単元ごとの話し合い活動、グループで意見をまとめ、発表する活動を中心に行つた。各単元での話し合いはテーマを教師側から提示し、話がそれないように指導した。話し合いの内容は、初めは答えが教科書にあり、協力して探し出せるようなものにし、グループ学習として活用した。単元の終わりの授業では、物語の続きを考えたり、視点を変えて想像力を働かせたりするという内容で行った。各班で意見がバラバラであっても、どんな意見でもお互いに認め合うことを第一に取り組んだ。</p> <p>自分の物語を作った時には、作品の読み回しをして、互いに批評し合う活動などを取り入れた。答えがない話し合い活動は、様々な意見が出てくるため、発言することに対して否定的にならずに取り組むことができた。</p>		

【初任者研修履修証明プログラム 2019 課題研究】

当研究に関する 課題と展望	書くという段階やテーマについての考え方を、必ず教師側から提示しなければ話し合いに持ち込めなかった。主体的な姿勢を育て、臨機応変に自分たちで話し合えるような思考力・判断力を身につけさせることが必要である。 <u>中学</u> 1年生では、テーマに沿って話し合う力を身につけた。次年度の2年生では、自分たちで課題を決めて話し合い活動を行う力、3年生では、課題に対して話し合いを行い、一つの意見や考えにまとめる力を育成していきたい。
その他（新たに生 まれた課題・問題 意識等あれば）	話し合い活動に自主的に取り組める生徒が各クラスの半分ほどになってきた。しかし、話し合いに参加できていない生徒もまだいる。そういう生徒たちが意見を持ち、考え、発言できるような状況づくりも課題として取り組んでいきたい。

## 【初任者研修履修証明プログラム 2019 課題研究】

### ①グループ学習

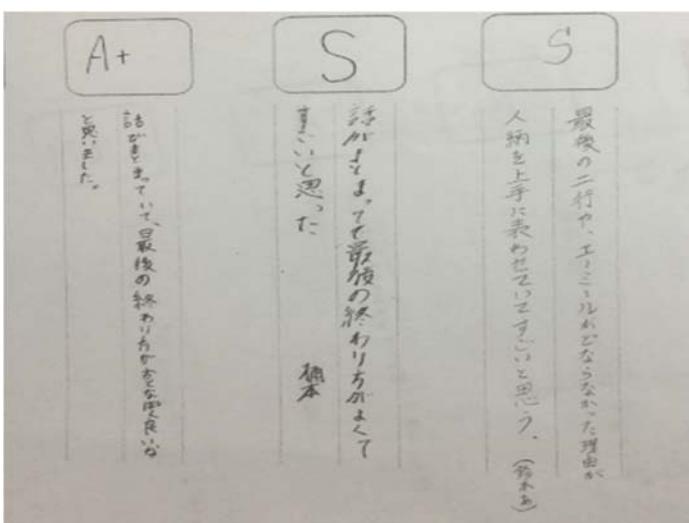
左) 課題についてグループで話し合いをしている様子。

右) お互いの意見、考えについて評価をしている様子。



### ②評価シート

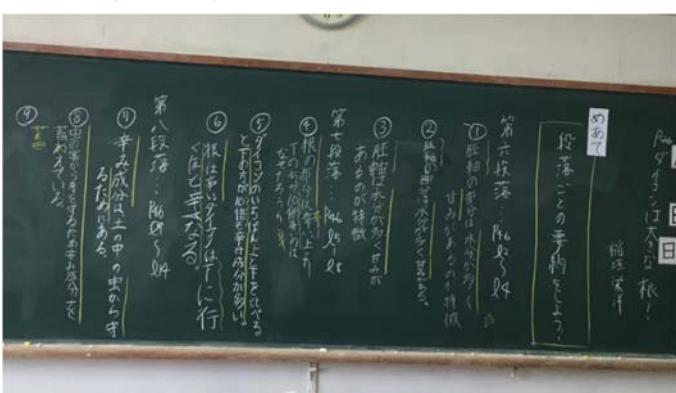
「少年の日の思い出」のリライトを互いに評価したもの。



### ③話し合いの結果

左) 「ダイコンは大きな根？」を各班で段落ごとに要約した。

右) 鑑賞文を各班から代表を選んで発表した。



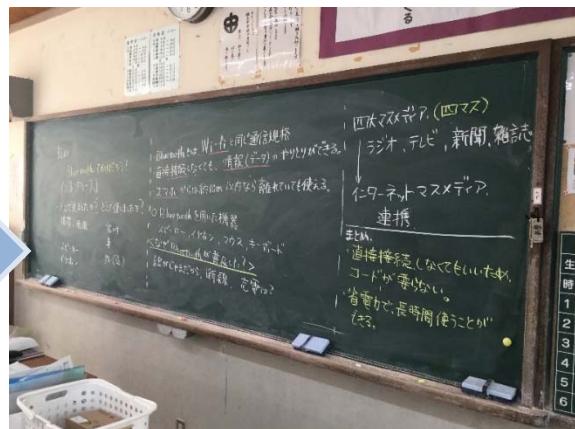
## 課題研究「成果報告書」

記入日：2020年2月6日

学校名	和歌山市立楠見中学校	氏名	地阪 大祐
担当教科・学年・組	1年生副担任（技術科1年・3年）		
研究課題 (研究題目)	興味関心を引き出す授業づくり ～ワークシートの有効活用による評価の充実～		
研究の達成状況	<p>毎時間ワークシート形式の授業計画を達成することができた。また、引き付ける教材では、生徒の生活体験や学校生活での話や疑問などを引きだすことで興味関心を持たすことができた。</p> <p>しかし、グループ活動では、どの生徒も完成まで協力して取り組む一方で、話し合いなどの生徒間交流の時間の確保までは十分ではなかった。</p>		
研究達成に関して の根拠・証明等	①板書の変化 ②グループ活動 ③グループ評価 ④ふりかえり		
課題研究に関して 行った工夫・手立て や具体的な実践 事例等について	<p><u>ワークシート作成について</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>内容の選択</li> </ul> <p>教科書をすべて通るような内容を( )抜きにし、授業開始数分で生徒が教科書を読むことで( )を埋められるようにした。押さえておきたい基礎・基本の定着につながったと考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>グループ評価欄</li> </ul> <p>作業や話し合いなど、グループで行ったことに対しあわせを評価しあうことで相互理解につながった。また1学期の間、同じグループで協力することで作業の効率化が図れた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ふりかえりの活用</li> </ul> <p>毎時間のワークシート提出を行い、ふりかえりから生徒の考え方や理解度を知ることができた。そして次の授業で、前時のふりかえりを調節することができた。</p> <p><u>引き付ける教材（映像、実験器具）について</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>動画</li> </ul> <p>バイオエタノール生成動画、はんだづけ動画、ロボット動作動画、等</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>実験</li> </ul> <p>エネルギー変換効率実験、短絡実験（シャーペンの芯）、ピーナッツ燃焼実験、等</p>		
当研究に関する 課題と展望	<p>週1回の少ない授業時間で教科書の中身を教えることも大事で、教科書とワークシートのつなぎ方に課題が残った。ふりかえり等を全体で共有できなかった。( )の穴埋めだけで終わってしまう生徒もいた。今後は、考える授業にも挑戦していくたい。またグループ学習では1人が遊んでしまうと活動が成立しないときもあった。メンバーによって評価の基準が一定でなかった。等いくつかの課題が残る。今後は生徒にもわかるような基準で評価できるよう支援していきたい。</p>		

【初任者研修履修証明プログラム 2019 課題研究】

① 板書の変化



② グループ活動



③ グループ評価

確認する事	自己評価	ペア評価
温めすぎて基盤の色が変化していないか?	1・2・③・4・5	1・2・3・④・5
はんだの量は適切か?	1・2・③・4・5	1・②・3・4・5
近くのはんだとひつついていないか?	1・2・3・4・⑤	1・2・3・4・⑤
はんだのつけ忘れはないか?	1・2・3・4・⑤	1・2・3・4・⑤
決められた作業が終わりましたか?	1・2・3・④・5	1・2・3・4・⑤
しっかり片付け、清掃はできましたか?	1・2・③・4・5	1・2・③・4・5

④ ふりかえり

- 苦労したこと、気になったこと、気づいたことを書きましょう。

始めやり方がわからなかつたけど、

だから(7-) なんとかつきました。

- 苦労したこと、気になったこと、気づいたことを書きましょう。

真ん中に付けるのが少し難しかつたです。

班の子と助け合ひお互い上手に出来たと思ひます。

### III 訪問指導の実際 ①

和歌山大学 客員教授 中家 英

#### はじめに

私は、初任者研修履修証明プログラムにおける学校訪問として、2人の初任者に対して月に3回の訪問指導、2年目教員に対しては月に1回の訪問指導を行ってきた。月曜日に訪問し、訪問日には、それぞれの教員の授業を参観し、放課後にカンファレンスを行っている。カンファレンスでは、参観した授業に関して授業評価シートに基づいて協議を行っていく。

授業評価シートでは、「教師の身体的技術」、「子どもへの対応」、「学習規律」、「教材研究・授業展開」、「授業技術」の大きく分けて5つの大項目と、それらをさらに細かく分けて3~4の小項目がある。その段階としてステップ1からステップ4までとして、初任者が採用されてからの最初の1年間を過ごしたあたりの目標をステップ1としている。

「教師の身体的技術」では、授業への心構え、声の大きさ、言葉遣い、話術、ユーモア、目線、表情、立ち位置の項目があり、「子どもへの対応」では、対応の仕方、ほめ方、配慮の仕方の項目がある。「学習規律」では、学習規律、学習環境、授業の開始と終了の項目があり、「教材研究・授業展開」では、教材研究、教科書、本時の指導計画、めあて、導入、構成・時間配分、まとめ、省察の項目がある。また、「授業技術」では、発問、指示、説明、助言、発言の取り上げ方、板書、ノート指導、机間指導、学習形態、教具、ICT、ワークシートの項目がある。

したがって、カンファレンスでは、本時の授業の技術にとどまらず、生徒指導や学級経営等の教師として重要なポイントについて、各段階の目標を設定しながら助言し、協議を行っている。

#### 1 A教諭について

A教諭は、大学を卒業後の今年度4月に採用され、3年生を担任している。学校は、各学年5学級程度の和歌山市内では大規模な小学校である。

A教諭は、授業の進め方や子どもたちとの対応等で多少の戸惑いを見せていたが、本人の真面目な性格と意欲により一つ一つの課題を解決に向けて努力している。

#### (1) 4月の様子

A教諭の最初の参観授業は、4月15日(月)に行われた社会科の授業であった。单元が、「わたしたちの住んでいるところ」であり、学習活動が、「前回の授業でまちを見て、気になるところ、行ってみたいところを考える」ことから始まり、「見えたものを東西南北に分けて発表」し、「隣の友達とスケッチした地図を見比べて、自分と違うところを見つける」、そして「どんな違いがあったか発表」し、「どうやったら同じになるか」を考えるようになっている。指導案は、略案として所属小学校で使っている形式によって、本時の目標、予想される児童の反応、本時の課題等を自分で考えて書かれていた。また、授業の参観の視点も3点入っていた。努力し

て書かれている内容に本教諭の意欲を感じた。

しかし、実際に行われた授業を見ると、社会科の単元のねらいを十分理解しているように思えず、授業で何をねらっているのかが分かりにくいものであった。

カンファレンスでは、授業のねらいをしっかりと持つこと、子どもたちをよく観察すること、子どもたちにとってわかりやすい板書をすること等を話した。また、授業中の声の出し方、集中しにくい子どもへの接し方、学習規律をつけていくことも話した。

新学期が始まつて1週間しかたっていないが、教室の掲示物がほとんどなかったので、

教室環境を整える意味でも、早めに子どもたちの作品を掲示することを伝えた。

4月の2回目の参観授業は、社会科「わたしたちの住んでいるところ」で、校区探検を行ったことから校区地図を作るため、自分の見つけた建物等を発表する内容であった。前回に比較して改善された点は、子どもの顔を見て話ができていたことと、子どもたちが静かに発表を聞けていたところであった。しかし、授業が始まって30分たっても板書がなく、子どもが発表しても自分で書くように指示するだけで板書しないので、板書の仕方を説明した。

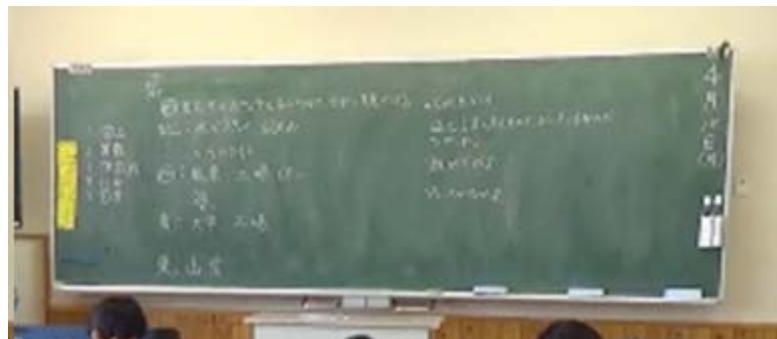
## (2) 9月・10月の様子

9月に国語「修飾語」の授業を参観した。導入では、夏休みに楽しかったことを一文で書くように指示していたが、一部の児童はどのように書いていいのかが分からず困っていた。また、楽しい夏休みを過ごせなかつた児童への配慮を考えると、もっと適切な導入があることを指摘した。授業の導入で児童をひきつけようとしたことは評価できた。

10月に道徳「ひきがえるとろば」の授業を参観した。教職大学院での道徳の集中講義で学んだことを生かして、本時の導入、展開、自分事としてのふりかえりを行い、授業構成としては1単位時間の授業の流れを考えて構成できていた。また、児童に相互氏名をさせながら児童の意見を聞いて計画に沿って板書していた。一方、授業中に何度かあらすじを確かめていたので、道徳の授業ではその部分で時間を取らず、本文に書かれていらない気持ちを考えることが大切であると助言した。

## (3) 12月の様子

12月に社会科「安全なくらしを守る」の授業を行った。消防署や警察署が関係機関と相互に連携して火災や事故などの防止に努めていることを理解する学習である。警察署の人の一日の仕事を表にした物を、黒板に貼るだけでなく子どもたち



4月板書

のノートに貼る分も用意して子どもたちが考えやすくなる工夫をしていた。子どもたちが予想した内容（意見）を板書するときには、チョークの色を変えていたことも今までになかったことであった。

子どもたちが自由に意見を出せるようになっていて、また発表を聞くときには相手の方を向いて聞くこともできていた。



12月板書

## 2 B教諭について

B教諭は、大学を卒業後に1年間の小学校の講師経験がある。昨年度は別の小学校で講師を行っていた。本年度は、2年生の担任をしている。学校は、各学年5学級程度の和歌山市内では大規模な小学校である。

B教諭の性格は真面目で、芯のしっかりとした中にも、小さい子どもたちに丁寧な言葉づかいで対応している。



カンファレンスの様子

### (1) 4月の様子

算数の「ひょう・グラフと時計」の授業を行った。授業中の本教諭の表情がよく、児童の様子を見ての声掛けのタイミングがよかったです。しかし、児童一人一人が書く活動がなく、授業の後半に本時のねらいに迫るころには児童が集中できていない様子があった。またせっかく作った教具がねらいに迫りにくいものであった。カンファレンスでは、授業に集中しにくい児童にはどのように接していくのか、授業のどこにどのような活動を入れればよいのか、ねらいに迫るための教具とは、等授業を作っていくうえでのこれから課題を話し合つた。

### (2) 9月の様子

9月に算数の「かさ」の授業を行った。4月当初、授業に集中しにくかった児童が、きちんと学習できていた。授業の導入では、B教諭は、「ジュースが飲みたいな。」と言ってペットボトルを取り出し、日常生活に結び付けて量感がとらえられるように工夫していたことにより児童をひきつけていた。

9月第2週に道徳「水の広場」の授業を行った。内容項目は、「善悪の判断 自律・自由と責任」である。教職大学院で学んだ道徳科の講義を生かし、内容項目を意識した展開をしようとしていた。中心場面を把握できていない児童がいたため、ロールプレイを日常の出来事で急遽入れたのは効果があった。しかし、このような場面では、教材に合った役割演技を入れていくとよかったですのではないか、もし入れるなら心の中を考えて言うような入れ方をすればよいという助言を行った。また、児童一人一人が自分のこととしてしっかりと考へる手立てについて話し合った。

### (3) 12月の様子

12月に道徳「つくえふき」の授業を行った。内容項目は、「公正、公平、社会正義」である。授業の導入では、毎日行われている掃除のことを想起させていた。B教諭の範読は、聞きやすく、状況がとらえやすい読み方をしており、子どもたちは教科書を見ながら集中して聞いていた。登場人物のお面を事前に用意しており、机を拭く動作化を入れたりして、内容の理解を分かりやすくするための工夫がされていた。動作化では、動作の様子だけではなく、それをしている時の心情を問うこと、中心発問などの大切な発問は、一回でわかる言い方にすることなどを助言した。

授業全般にわたって、9月に行われた道徳の授業よりも大きく向上していたといえる。



12月の授業の様子

## 3 C教諭について

C教諭は、大学を卒業後すぐに採用され、昨年度は新規採用教員として2年生の副担任をしていた。本年度、2年目教員として引き続き数学の授業を行っているが、所属している中学校の校務分掌により、行っている数学の授業数が昨年度の3分の1程度になっている。

C教諭は、丁寧な言葉で授業を行い、授業中に生徒たちを活動させようと努力していた。生徒たちへの言葉がけ等の対応は温かい中にも、凛とした姿勢が垣間見えた。

学校は、全学年で21学級の和歌山市内では比較的大規模な中学校である。

### (1) 6月の様子

3年生の「平方根」の授業で、根号の中の数を簡単にする授業であった。C教諭の説明が上手であり、生徒を分かった気持ちにさせていた。生徒たちの多くは、C教諭の説明や発表する生徒の説明を待っており、自分で解こうとしているように見えた。カンファレンスでは、C教諭は生徒への指示や説明がじょうずであることと、今後は、生徒たちが自ら問題を解こうとするような支援を考えいくとともに授業中に生徒の活動を取り入れていくことを話した。

## (2) 9月の様子

3年生の「二次関数」を終えた地点での総合的な関数の問題を投げ入れ教材として行った。C教諭によって示されたそれぞれ3つの平面図形が、毎秒 $x$ ずつ進むときのトンネルとその図形との重なった部分の面積を $y$ としたときのグラフを書くことをグループ活動で行った。問題はよく考えられていてたいへん興味深い内容であった。各グループの人数は、3～4人であった。生徒たちは、解答を導こうと意欲的に取り組んでいた。定期試験直後の授業でもあったので、投げ入れ教材を行ったが、以前に比較すると、数学への関心を持たせ、意欲を向上させた授業でもあった。生徒の活動が十分に入った授業を行ったが、それぞれのグループで各個人が「考える」ことから「聞き合う」活動をさせるにあたって、まず生徒一人一人が考えをもてるようるために、トンネルにいれていく物を用意しておいて実際に操作させることによって重なっていく様子を想像させる手助けが必要であると話した。C教諭の生徒とのコミュニケーションの取り方は上手であった。

## (3) 12月の様子

3年生の、「円周角の定理を用いて、弧の長さが等しい場合、円周角の大きさは等しくなるということを考えさせる授業であった。生徒たちの様子は、本年度参観した中で一番集中していた。その理由は、C教諭が一方的に説明を行っているのではなく、C教諭が生徒たちに課題を与えて生徒自身で解決するという構成ができていたことと、生徒が発表しているとき、それを理解できていない生徒がいると他の生徒に捕捉されるなど、生徒主体となっている授業を展開したためといえる。しかし、正解が板書されるのを待っている生徒も少なからずおり、これを改善するためには、次のことに取り組むとよいことを話した。

- 1 本時の課題を明確にする。
- 2 既習事項（弧や円周角の図）を掲示しておき、本時の課題（長さの同じ弧とそれぞれの円周角の図）を厚紙等で準備しておく。
- 3 ペア学習を進めやすくするために、ワークシートが必要。ノートに図を書く時間が不要となるうえに「長さが等しい」「角が等しい」なども適切に書かれているので生徒が考えやすくなる。
- 4 証明が苦手な生徒が多いが、段階的な指導として、書き言葉で自分なりに表現することもよい。

### III 訪問指導の実際 ②

和歌山大学 客員教授 南知 孝

#### はじめに

2019年度は初任者2名が配置されているA小学校に月3回程度、今年度2年目となる教諭2名が配置されているB小学校には月1回程度、学校訪問し指導を行った。学校では対象となる教員の授業を参観し、放課後には拠点校指導教員や校内指導教員、管理職等を交えての合同カンファレンスを実施した。カンファレンスでは授業VTRを観ながら授業を振り返ることを基本とした。このことは初任者や2年目教員にとって客観的に自分の授業を分析し、自ら改善点を考えたり新たな気付きを促したりするうえで非常に効果があったからである。また、大学教員として対象となる教員に対し、できるだけ具体的に且つ分かりやすく次時に繋がる指導や助言を心掛け教師力の向上に寄与したいと考え訪問指導をおこなった。

#### 1 初任者A教諭の1年間のあゆみを振り返って



VTRを活用したカンファレンスの様子

##### 【A教諭について】

A教諭は小学校での講師を2年間経験し、A小学校に初任者として配属され3年生担任となる。大学教員が初めて学校を訪問した時、A教諭は緊張していたのか表情は硬く口数も少なく、また声のトーンも低かったので子どもたちと良い関係を築いていけるのか少し不安な気持ちになったことを覚えている。

しかし、わずか2～3回の訪問・参観でその心配も見事に払しょくされた。授業中、児童には笑顔で接したりやさしい言葉かけをしたりと明るい雰囲気で授業が展開できており、子どもたちとは良い関係が築けていたように思われる。

放課後に行われるカンファレンスにおいて、A教諭は疑問点や問題点があれば、それらを蔑ろにせず納得できるまで質問したり尋ねたりしてくる研究心旺盛な教諭であることも分かった。

A教諭の年度当初と現在の様子を比較し、その成長した点について考察してみたい。

##### 「教材研究をする」ということについて

##### 【年度当初の訪問記録から】

学級の児童は自分の思いを表現したり友達の考えをしっかりと聞いたりできる子が多く

く、学ぶ意欲に溢れた集団であるように感じられた。

本時に参観した授業は、算数「円と球」の単元の導入時の授業であった。初任者は教科書に示された導入例とは異なる「玉入れゲーム」を導入として考え授業を行った。

本人曰く、ゲーム的要素があつて面白そうだったので、ネットの実践例から一部引用して計画したとの説明であった。

しかし、「何のための活動なのか」「どんなことに気づいてほしいのか」についての教材研究が十分でなく、安易な気持ちで取り入れたため「活動はあるものの学びの少ない」授業になってしまった。

カンファレンスでは、具体的な改善のポイントについて助言した。また、併せて、教材研究の仕方やその重要性についても次のように話をした。

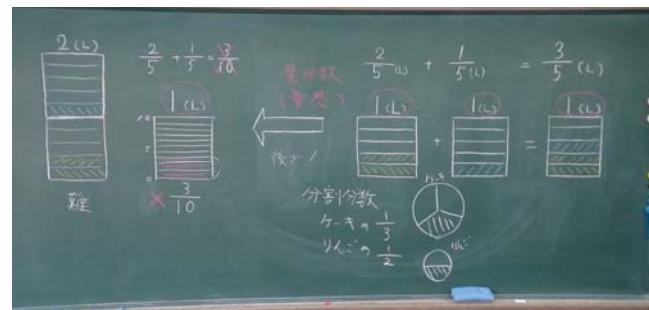
～「若い時に流さなかった汗は、ベテランになった時の涙になる」～

これは、教材研究の必要性や重要性を説いた先人の言葉である。指導者である教師は、授業を行う学級の子どもたち一人ひとりを理解する努力を重ねることに加えて、授業を行う各教科等の教材研究を地道に着実に行っていくことが大切である。教材研究を進めるうえでの大切なポイントとして、次の2点に留意するよう伝えた。

1点目はごく当たり前のことであるが、教材の内容をしっかりと把握・理解することである。そのためには、まず「小学校学習指導要領」や各教科等の「小学校学習指導要領解説編」、教科書会社が発行している各教科等の「学習指導書」を熟読し、単元や題材、1単位時



5月 算数の授業風景



大学教員による板書指導（算数 小数の授業）

間の指導計画等、その概要を把握することである。

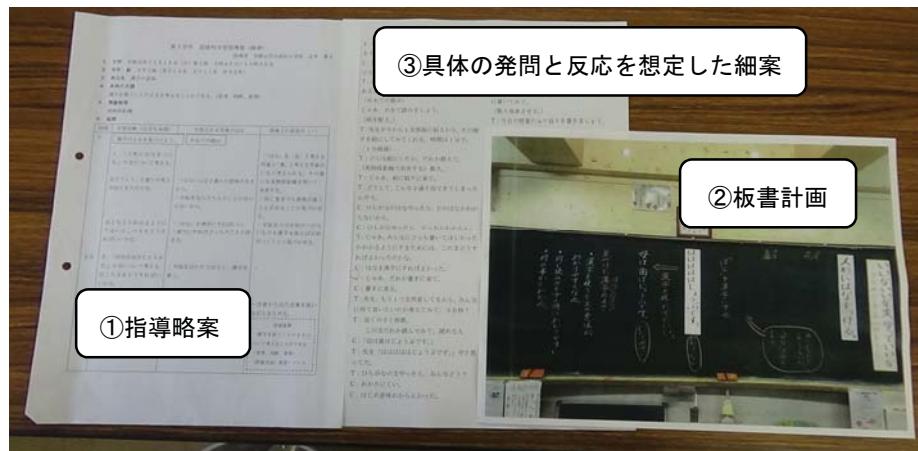
2点目は、指導事項や指導内容等、授業の骨格が明確になってくると、「教えるべきことは何か、何について考えさせるのか、授業の山場をどこに置くのか、そのためにどんな学習活動をどこに設定すればよいのか」等、具体的な指導事項を考え指導略案に記述していくことで授業の流れをしっかりとイメージすることである。このような教材研究を繰り返し習慣づけていくことによって授業構想力がつき、結果として子どもたちに魅力的な授業を提供していくことに繋がることを指導した。

この後、A教諭はカンファレンスでの大学教員等からの助言やアドバイスされたことを謙虚に受け止め、少しづつ自らの授業づくりに反映していくことになった。

## 【2学期の訪問記録をもとに】

9月頃から授業づくりについて、次のように大きな変化（①～⑤）が見られるようになってきた。

- ①指導略案の「主な発問」「予想される児童の反応」「評価」欄について、想定される具体的な記述が見られるようになった。
- ②事前に黒板に書いた板書計画を写真に撮り、別紙として略案に添付するようになった。
- ③教師と児童との具体的なやりとり（発問と反応）を想定し、別紙として添付するようになった。（細案）
- ④授業で子どもが活用しやすい自作のワークシートを作成するようになった。
- ⑤1時間の時間配分を意識して、授業を構成できるようになってきた。



～参観時に配付された授業に係る資料～

このように授業に係る準備が周到にできるようになったことに伴い、見通しをもって授業を進めていく姿が顕著にみられるようになってきた。特に、導入・展開・まとめ・振り返りの学習活動をきちんと位置付けたことで、授業展開に「ぶれ」が少なくなり、結果として常にゴールに向かって学習を進めていくようになってきた点を大いに評価した。

教材研究に加えて授業技術や子どもたちへの言葉かけや対応等、A教諭の1年間の成長には目を見張るものがあった。それは、本人の努力に加えて管理職や拠点校指導教員等々からのアドバイスや助言を謙虚に受け止められたことも大きな要因として考えられる。一步一歩着実に歩みを進める初任者の姿を目にし、大学教員として、さらに大きく飛躍・成長していってほしいと願う気持ちでいっぱいである。

## 2 B 教諭（2年目）の1年間のあゆみを振り返って

B 教諭は昨年度新規採用教員として B 小学校に配属され、本年度 2 年目となる教員である。1 年目は 4 年生担任、本年度は 1 年生を受け持つことになった。1 年目との大きな違いは、既に学校行事や学級の事務仕事等学校の 1 年間の流れを経験・理解していることであった。このことは 1 年間「見通し」をもって対応できるという心の余裕に繋がったと考えられる。この少しばかりの精神的な余裕が、教材研究をしたり単元の学習計画を立てたりすることに有効に働いたと思われる。

昨年度の参観を通じて、B 教諭の授業センスの良さや熱心に教材研究する姿勢に教師としての大きな「伸びしろ」を感じていたところである。



カンファレンスの様子

### (1) 学習規律の確立と子どもとの関係づくりについて



授業開始前のあいさつ

1 年生担任として、児童に学習や生活のルールを定着させるために機会を逃さず意図的に言葉かけを行っている姿が印象的であった。昨年度の経験（年度始め、学期始め等、最初が肝心）を踏まえ、始業、終業のあいさつ、学習道具の準備、発表の仕方や話の聞き方等について丁寧に指導する姿から、「学習の規律を定着させる」ことを第 1 義と考え学級づくりを進めていることが伺え成長の跡を感じた。

しかし、児童の中には指示が入らず私語をしたり、話を聞かず立ち歩いたりする児童もいた。B 教諭はこれらの児童にどう対応すればいいのか、またどういう言葉かけをすればいいのか、悩み困っているようだった。



子どもの活躍の場を保証した授業展開

カンファレンスでは、まず担任の話をしっかりと聞き取ることから始め、1 年生を担任すれば誰もが経験することであるということを伝えた。そのことを踏まえたうえで、それらの子どもとよい関係を作っていくことが事態收拾への近道であることを話し、そのためには教師からの意図的な働きか

けが不可欠であると話をし、次の2点を実践してみるよう促した。

一点目は、一日のうちのほんの少しの時間でもいい、学校生活の中でそれらの児童と必ず「コミュニケーションする時間を位置づけること」、二点目は、児童の言動を観察し機会を逃さず「褒める」ということを提案した。B教諭からは、とにかく実践してみるという回答があった。

それからB教諭は放課後や休憩時間等時間を見つけては、とにかく子どもたちとコミュニケーションをとることに努めたようである。また、児童ががんばったことや出来るようになったことについても称賛や励ましの言葉を忘れずかけたようである。

9月時に参観した授業では、私語をしたり立ち歩いたりする児童の姿は殆ど見られなくなり、落ち着いた雰囲気の中で授業が進められていた。B教諭のこれまでの粘り強い取組が功を奏したことを褒め評価し、今後も続けていくよう励ました。

## (2) 子どもが乗ってくる授業づくりについて

「授業に空白の時間を作らない」ことの大切さは、昔から授業の達人や名人と呼ばれた人々が授業づくりの肝・ポイントとして指摘してきている。

子どもが乗ってこない授業によく見られる光景として、「授業に山場がなく、1本調子でたんたんと進んでいく授業」がある。このことは時としてB教諭の授業にも当てはまることがあった。

年度当初のカンファレンスでは、「子どもたちが退屈しないような学習活動を仕組むこと、導入、展開、まとめを45分間でまとめるという意識を持つこと、導入は短く山場に時間をかけること」を助言した。

月1回の訪問であったが、回数を重ねるごとに、「子どもたちをいかに活動させるか」ということに焦点をあてた授業展開が多くみられるようになり、そのことに付随して明らかに授業が活性化していったように思われる。

特に10月に参観したB教諭の国語の授業は、児童は集中して最後まで頑張ることができた代表例である。その要因として、「読む、書く、話す、考える、動作化」等、子ど



10月 視覚に訴え考えさせる板書づくり



国語 具体物を使った導入の工夫

もたちの集中力が途切れないよう、また飽きさせないよう様々な学習活動を仕組んでいたこと、そのため授業のテンポがよく、児童に空白の時間を作らなかったこと、また、授業に参加しにくい児童に意図的指名を行い参加を促したことが考えられる。

大学教員からは「児童の活動の場を保証し、工夫を凝らした良い授業であった」と称賛の声も聞かれた。B教諭には授業づくりについて、少し自信めいたものが芽生えつつあるように感じた。

その後、参観した授業では教科の違いはあっても、「児童に空白の時間をできるだけ作らず、テンポを意識した授業展開」という点では一本筋が通った授業ができるようになってきた。何よりも1年生の子どもたちが一生懸命学習に取り組む姿がそのことを物語っている。

B教諭の著しい成長を感じた一年間であった。

### 終わりに

初任者A教諭、2年目教員B教諭二人について共通して言えることは、指導されたことや助言を受けたことに対し、それらを真摯に受け止め、再度自ら咀嚼して授業づくりや授業展開に反映しようと努力したことが挙げられる。

二人の教員ともに経験を重ねれば、近い将来学校のミドルリーダーとして、またメンターとして学校にはなくてはならない大きな存在になっていくことだろう。また、そうなつてくれることを願ってやまない。

A教諭の教室環境の整備　（学びの軌跡）



B教諭の教室環境の整備　（児童作品の掲示）

## IV 大学（教職大学院）で履修する授業の紹介

### —「授業・教材研究」シリーズにおける示範授業・模擬授業—

和歌山大学（教職大学院）では、初任者教員と学部卒の院生が共に学ぶカリキュラムを設けており、初任者教員は2年間で10種類程度の授業を履修することとなっている。1年目の4～5月は学級づくり（「学校・学級経営Ⅰ」）、6月ごろから授業づくり（「授業・教材研究」）、さらに集中講義で「道徳教育（小・中）」を履修し、2年目にも集中講義で「学校・学級経営Ⅱ」「子どもの権利」を履修する。

「授業・教材研究」はⅠ・Ⅱ・Ⅲに分かれ、PDCAサイクルといった授業論や指導案の作成について、また、発問や板書・ICT教育指導法といった基礎的な技術についての学びから始める。やがて、深い教材研究の進め方や活動的な学習の具体的手法、そして単元計画の検討など段階的に授業理論を掘り下げ、かつ実践的指導力を深めていく構成となっている。

中でも、受講生が大きな影響を受けるのが、実践的に授業を行いそれをめぐって協議する、いわゆる模擬授業である。和歌山大学教職大学院で行う模擬授業に関しては、大きく2種類に分かれている。大学院の教員が、その分野の専門性をいかして小中学校の先生役になり、実際に受講生を児童・生徒とみなして行う「示範授業」と呼ぶものと、受講生の代表が先生役になり、他の受講生が児童・生徒役になって行う「模擬授業」の2種類である。

「示範授業」では、授業が終わると、その授業のどこが優れていたのかを初任者と院生が徹底的に検討する。ここでは、先生の立ち居振る舞いや話し方、目線、子どもへの対応、発問などももちろんだが、深い教材研究に基づいた授業構成や教具の工夫といったものまで多様な視点で考察する。

学びが深まるポイントは、受講生が児童・生徒役として授業を受けていることである。教員がどのようにして授業規律を整えていくのか、どんな場面で褒め言葉をかけ、逆にどんな場面では安易に妥協しないで児童・生徒たちを学習に向かわせるか、授業を受けながらそれらを体感できる。教具一つでも教科内容に即して様々な工夫がされていることを再発見することとなる。

さらに、「示範授業」における発問がどのようにして生まれたのか、視覚教材一つにもどんな意味があるのか、そして大学院教員が教材の開発にどれほど労力をかけたのか、協議後の講義で初任者たちは初めてその背景を知る。講義で専門性の深さにふれると、「これまでのような教材研究や授業準備では、授業がうまくいかなくて当然だ。私も、教材研究を深めしっかりと授業に取り組もう」と、翌週から初任者の授業が変わりはじめるのである。

7月からは、受講生が自分の持つ学年を想定して模擬授業を行う。45分～50分を使って授業を行い、その後に4～5名のグループに分かれ、「良かった所」「改善すべき所」などを時間をかけてじっくりと協議をする。発表後に大学院教員から厳しいコメントがつくことも度々である。さらに受講生は講義後にその日学んだことを感想にまとめ、提出することとなっている。感想は大学院教員が講義通信としてまとめ、およそ月1回のペースで受講生に配付している。通信に掲載された他の受講生の感想を読むことで、前回の学びをもう一度深め、自身の省察の機会としているのである。

次頁以降に「授業・教材研究」の講義通信2回分を掲載している。受講生の感想から、学びの状況をご理解いただけたとありがたい。

# 授業・教材研究Ⅰ

## 箱根駅伝のドラマを 折れ線グラフから読む



6月13日から、第2クオーター『授業・教材研究Ⅰ』がスタートしました。この日は藤本先生による算数の示範授業『箱根駅伝のドラマを折れ線グラフから読む』でスタート。授業では実際に藤本先生の授業を児童役になって受けながら、各班が担当する着目点（教師の身体技術や授業構成など）を必死で考えるという濃厚な時間を作りました。その後、班ごとに付箋を使ってKJ法的手法で「藤本先生の授業の全体像」を分析・解明するという流れでした。導入は箱根駅伝の映像で興味を惹きつける、児童の気づきや主体性を生み出す課題1・2のワークシート、意欲を引き出す赤ペン〇付けなどなど、名人としてのワザが満載の45分でした。受講生が何を学んだのかは、このあと紹介する振り返りにたくさん出てきます。みなさんは、互いにどういったことを吸収し合っているのかを、この通信から読み取ってください。

午後は、宮橋先生の『授業づくりとPDCAサイクル』、深澤先生『発問』、

豊田先生『授業の基本設計について』、まるで1年分の授業を盛り込んだくらい内容の濃い1日でした。

宮橋先生の授業では「PDCAの視点から授業づくりを振り返る」作業も行いました。サイクルし続ける省察こそが、私たちを熟練者へと導いてくれるのだと再認識できました。

「バスの運転手はどこをみていますか?」という有田和正先生の発問は本当に見事ですね。良い発問のイメージがいっきに膨らんだことだと思います。さっそく、翌日からの授業づくりにいかしてみた人がいるでしょう！

初任者と院生が一緒に学ぶこの一連の授業・教材研究シリーズ。みなさん的心構え次第で、濃くも深くもなりえます。本気で剛速球を投げてくる和歌山大学教員陣の思いを、見事に打ち返す好バッターになってくださいね。

藤本先生の示範授業を受け、私は感銘を受けました。

私は子どもの頃（現在も根本的な部分はそうですが）、とても引っ込み思案で積極的に挙手や発言をする人間ではありませんでした。そのため、グループワークやクラスでの活動、交流を深めるようなアクティビティは非常に苦痛でした。

そんな背景がある私ですが、藤本先生の示範授業の際に、自分が考えた意見に対して、机間指導の際に『そうか！そんな意見もあるな！』と言葉を添えて、ワークシートに○を付けてくれたことが、とても嬉しく、自分の考えに対して、とても自信を持つことができ、発言したい！という気持ちが湧き出てきました。その後の挙手の機会では、『当ててほしい！』という気持ちがいっぱいでき、無意識に手をまっすぐ上にあげることができていたと思います。

藤本先生の示範授業を通して、『○付け法』を体験し、自分を認めてもらうことの嬉しさや、安心感を直接肌で感じることができ、私にとって教師人生の大きなポイントになったと確信しています。

このことを踏まえ、私は翌日から、授業で『○付け法』を実践しています。英語授業の小テストの直しの際に、机間指導をしながら、29人の生徒に『頑張ってるな！』『あと5分、ラストスパート！』などと声をかけながら、ワークシートの片隅に○をつけました。声のかけ方や、学習への促し方、○の付け方は適切なものだったかはわかりませんが、私自身とても気持ちよく授業を終えることができました。初任研で決意をし、実行に移せたという、自己満足だったのかもしれません、子どもを褒めて伸ばすということは、同時に教師も人間として成長できるのではないかという可能性を感じます。

初任研を受けて、たくさんのことを行って学びます。私はそれを即、実践できる環境にあることを幸せに感じますし、大学院の先生方のバックアップも非常に心強いです。この1年、なかなか大変ではありますが、この1年が勝負と肝に銘じ、教員という仕事に対して真摯に取り組んでいいきたいと改めて感じました。

小畠秀介（西浜中）



### ○はじめに

本日は第2Q開始の日にあたり、それに伴う形で初任研でも新しい範囲に差し掛かった。本日からはタイトル通り教材研究を中心に先生方から授業をいただき考え方を深めた。

### ○1、2コマ

藤本先生による小4折れ線グラフの活用分野の示範授業が行われた。箱根駅伝をテーマに折れ線グラフの傾きと変化を捉えることのできる特徴について学習させる内容であった。まず感銘を受けたのは授業準備の手厚さである。ワークシートだけでなく時間短縮のためのマグネット作成まではなんとなく自分の中にもあったものだが、発問に対する子供の回答を推測しそれまでも用意していたことは大変なことだと考え、驚いた。それだけ課題1で気付かせたかった「変化は折れ線グラフ

が読み取りやすい」が重要な要素なのだと考えることができた。目当てや狙いに関してはワークシートが非常に優れた装置になっているなど考えた。1枚半のプリントであったが「気付いたこと」から「新たに気付いたこと」更に最後には「ふりかえり」まで用意されていた。間にある課題や作業に取り組むことでどんどんと子供の考えの変化が見て取れるだろうと考えた。

先生にとってもこどもにとってもわかりやすい指標になるなど考えた。本当に素晴らしい構成であった。生徒に発問し、それによって授業が組み立てられていく点も素晴らしかった。個人的に終了後質問にいって尋ねた「指示棒はグラフを隠してしまわない工夫ですか」という問い合わせに対する答えや「直線は定規でひく以外ありえない」という点など数学のフィロソフィを強く持っている点も非常に魅力的に感じた。変わらない何かを強く持つことの大切さが感じられた。

#### ○3 コマ目

宮橋先生による「PDCA サイクル」についての授業を受けた。特に印象的だったのは「省察のシングルループとダブルループ」で、自分が今までなんとなく考えていたことが言語化された。普段の生活のなかで考えることの少ない再考と再構成について考えることはメタ認知に近いものがあると考えている。簡単な言葉で言うならば「疑うこと」かなと考えることができた。この思考について考え続け、専門家らしい考え方を身につけることが大切であると考えた。常に新しくあるためには既存のものを疑い、自らを照らし合わせていくことが肝心である。PDCA サイクルによって未来を推測し、成長していきたいと感じた。

#### ○4 コマ目

深澤先生による「発問」に関する授業を受けた。質問と発問の違いとはというところでは定義から見直し、その違いについて考えることで発問の重要性を捉えることができた。最近自分の中で「学ぶことの必然性」というワードが流行っていたところであったため非常に良い形で自分の中に取り入れることができた。「学ぶことの必然性」は子どもに学習意欲を喚起するには「解決したい」と思わせるような導きがいる、ということに近いのかなと考えることもできた。資料内にもあった「心地よい迷惑をかける」といったコミュニケーションもプラスで捉えることができたのはとてもよい学習内容になった。

#### ○5 コマ目

豊田先生による授業改善では3コマ目と似たような内容を更に具体的に深めることができた。さまざまな具体例を外から取り入れることでも省察は進展することがあるのかと気付くことができたし、実際にさまざまなフレームワークを知ることが出来たため良かったように思われる。方法とそれを中に組み込むための省察、全て合わせて授業は改善されていくのだろうと考えた。これからまた色々授業で学ぶことも全て血肉に変えていきたいと考える。

また本日は4コマ目に「三度の危機」という現象が登場した。今はまさに6月で環境にも慣れ、行動に自分がよくあらわれると感じている。今こそ再度自分自身について省察し、より強い意志を持って何事にも取り組みたいと感じることが出来た。

夏目大尊（院生）

示範授業を参観してみて、参観のポイントなど学んだ。授業構成、子どもへの対応、立ち位置、目線、発問の仕方、など様々な視点で重視を見ることが大切だと学んだ。先生は机間巡回で子どもの意見に赤マルを付けながらまわっていた。赤マルを付けてもらうことによって、発言しても間違いないじゃないと分かり、自信を持って発言出来ると感じた。書いていることに反応してもらうことは、子どもではないのに嬉しかった。

導入、本時の明確化、指示と説明の使い分け、主発問と補助発問、子どもへの応答、褒め方、支援を要する子に対する対応など、これらがとても大切だと学んだ。私はまだ教材研究不足なのでしっかりとする必要があると思う。今後の目標「①面白くない導入を止める」「②めあてとまとめを繋げる」そのためには、教材研究をしっかりしたいと思う。

#### ○ PDCA サイクル、授業づくりについて

教師として、専門家としてどのように自分の能力を向上させていく事が大切だということを学んだ。そのためには、PDCA サイクルを意識することが大切だと学んだ。問題解決に向けて、学び続け改善し続けていきたい。



授業構成のポイントとして、導入、展開、まとめをしっかりと見据えた授業構成にすることが大切であることが分かった。導入で子どもを引きつけることも大切だが、まとめをしっかりと押さえることも大切だと学んだ。

飯田さくら（院生）

今回の講義では、自分が仕事や児童に対してどのような関わり方をしているのかを振り返るいい機会となりました。今はまだ仕事が始まって2ヶ月を過ぎたところですが、この時期に振り返ることで、改善にも繋がると感じました。また、他の受講者がどのような意識で仕事をしているのかも知ることができ、とてもいい参考となりました。自分で考えるのではなく、他者の意見も取り入れることで、より良い改善策につながりました。今回の講義で振り返って策を立てたことを意識しながら、今後も効率よく仕事をし、さらにまた振り返って改善していきたいと思います。

授業では、主発問の必要性を再認識することができました。日々、授業案を立てている再に、発問の意識はしていますが、どこが山場だとか、ここが一番大切だとかは考えられていないところもありました。これからは、しっかりと何が大切ななどを意識して案を立てていきたいと思います。

相談については、自分も忙しそうだからやめておこうと思ってしまうので、なかなかできない時がありました。しかし、相談することは悪いことではないということが分かったので、これからはわからないことは先輩方に相談していく機会を増やしていきたいと思いました。授業の組み立て方については、いくつか課題が見えました。今回の講義で学んだことを意識して、子どもの反応ももっと考えながら、授業を考えていきたいと思います。

今回の講義で、自分を振り返ることができました。振り返るだけでなく、改善にも繋げていきたいと思いました。

小西海（藤戸台小）

午前中、藤本先生の授業を受けて、久しぶりに子どもに戻って勉強する気持ちになりました。私はまだ教科書や指導書どおりの授業しかしたことなく、今回箱根駅伝の順位から算数の棒グラフの授業につなげることができることに驚きました。赤鉛筆で丸付けをしてくださったり、自分が発表したことからめあてを考えてくださったりしたときには本当にうれしかったです。授業の中でも子どもたちに「やった」「できた」という喜びを味わうことのできる授業づくりを行っていきたいと思いました。

指導案については、まだまだ次の日の授業をどのようにするのか考えることで精一杯ですが、これから単元計画など一通りの流れを考えることができるようになりたいです。藤本先生の授業を受けて私が頑張っていくことは、①「わからない子」にも自信がつくように、机間指導で理解度をチェックすること。②チョークの色使いや定規の使用方法 の2点です。

グループ活動にもだんだんと慣れてきました。決められた時間内に意見をまとめることは大変難しいですが、達成感はそれ以上に大きいです。発問と質問の違いを考えてから、「バスの運転手」では様々な考えが出てきました。それだけ考えが出る中で、子どもたちに向かっての1番の発問を考えるために苦戦しました。大変だからといって、子どものことを考えずに発問を作ることは本当によくないと思います。時間がかかる分大変だけれども、クラスの子どもの実態に合わせて授業づくりを行っていこうと思います。



稻井杏里（松江小）

今回の授業教材研究Ⅰで、すぐれた授業として示範授業を受けました。授業は小学校4年算数科の折れ線グラフを学ぶもので、グラフを読み児童が自ら変化の様子（傾き）に気づかせるものでした。まず最初に気になったことは、グラフだけでなく黒板に貼る答えを予想した紙が何枚も用意されていたことです。また、先生の発問や指示説明の的確さに熟練度を感じました。そして授業中にされていた丸つけ法はすぐに実践に取り入れたくなるものでとても参考になりました。先生は終始机間指導を徹底されていて、みんなで授業をやっているという一体感を感じました。

僕は授業を受けていて、どこからこの安定感がくるのか疑問に思いました。授業中の立ち居振る舞いなのか、話し方なのか、いろいろポイントはあると思います。でも指導案を渡された瞬間に技術的なものだけでなく自信からくるものだと実感しました。特に授業の流れのプリントの受け答えの言葉計画が書かれていたものを見たとき、発問だけでなく指示説明が的確でこれだけの計画作ることは、自信につながると思いました。教師の技術次第で授業や児童をこれだけ操れるのはとてもすごいと思いました。ありがとうございました。

地阪大祐（楠見中）

授業を通して受けて感じた感想としては、授業を作るときも子どもの立場や考え方について置いてみることが重要だと感じました。示範授業のときも私たちが生徒になりきることで生徒の反応に対する教員としての指導、対応といった部分がさらに多くみることができたと思いました。さらに、授業自体も実際の感覚に非常に近いものになったのではないかと考えました。

また、発問に関する子どもの考え方や捉え方に着目することでどういった発問が効果的で生徒の興味を引くことができるのか、考えやすいものであるのかが分かりました。そこから、それを主

発問として導入を行い、授業を展開していくことができるのではないかと思いました。そして、実際にやってみて生徒の反応が悪い場合には、その発問が生徒にとってはイメージしづらいものであるのではないかと考えることができ、より良いものへと改善を行うことができると考えました。

これらのことから、本日学んだことをこれから授業作りに活かすためには根本として児童生徒の立場で考えることが最も重要であることが分かりました。

木村隆太（院生）

今回の授業で感じたのは、1コマ目に行われた藤本先生による示範授業についてです。私は中学なので直接小学校算数に関するわけではないのですが、示範授業の時の藤本先生の授業への工夫で真似してみたいと思ったところが何点かありました。そのうちの一点として、机間指導の時の、丸つけをしてまわるという方法です。この方法は、児童生徒の学習への意欲を上げるための方法として、とても良いと思いました。また、丸つけをしてまわるため、形成的評価にもつながるので、とても有用な方法だと私は感じました。

他にもたくさん学べるところがありました。今後、私が授業をするようになったときには今回の藤本先生の示範授業のような授業に近づけるよう、努力していきたいです。

長谷川廉平（院生）

今回の講義で自分が最も大切にしようと思ったことは「子供が私語をしているのを子供のせいにしない」という言葉です。今まで子供が僕の話を聞かない、授業と関係ない話を始める、といったことを子供のせいにして、なぜ授業に集中できないのかを一人悶々と考えていましたが、「自分の発間に興味がない」ということを指摘され納得しました。今までの自分は恥ずかしいことに、話を聞いていない子供達を「話を聞く姿勢へのこれまでの積み重ねがないからだ」「すぐに集中が途切れてしまっている」ととらえてしまいました。実際にそういった要因も少しあるのかもしれません、毎時とは言わずとも、授業に取り組めている時間も存在することを鑑みると、やはり、自分の発間に子供たちの興味をひく面白さに欠けていたり、指示が不明瞭だったりすることの要因が大きいのだろうと感じました。

今後は、講義内でも言っていたように、子供のせいにするのではなく、まず自分の発言や行動を振り返り、何か誤ったことはしていないか、もっとよくなるためにはどうすればよいのかを自ら考えていくようになろうと思いました。

伊東弘輝（砂山小）



藤本先生の示範授業を見て、まず感じたことは自分もこんな授業をしていくように早くなりたいと思いました。今の自分でも真似できることをどんどん取り入れ、自分のスタイルにしていきた

いです。教科書を隅々まで読み、授業を通して子どもの成長を促していくことのできる教師になれるように努力していきたいです。そのためにも自分の授業をしっかりと計画・実行・評価・改善を行い、常に自分を見直していきたいです。また、自分のスタイルにこだわるのではなく、枠組みを見直し再編成にも挑戦していきたいです。将来自分はどうなりたいのか目標を持って行動していくかなければいけないと思いました。

クラスの子どもたちが興味を持って授業に取り組めるように魅力ある発問を考えたときに、今の自分が子どもたちにしている発問はとても難しいものになってしまっていると感じました。発問

の意味が分かりにくく複雑になって何を答えたらいいかわからないというものになってしまっています。もっとわかりやすくコンパクトにまとめ、誰にでも答えることのできる発問につくり替えていきたいです。また、発問を考えていく中で何が主発問で何が補助発問なのか意識しながら、子どもたちに出していくようにしたいです。今日の講義では授業を見直し、改善していくことの大切さを学ぶことができました。

松井豪（藤戸台小）



### ●藤本先生の授業を受けて、

授業づくりには数多くのポイントがあることを理解できました。現在の私自身は学習規律を徹底できていないことに最も悩んでいるのですが、学習規律についてばかり考えていても、授業はうまく作れないと考えました。どんな授業構成、発問を準備すれば子どもたちが興味を持って授業に取り組めるのかという視点も大切にしたいと考えます。

学習規律を整えたからといって、授業の内容に子どもにとっての新たな学びがなかったり、発問が子どもにとって答えにくいものであったりすると、子どもたちが授業に意欲的に取り組むことは難しいと考えます。だから、藤本先生のように様々なポイントを意識して授業を行えるように、日々の授業で何か一つでもできるようになりたい目標を持って取り組みます。

また発問について学習し、全員が手を挙げられるような発問を実践しようと思いました。現在のクラスでは手が挙がる子と、挙がらない子が決まっているような状況で、手を挙げにくい子にとっては授業に意欲的に取り組むことが難しいと考えます。だから一つの授業に一度は全員の手が挙がるような発問を準備するようにします。

小坂祐貴（松江小）

教材研究という観点で藤本先生の授業を受けさせて頂きました。私自身の素直な感想は、「この域に達するまでにどれだけの時間がかかるだろう、果たしてたどり着けるだろうか」ということでした。それ程、緻密に時間をかけて教材研究をされていると感じました。そして、教材研究に対する意識や考えが私とはまるで違うと感じました。

これまで学部を含めて教育実習などで行ってきた教材研究は、単元に対する理解を深めることに力を注いできたと思います。そして、それらは私自身の単元に対しての知識理解の習得が殆どだったとも思います。これらは最低限の事として必要ではあると思います。しかし、私のしてきたことは最低限の知識を得たにすぎませんでした。



本講義とは別になりますが、深澤先生と岡崎先生の共同論文を紹介していただき、後日その論文を読ませて頂きました。（＊1）論文中には野口芳宏氏の言葉を引用しつつ「教材研究」は3つの段階〔「素材研究」「教材研究」（狭義）「指導法研究」〕に分けて考えることが出来ると述べていました。3つの段階とは「素材研究」とは子どもに教える立場であることをひとまず置いて、ひとりの大として作品や教科書に向かうこと。「教材研究」（狭義）とは、教師として内容を子どもたちにどう教えるか、という観点で教材を読むこと。「指導法研究」は、授業の組み立て方、すすめ方など教材の活用を具体的に想定した指導方法のこと。と述べられていました。このことを踏まえると私の行ってきた教材研究は、3つの段階のどれを観ても、どれにも当てはまらないことが分かりました。そして、私の行ってきたことは「教材研究」ではなく、知識を習得することだけだったのだと分かりました。

また、これらのこと念頭に、改めて藤本先生の示範授業を頂いた指導案を参考にしながら熟考させて頂くと、1つ1つの発問、質問は教材を本当の意味で捉えられていると感じました。そして、授業の展開や指導方法にも様々な工夫がなされており、3つの段階を授業として体現なされていると思いました。

私はこの2年間でこの「教材研究」を考え、そして学び、少しでも藤本先生に近づいていけるように努力していました。その為には宮橋先生のご講義の「PDCAサイクル」。深澤先生のご講義の「発問と質問」。豊田先生のご講義の「授業展開の様々な方法」。これらを1つ1つ確実に自身の力として身につけていかなければなりません。大きな目標に向かって、まずは目の前の課題や講義を真摯に受け止め、私自身の深い学びに繋がるように日々精進していきたいと思いました。

板倉右樹（院生）

藤本先生の示範授業では、箱根駅伝を題材にした四年生算数科の「折れ線グラフ」を通して、教材研究の大切さを学びました。自分の学級で、「折れ線グラフ」の単元を終えたところでしたが、子どもたちが折れ線グラフを使う良さを実感することに難しさを感じた単元でした。棒グラフを上手にかける子ほど、グラフに表す際は棒グラフに拘っていて、折れ線グラフの必然性が十分理解できない指導をしてしまっていたのだと思います。藤本先生は、「箱根駅伝のドラマ」という切り口で、順位変動を折れ線グラフに表したほうがレースの様子がよくわかるということを実感させる授業をされました。授業の流れを始めから終わりまで詰めた展開例を見ると、単元・本時のねらいに迫るためにには、ここまで教材研究をする必要があるということがわかりました。



身につけさせたい力を念頭に置いた授業づくりを心がけたいものの、最近はそれ以前の、子どもとの関係づくりや学級集団づくりに頭を悩ませることが多いです。望ましい授業づくりやそれに関する理論の講義を聞いて「やっぱり私は研究をふまえ、自分でも研究ができる実践家でありたい」と思いながらも、「今の自分と学級の状況では、そこまでは無理かな」と思ってしまいました。しかしながら、そういったマイナス条件があっても、学んだことを生かそうとする向上心や、自分がなりたいと思う教師像に向かう熱い思いは持ち続けています。日々、自分の実践を批判的に見つめ、努力して参りたいです。

崎濱木実（高松小）

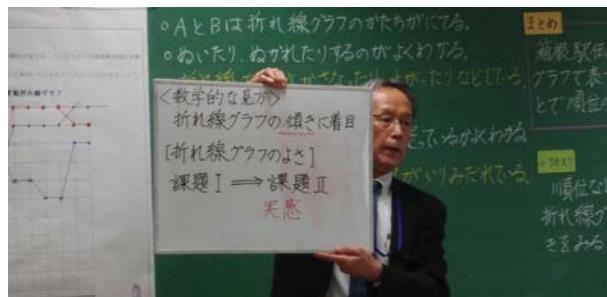
授業づくりというのは、教材研究をいかに深くするかが大切だと感じた。実際に、授業をつくつてみる、それだけではなくて、生徒の反応、予測されることを教師が精いっぱい想像し次の展開につなげていくことが大切だと感じた。楽しい、おもしろいの上に成り立つ生徒のわかった、なるほどといった発見を大切にしたい。教師の一方的な思いや考えだけでなく、それを生徒自身が実感できるような授業づくりに取り組んでいきたい。

私が今回の講義で一番大切だと感じたのは、発言や視線の合わない生徒を授業でどう関わるか、という点です。授業は安定したもの、時間や、流れのためにはわかる生徒を優先してしがちです。

一人ひとりの触れ合いは欠かせないものでありますながら、実際には難しいと感じています。自分の中学校の時には前にノートを見せてくるという形で先生がコメントをするというやり方でした。どんな形であれ、生徒と関わっていく機会は、国語では難しいところもあると思いますが、努力したいと思います。自信や主体的に取り組む態度を育てられればと思います。

森下真実（日進中）

藤本先生の示範授業を見ていただき、一つ一つの教師の行動、言葉がとても大切だと改めて感じました。また、子どもたちの考えを予想しておくことで、スムーズに授業へつなげていくことができるのだと思いました。発問についての授業では、普段何気なく発問していたが、発問によって、子どもたちの思考の流れは変わるし、授業も大きく変わらんなどと思いました。教師は授業をする上で、しっかりとねらいを持っておかなければならぬし、そのねらいに向かって、子どもたちを動かしていくのは、教師の洞察力であったり、発問になるのかなと改めて思いました。しかし、教師がすべて動かしていくのではなく、子どもたちの考えを予想したり、考えておくことで、



子どもたちの考えをスムーズにつなぎ、ねらいに迫っていく必要があると思いました。そのためには、普段からの子どもたちの様子を把握しておかなければならぬし、教材研究も丁寧に行っていく必要があると改めて考えさせられる時間になりました。辻本貴大（高松小）

まず衝撃だったのが、導入の箱根駅伝の映像でした。私の知っている箱根駅伝は、道路上から撮られた、アナウンサーの実況が入ったものです。でも、『がんばれ』という激励、叱咤の声を聞いたとき、体が震えました。緊張とプレッシャー。それだけでなく、そこに届かなかったたくさんの涙があったのだろう——そんなこと思わせる導入に一瞬で引きつけられました。そして箱根駅伝がしっかりと流れの一部として存在していて、数学へと繋がっていました。きれいだと思いました。いつかきれいな授業をしたい……と、悔しく思いました。そのためには、とりあえず地道に教材研究をして実際に試して修正して、数（かず）をこなしていくしかないと思いました。

「省察のシングル・ループとダブル・ループ」も、私の中では考えが深まった部分でした。再考するためには、人に聞いたり、調べたりすることが必要だと感じた一方で、それらの欠点は、その事象のみの単発で終わりやすいことなのかなと思いました。なので、忘れずに確実に次に生かすためには、「立川スタンダード」などの型は有効だと思いました。ただし、型にはめればよいという意味ではなく、埋もれた状態のこれまでの知識・経験を、有機的に結び付けて取り出す手助けになる、という意味で。

また、印象的だったのが3限目に授業が少し脱線したところです。周りを見回すと、全員の顔が前を向いていて……。そこで思ったのは、例えば、

- ・先生 100%伝える→児童生徒 10%受け取る→児童生徒の中に残っているのは 10%
- ・先生 50%伝える→児童生徒 50%受け取る→児童生徒の中に残っているのは 25%

このどちらが良いのか。さほど考える余地はないのかな?と思います。子どもたちの様子を見取る力が大切な、まだ私には無いな、と思っていました。

今日からすぐに使えるという点では、指導案などを作る際は『主発問・補助発問・指示・説明』などの用語が使えばよい(=自分に対しても意識付けしやすくなる)、ということを思いました。個人的には、この部分にかなりの感動がありました。

下西幸太（院生）



## 学んだことは、実践して はじめて身につく

学びっぱなしで終わらないように、すぐに自分の実践につなげることが大切です。つまり、実行力のあるなしが成長の分かれ目です。

感想を読むと、すでに成長しあげている初任者がいることがわかります。お互い、刺激しあって、山の頂上をめざしましょう。

## 授業・教材研究Ⅲ

# 負けに不思議の負けなし



2月6日の『授業・教材研究Ⅲ』の最終回でした。一日の様子を院生の振り返りで紹介します。

本日は「授業教材研究3」及び初任研の最終日となった。

1・2時間目には谷尻先生による授業と辻本先生による模擬授業「理科」を行っていただいた。3時間目には伊澤先生による伊澤式教材研究の授業があり、最終4・5時間目では初任者、院生の一年間の学びを紹介しあう時間が設けられた。今回は模擬授業を中心に取り上げた感想になった。

### ○1・2時間目

谷尻先生の授業セッションでは「褒めること」「励ますこと」「勇気づけること」「認めるここと」など、他者をエンパワーすることについて考えた。認められたい欲は多分誰にでもあって、それは人によってどのような形で欲しているかが違うのだろうと考えた。使い分けられるように、またこちらが時には演者として呈する大切さを

再認識した。

辻本先生の授業で一番感じたのは子どもがどのように行動するか、を念頭においていた授業展開だったと考える。導入の段ボールでは子どもの興味をひき、この後の展開が楽しみになるように考えられていた。また、授業技術としての見せ方や話のリズムが大変心地良かったため、スムーズに授業の世界に入っていくことができた。なり切ることや演じることの大切さを最近考えていたのでとても参考になる姿を見せていただけた。

また、展開の中での例えば粘土を乗せたトレーは落とすことを防止していたように、例えば手応えをやり終えた後に天秤に乗せる展開なども、子どもはどう考えるのかを想定した構成にされていた。事前に一度自クラスで行われたものを再度ブラッシュアップされたことで大変子どもにとって親切な

授業になっていたように感じた。三年生において重要視される「比較」に関しては黒板を見るだけで、実際に手で触ってみて、比べられるように至る所に配されている点が非常に良いと考えた。

黒板に子どもの考えが現れるのは、授業終了後に黒板を見た際に、同じ文言が並んでいるところに気づきがあった。単に結果の予想ではなく、「どのように考えたか」という過程を重視すべきかなと考えることができた。黒板に子どもの考えが現れることは、先日の藤戸台小学校での研究授業を見させていただいた際に得た視点であった。初任研で、皆さんいる場で、あの体験を共有させていただけてありがとうございました。ありがとうございます。優しい雰囲気をはじめとした、辻本先生の魅力もたくさんでした。

### ○3時間目

三時間めでは伊澤先生の実践経験から生活科をはじめとした教材研究の方法について学ぶことができた。実際に芋を比べてみる時に、やっぱり実物は大切だと考えた。目の前にちゃんとしたものがあって、目の前のものと向き合った時にどのように、何を感じるのかが一番大事ではないだろうか。これは社会科でも同じで、リアリティを持って課題に取り組めるかどうかが学びの中核になっていると子供は自然と学びに向かっているように思う。優れた教材で授業を行うことの大切さが再度感じられた。また、そのためには自分がその地域についてよく知り、地域の教材に触れることを繰り返し、知見を広げて豊かな人間になる必要があるなと考えることもできた。伊澤先生、芋まで用意していただきありがとうございました。藤本先生、茹でることまでしていただき、ありがとうございました。

### ○4・5時間目

この時間では初任者と院生合同で3グループに分け、発表と協議を経てそれぞれの学びを紹介しあった。森下先生と板倉くんは日進中つながり、伊藤先生とはボランティアつながり、辻本先生とは三年生つながりと、自分にとって大変良いグルーピングで行わせていただけた。反面で、他の皆様の一年間の取り組み等を知ることができなかったことがとても残念に感じた。グループ内で3人の先生方が発表してくれたように、紙面では伝わらないことがたくさんあると考えた。目の前の子どもたちを見て、どのような力を、学びを、と先生方が発表するところを見て、それは先生方の「願い」であると感じた。院生として一年間学んできただけでは絶対に得られない、一番いいものではないだろうか。

本日が最終回となってしまったが、一年間で一番学びが多かったのがこの初任者と共に学ぶ授業の数々であった。また、今回の辻本先生の模擬授業内容は単元の組み替えを行った上で行なっていただいたようで、それには、共に学ぶ私たちに向けてのメッセージも込められており、そのようにして取り組まれたことで私たちの学びをエンパワーしていただいた。初任研の励まし合って共に高めあうような、あるべき姿が垣間見えたような回だったと感じている。

夏目大尊（院生）

### 2月6日の授業内容

	授業内容	担当教員
1・2限	1年間の集大成の模擬授業 理科（辻本先生）	谷尻
3限	伊澤式教材研究	伊澤
4・5限	課題研究成果報告＆修了研究中間報告	宮橋・豊田

\*タイトルの「負けに不思議の負けなし」は南先生が、辻本先生の授業講評の中で紹介された、元プロ野球監督・野村克也監督の名言です。ご冥福をお祈り申し上げます。

## 受講生の感想

午前は、谷尻先生による子どもの所属欲求についての講義を受けた後、辻本先生による模擬授業がありました。模擬授業は小学3年の理科で、自分がこれから授業をしていく「重さ」についての授業だったということと、最後の模擬授業ということでいつも以上に身が入りました。理科という教科の特性上、準備の段階が他の教科に比べてとても重要で、実験器具の調整や材料の選択、調達の時点で授業にかなり大きく関わっているのだと感じました。

授業後の指導助言として南先生からお話を聞いていただきました。「勝ちに不思議な勝ちあり、負けに不思議の負けなし」といった名言など、直接的な授業内容ではなく、主に教師として生きる姿勢、授業に臨む姿勢について語っていただきました。特に「自分への投資を惜しむな」という言葉が自分の印象に残っています。本を読んだり、研究会に積極的に参加したりするなどして、自分の教養を高めなさいという言葉です。中でも本を読むことについては、有田先生などの本を少し紹介していただきました。自分は決して活字が苦手などということではなく、むしろ読書は好きなのですが、4月からの自分を振り返ってみると家に帰ったらご飯を食べて寝るだけという日々が多かったです。2年目の目標の一つとして、本を読む習慣を身につけ、自分自信の教養を高めるということを加えたいと思います。

次に、貴志先生からは自分なりの色についての話を聞いていただきました。今の自分たちは教師という名のパレットの上に立ち、多くの先生や経験から様々な色を足したり混ぜたりしながら自分だけの色を作っているのであると。色の濃い先生、淡い先生、本当に様々ですが、まずは淡い色をどんどんと吸収していく、自分が目指す学級経営は、授業はどのようなスタイルを目指すのかを少しずつ決めていきたいと思います。南先生の自分への投資と少し似ている部分があるのですが、これから自分の生き方について考えさせられました。

思えば、今の出会ったばかりの子どもたちの姿と、現在の彼らの姿は大きく異なる点が多くあります。こういった点が自分の色について知るための手がかりになるのかなと思いました。子どもたちの変化に敏感に気づき、自分のパレットでどのような色を作っていくのか、明確にしていきたいです。

午後からは伊澤先生による教材研究等で大切にしていることについての講義と、初任者研修のまとめを行いました。もっとも心に残ったのが「楽しんで教材研究をする」という言葉です。研究授業すらも楽しむ心が重要というのには驚きました。楽しく、無理をせずに自分も子どもも知的好奇心を揺さぶっていかなければならぬと教わりました。かつて、深澤先生からも「まずは教師としてではなく、一人の人間としてその教材の面白さを感じなければならない」と教わりましたし、初任者研修の別の講義でも、教師自身が子どもの前で笑っていることが大切であると教わりました。この仕事は自分が本当に楽しいと感じないと続かないし、子どものためにならないのだなと改めて感じました。

最後の初任研のまとめですが、時間的な都合もあり、全体を3グループに分けたので全ての発表を聞くことはできませんでしたが、改めて今まで共に研修を受けてきた仲間が、それぞれの課題をもって日々の授業に取り組んでいるんだなと感じました。至極当前のことに今更気づいたのかもしれません、今までの研修で、同じテーマについて話し合ったり、1つの授業に対して意見を出し合ったりすることはありませんでしたが、自分自身のことについて話す機会があまりなかったのでとても新鮮に感じました。初任の仲間、共に講義を受けてきた院生、それぞれがそれぞれの課題を持ち、

日々頑張っているのだから、自分ももっとがんばらなければと、非常に前向きな気持ちで1年目の研修を終えることができました。

1日を通して、2年目やそれ以降の自分の生き方や学び方を考えさせられること

が非常に多い日となりました。とはいって2年目に向けて、あんなことがしたい、こんなことを頑張りたいと思うことはあるのですが、まだまだ今持っている子ども達のことで頭がいっぱいになっているというのが現状です。しかし、今日感じたこと、学んだことは、これから長い教師人生での生き方について大きく影響するものばかりだったと思います。本日の研修で学んだことだけでなく、この一年間の研修で非常に多くのことを学ばせていただきました。宝の持ち腐れにならないよう、学んだことを見返す時間、これまでの自分を振り返る時間を定期的に設けていかなければならぬと切に感じました。

最後になりましたが、あつという間過ぎてしまった1年でしたがとても濃く盛沢山な毎日でした。そんな日々を、お忙しい中毎週学校に訪問してくださり、指導し、相談に乗ってくださった先生方、毎月教職大学院で自分たちのために準備し、講義をしてくださった先生方に支えていただきました。本当にありがとうございました。教職大学院で学んだということに恥じぬよう、これからも精一杯研鑽していきます。二年目研修からも引き続きよろしくお願ひします。

伊東弘輝（砂山小）



今回の講義では、集大成ということもあり、さまざまな学んできたことの確認が出来ました。児童生徒との関係性についての欲求について、現在児童はどのような位置にあるのかを確認することが大切だと分かりました。考えもせずに有名な指導を真似してみたりするのではなく、実情に合った適切な指導をしていかないといけないと思いました。自分の学級では4月当初様々な問題などがあり、どうなるのかと心配していました。しかし、助言を受ける中で改善していく、その助言が欲求に適した対応の仕方だったと分かり、自分でも見極める力をつけていきたいと思いました。授業も大切ですが、子どもをしっかりと理解して指導できるようになりたいと思います。

辻本先生の模擬授業は、今まで学んできたことが盛り込まれている授業になっていて、とても勉強になりました。次の単元が同じ「ものと重さ」なので、参考にさせていただきたいと思いました。このようにして、他の方の実践なども見て学んでいきたいと感じました。

教材研究についても、やはり自分が楽しんでいかないと子どもも楽しく学んだり学力がついてこないのかなと思いました。実際に力を入れた単元は子どもはとても楽しそうにしていたり、テストの点数が全体的に良いように思います。全ての単元を詳しく研究するのは難しいですが、楽しんで教材研究していきたいと思いました。

一年間学んできたことを忘れずに、これからも様々なことを学び続けて行きたいと思います。

小西海（藤戸台小）

まず、谷尻先生の講義で、クラスの子どもたちの不適切な行動が、どのように進行していくのかを学びました。自分のクラスの子どもたちにも、授業中にわざと望ましくない行動をする児童がいます。そのような子は注目を引こうとしていると思うので、ただ叱るだけではいけないと考えました。勇気づけについて、「ありがとう」を伝えることは、これまでも意識してきましたが、「私言葉」については意識していませんでした。これからは、私言葉を使うことや授業の内容を工夫することを頑張って、児童が適切な行動をとれるようにしたいです。

辻本先生の模擬授業では、理科の実験を取り入れた授業のポイントを学ぶことができました。児童に予想とその理由を考えさせる場面では、教師の肯定的な受け止めもあり、様々な意見が出て、実験への意欲が高まったと感じました。また、実験の手順や形の作り方を丁寧に説明したことで、グループごとの実験がスムーズにできて、結果の共有もできていました。また南先生の指導助言で、実験の結果が指導内容と異なるものになった場合の対応を学びました。実験結果を正しく理解させられるように、事前の準備や児童への説明の工夫に加えて、もし結果が思うように出なかつた場合も考えた上で、授業に臨むようにしたいです。

伊澤先生の教材研究についての講義では、それぞれの教科に応じた教材研究の工夫の仕方を学ぶことができました。生活科では地域の人やものを題材にして、子どもたちが興味を持つ単元名を設定した事例を見ることができました。自分自身も小学校の地域にある人・ものについて、調べたい

と思いました。国語では、教材の順序を変えたり、文を加えたりといった仕掛けによって、子どもの意欲が高まる学びを学び、自分も使ってみたいです。算数では、操作活動について学び、ものを扱うことによって、児童に量感などの感覚を養わせることを、自分も大切にしていきたいです。

1年間の課題報告の交流では、それぞれが自分の課題や高めたいことについて、1年間取り組んだことによって、うまくできるようになったこと、そして新たな課題が見つかっていました。だから、何か目標や課題を持って、日々の学級経営や授業に取り組むことが、自分の成長につながっていくと感じました。初任者研修は終わりましたが、今後も自分の課題や目標を意識して、日々取り組んでいきます。

小坂祐貴（松江小）



今回で初任研最後となる講義なので、自分自身この1年を振り返ってみると本当に短い時間だったなと感じます。しかし、その短い時間の中でも、とても密度の濃い講義を教授の先生方に指導していただき、院生の皆さん、そして同じ初任の先生方と共に受けることができました。講義では自分が知っていた知識は、より深い理解になり、知らない知識はたくさん自分のものになりました。また、模擬授業を通して初任の先生方の技術を学び、自分の模擬授業では、院生の皆さんや初任の先生方からはたくさんのアドバイスをもらうことで、自分の授業をより良いものにしていくことができました。楽しくやりがいのある1年間だったと感じています。

1時間目の講義では、児童・生徒の関係性については、所属欲求を満たすための原理を、競争原理から協力原理についていくことが大切になってくるということを学べました。それにかかわって、教師側の児童・生徒に対しての声かけも、意識していかなければならないものがあることを知りました。児童・生徒に「勇気づけ」ができる声かけをしていきたいと思います。これからは、できるだけ多くの「私言葉」や「ありがとう」を言葉の中に入れて、使っていきたいです。また、時間を見つけて自分の成長につながる本を読んでいきたいと思いました。

2時間目からの辻本先生の1年を締めくくる模擬授業では、とても良い刺激をもらいました。自分はこの1年でここまで成長しているか少し不安になるほどでした。

これからも負けてられないという気持ちをもってどんどん頑張っていこうと思います。

しかし、その後にあった伊澤先生の講義で学んだように自分自身が楽しめるようにして、子どもの知的好奇心を刺激していくような授業づくりをしていきたいです。

最後に課題研究発表会では、同じグループの先生方が様々な取り組みをされているのを知ることができました。参考にして自分の授業研究に取り入れたいです。

たくさん学べる機会があるうちに、様々な刺激をもらい、多くの先生方の良い授業を見させてもらい、自分だけの色のクラス経営、授業づくりをしていきたいです。

松井豪（藤戸台小）

今回、授業・教材研究Ⅲで子ども達との関係性について考えました。子ども達がとる5つの作戦の進行で、権力闘争をしかけるのが深刻に進行していく度合で真ん中に位置していてどうとらえるべきか悩んでしまいました。この一か月の間で一度そういった経験がありました。授業開始時に隣の生徒（板書を書き写している最中）に話しかけ授業準備ができていない生徒に対して、「そろそろ教科書、ノートを早く出して、集中して取り組もう。」と言ったことに対し、「やってまーす。」と軽い感じで返してきた。そのことに対し「じゃあ出してから言おかー」と返答した、するとまた「やってまーす。」というやり取りがありました。最後に「何回も言わなくていい。」と言ってしました。

今思うと反抗であったかもしれないし、権力闘争であったかもしれないと考えるととても残念な気になりました。不適切な行動に対してどう返すか？無視ではないですが、スルーをするのも一つの手であるし、ある程度の距離感で対応をすればよかったなど反省しました。勇気づけなど適切にコミュニケーションをとり、生徒との関係を築いていきたいと思います。

地阪大祐（楠見中）

一年に渡る初任者研修の最後の1日でした。この初心者研修では様々な事を学んだと思います。1番記憶に残っているのは、藤本先生・深澤先生・伊澤先生が行って下さった示範授業です。先生方

が積み重ねてきた経験や知恵の豊富さや、それを基に授業を構成されているのを実際に体感出来たことはとても良い経験になったと思います。また目指すべき授業を経験させて頂いた事で、これから先の長い教員人生を通してこのような授業が出来る様になろうと強く思いました。そして、ゆくゆくは先生方を超えていけるような教員になる事を念頭に置いてこれからも学び続ける教員でありたいと思います。

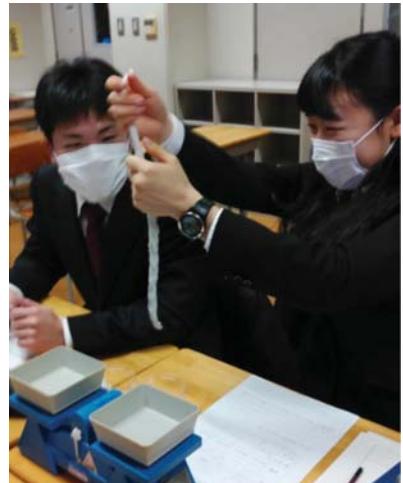
初任者の方々にはとても感謝したいと思います。現場経験のない私たちが多忙な先生方と一緒に学ばせて頂くことは、意識のズレや認識の違いなどもあったと思います。しかし、初任者の先生方は暖かく私たちを受け入れてくれました。そして、一緒に学ばせて頂くことで、初任者の先生方からは現場の大変さや教員という職業のやりがいなどを教えて頂き、私たちからは大学院で学んだ知識などを少しでも共有できたと思っています。この一年間共に学べた事をいつまでも大切にしていきたいと思います。

本日の授業では、初任者の先生が一年間取り組んできた研究成果の発表をしてくださいました。その中で、伊藤先生のクラスには、課題のある児童が複数在籍しており、一年間とても大変だったと言うお話を聞かせて頂きました。ですが、先生の諦めない姿勢と子どもたちと全力で向き合う姿勢を貫き通したこと、少しづつではあるけれど良くなってきてているというお話もあり、その時は苦しくても貫き通すことの大切さを教えて頂きました。また、一年通して関わらせて頂いた森下先生にはとても感謝しています。一年を通して授業を参観させて頂き、カンファレンスなどを通して共に学ぶ事ができたと思っています。毎週学校訪問させて頂いてる中で、森下先生が生徒に囲まれて楽しそうにしている姿を見てとても羨ましく感じていました。私も残り一年間でしっかりと力を付けて、教壇に立てる実力を持って生徒たちと共に成長できる教員になりたいと思っていました。

さいごに、一年間講義をして下さった先生方、共に学ぶことができた初任者の先生方に感謝の言葉を述べさせて頂きます。一年間本当にありがとうございました。

板倉右樹（院生）

初任者の理科の模擬授業では手順を押さえながら実験すること、また子どもの考えを黒板にまとめることの重要性を学ぶことが出来た。実験の手順については一つひとつ理解させてから進むことで、スムーズに実験に取り組めることが分かった。実験結果の誤差を教師から伝えるのではなく、子どもが発見することが大切である。思うような結果にならなくてもなぜそのような結果になったのか考える機会にもなると思う。しかし、教師自身が何度も予備実験をし、実験器具の確認や結果の確認をしっかりとおかなければならぬと改めて思った。どの順番で実験するのが良いか、実験をする教室は適切かなども考慮しなければならないのだと学ぶことが出来た。



伊澤先生の教材研究についての授業では、子どもが調べたい、学びたいと思える授業の工夫が大切だと学んだとともに、地域のつながりが本当に大切なだと理解した。また、生活科や総合的な学習の時間、あらゆる教科を繋げることで、学びが深まるのだと感じた。教科書ばかりで教えるのではなく、教科書で学んだことを地域に発信することや、地域に調べに行く機会を沢山作りたいと思う。そのためにはまず教材研究をしっかりと理解を深めたいと思う。

初任の先生の課題研究報告を聞いて修了研究に向けてもっと具体的なテーマに絞っていきたい。

この1年を通して初任の先生方と共に講義を受ける中で、多くの学びがあった。1つは授業づくりについて、もう一つは学校や学級づくりについて学ぶことができたと考えている。

1つの授業づくりについては、多くの先生方の示範授業や模擬授業を通して、その都度協議を行う中で様々な角度からの視点意見が私自身常に新鮮であった。そして講義の中での知識を得ることでさらにその新鮮な意見に対して理解が深まった。これらの学びを通して、私自身が授業するにあたって、足りない部分を参考にさせてもらったり、面白い私の考えにはない発想だと感じたものを授業の教材としてストックさせていただいた。それらを上手に使うためには、まだまだ私の授業力では發揮しきれないと感じることもあった。そういう環境でこの1年学ぶことができたと言う事は私自身を見つめ直す良い機会だったと感じた。

また、学級や学校づくりについては、講義の中で様々な場面について先生方の赴任先の学校や学級についての話を聞き、そこで問題点や実態について学ぶことができた。そして、子供たちへの接し方やそういった問題への対応等を学ぶことができた。そしてグループ活動を通して先生方の考え方や自分たちの考え方などを話し合いすることでその問題に対してより深く真剣に考えることができた。また学校の話を聞く事はこれから先私が学校に教員として入ったときどのような課題にぶつかるのかをイメージや推測ではなく、実際に今現場で起きている課題であると言うことの切実感を目の当たりにすることができた。

中学校においても担任の教員が常にその学級にいるわけではないが、どれほど真剣に生徒たちに向き合っているのかによってその学級の雰囲気やつながり意識などが大きく変わってくることを知ることができた。そしてそれがインターンシップ実習でいかせていただいている学級でどのような学級づくりをしているのかと言う視点を持ちながら参観することができた。こういった、実際の学校現場で起きているリアルな課題に対してどのような解決策があるのかどのような対応していくかなければいけないのかということを講義を通して理論として学び、実習でそれを学んだりすることで私自身これから先何を学んでいき何に注意して振る舞っていかなければいけないのかを考えることができた。

この講義で学んだことを活かして、来年度での実習ではより良い教員を目指すものとして実践していくたいと考えている。

木村隆太（院生）

谷尻先生のお話の中で、特に印象に残っているのは、「勇気づけのポイント“私言葉”」です。その言葉が、「Iメッセージと You メッセージ」という学部で受けた心理学の講義とリンクしました。“私言葉で”というスタンスは、相手を大切にすることだと思うので、大切なことだと思いました。

「構造的なノート」が伊澤先生のお話のなかにありました。その中で思っていたのは、例えば板書、ノート、ワークシート等を子どもたちの学びを促すような、もしくはサポートするようなものにまで昇華できているのだろうか、ということです。自分自身まだまだ考える余地——というか余りに目を向けられるほど考えられていないかもしれません、今日のお話を聞いて、もっと、もっともっとできるはずだ、とやる気がでました。辻本先生の意図をもってつくられた模擬授業を見たから余計にそう感じたのかもしれません。

話は変わりますが、最近個人的に流行っている言葉が「故きを温ねる」です。過去に配られた学

校・学級経営、授業・教材研究の感想を読んでいると、自分では感じなかったことを読むことができたりしました。「それぞれの意見や想いを共有したり遡ったり重ね合ったりすることができる」——ほぼ1年前に学級通信の授業を受けましたが、年間を通してその学びを改めて感じたように思いました。

下西幸太（院生）

### 【模擬授業について】

拙い模擬授業でしたが、みなさんに参観していただいて、たくさんのご意見をいただくことができました。みんなの意見を聞いて、まだまだ改善すべきことがたくさんあるなと感じました。

理科の学習については、3年生は、2年生の生活科から理科へと変わる学年です。そのため、初めの段階で理科を嫌いにはなってほしくないという思いを強く持っています。それは、社会科も同じです。そのため、理科と社会科の授業は特に子どもたちの「はてな」を意識するようにしました。子どもたちから出てきた疑問などを授業にどう生かせるのかを考えできました。まだまだ、自分には足りないところがたくさんありますが、この気持ちは忘れずに取り組んでいきたいなと思います。

### 【1年間を振り返って】

1年間の初任研を振り返って感想を書きます。教職大学院での研修、現場での授業を通しての研修どちらも自分にとっては、大きなものでした。教職大学院では知識や考え方を学びました。自分の頭の中では理解したつもりでした。しかし、現場での研修を通して、実践することの難しさを痛感させられました。現場で自分がやってみると通用しなかったり、効果がなかったり、悩んだこともたくさんありました。

毎週の研修を通して、子どものことを全く考えていなかった自分がいることに気づきました。授業も自分主導で考えていたり、自分のやり方に子どもをはめ込んでいる自分がいました。でも、研修やカンファレンスを通して、自分の授業に対する考え方、子どもとの関わり方が大きく変化しました。やはり、「子どもがあつての授業」「子供を主役にする授業」にしていきたいし、そのための関わり方、接し方が必要だなと思うと、授業を考えたり、子どものことを考えたりするのが徐々に楽しくなってきました。

今回の講義の中で、南先生の「自分への投資を惜しまない」という言葉が印象に残りました。自分の教養を高めていくことが、これから大切になってくると感じました。「大切なことは教えない」という言葉も印象に残りました。教えることが教師の役割ではなく、子どもたち同士のつながりや気づきをサポートしてあげられるような存在になれたらいいなと思いました。自分には程遠いことだと思いますが、一歩一歩ステップアップし、貴志先生の話されていた、多くのことを吸収できるような色を持った教師であり続けたいなと思いました。

辻本貴大（高松小）

今回で最後の初任研となりました。最後の初任研ということもあってか、初めての初任研のようなピリッとした空気感があり、私の気持ちも引き締まりました。

谷尻先生の問題行動が気になる『所属欲求』の講義では、自分にとって、とても耳の痛い話であり、非常にためになる話がありました。馬のあわない生徒に対して、私はその生徒を救おうとしたのだろうか？逆に距離を置き関係性を崩しているのは、私が原因なのではないだろうか？と自問自答しました。まだ何かやれることはある。関われるチャンスを作り、何かで『勇気づける』可能性

は残されていることに気付きました。生徒にとっての良い先生との出会いとは、このような部分にしっかりと関わってくれる人物なのではないだろうか、と考えました。

辻本先生の模擬授業は、1年間の集大成の授業でした。小学校で実践したことの反省を生かして再構築した授業でした。授業の計画をし、それを行い、評価し、再び実践するといったサイクルは、確実に自分の実力を向上させるための手立てと改めて実感しました。また、辻本先生のような対話的な授業は、授業への没入感を高めてくれるものだと感じることができました。

伊澤先生による『伊澤式教材研究』では、楽しんで教材研究をすることの大切さを学びました。子ども達の知的好奇心を刺激するような授業づくり、探求心をくすぐるような授業。クラスに一滴のエッセンスを落とすことで、広がる波紋をおこせるような発問を追求していくたいと思いました。授業の導入を工夫することで、子どもたちに活動が生まれるような授業を目指したいです。

最後に、成果報告の発表をしました。ここではこの1年をかけて、いろいろな学校や実習で皆がそれぞれの目標や研究内容にむかって頑張ってきたことの意見交換会をしました。新しい学びや、出会いが多く1年ではありました。それ以上に大変でつらい日々もあったことは確かです。皆さんの発表を聞き、意見を交換する中で、私はとても勇気づけられました。そして、見えないところで頑張ってきた同期の仲間がいることに気付けました。

1年間を通して、この教職大学院では、多くのことを学びました。2年目は、ここで学んだ資料を参考に私らしい学級経営や授業をしていきたいと思います。また、日々の実践をしながら、教職大学院で学んだことや、指導訪問でのアドバイスは非常に役に立ちました。なにより、親身になり支えてくれる大学院の先生方や、拠点校指導員の先生に感謝しています。今年度も残り2か月を切りましたが、教職大学院で学んだことを最後まで実践していきたいと思います。1年間、大変お世話になりました。そして、ありがとうございました。 小畠秀介（西浜中）

今回の初任研は、1、2時限目は辻本先生の模擬授業で、3時限目は、伊澤先生による伊澤式教材研究、4、5時限目は、初任の先生方の課題研究の報告と、私たち院生の修了研究中間報告をしました。まず、1、2時間目の辻本先生の授業は小学三年生の理科の授業を行いました。授業としては、子どもに対する対応の丁寧さ、導入のユーモアといった、辻本先生の人柄のよさということがよくわかった授業でした。理科の内容としては、課題の残った授業ではありましたが、導入からの授業の流れがしっかりと工夫がされていて、私も参考にさせてもらいたいと思いました。

次の3時限目の伊澤式教材研究では、実際に伊澤先生が行った取り組みから生活科、国語科、算数科から教えてくれました。生活科では、地域の特性を生かした単元構想を学び、国語科、算数科では、板書・ノート指導の方法を過去の教育者の言葉から教えてくれました。

4、5時限目は、私の班は小畠先生、稻井先生、小坂先生、下西くん、長谷川という班編成でした、下西くんの発表は一度聞きましたが、他の初任の先生方の報告を聞くと、皆たくさんの経験をして、実践をしているのだなと思いました。教師になってからの学びもあれば、失敗もあり、失敗に対しての改善をすることで、今後の成長の糧にしているということが、報告からよく伝わりました。この報告を聞いた私は、現場に出る

前に、初任の先生に負けないぐらい研鑽と修養を積んで、現場にでようと思いました。

今回で初任研は最後でしたが、藤本先生、深澤先生、伊澤先生の示範授業や、教授陣による様々な講義、初任の先生方の模擬授業という、たった一年間だけなのにたくさんの学びを得ることができました。私自身現場に出た際、これまでの学びをできる限り生かせるよう復習を怠らず、自分の力として身に付けられるよう今後も努力し続けていきたいです。

長谷川廉平（院生）



午前中は辻本先生の模擬授業を受けました。私は理科を教えたことがないので、新鮮な気持ちでした。粘土を使って形を変える際には、粘土の感触が久しぶりすぎて、形を変形することがとっても楽しいと感じてしまいました。子どもたちが天秤を用いて重さをはかることに興味を持つよう工夫されていたこと、重さが変わらないようにカップを用いるなど、先のことを見据えられていた

ことは、自分も真似していかなければならぬと感じました。理科は実験が多く、自分自身子供の頃にすごく興味を持っていましたことを覚えています。実験や観察など活動的なことが多い中で、安全面に気をつけながら行わなければならず、座学だけの授業では興味をひくことができないところに理解を教える難しさを感じました。

午後からは、1年間を通しての活動報告会をグループに分かれて行いました。私は、1年間グループ活動をどのように行うのかについて考えてきました。子どもたち同士での教えあいや、説明ができるようになってほしいという願いからです。しかし、毎日の授業では、私が話しそぎてしまったり、うまく子どもたち同士でグループ活動を行うことが出来なかつたりしています。まだまだ分からぬことだらけですが、分からぬで終わらすのではなく、自分が一生懸命に取り組んで、自分自身少しづつでも成長していきたいと思います。1年間ありがとうございました

稻井杏里（松江小）



この四月に初めて先生という職に就いた。和歌山市に來るのも初めてで、右も左もわからずスタートした。まず、担任になることがわかった。入学式を終えてからは一瞬だった。

部活、クラス、学年の生徒をまず覚えたい。面白い授業をしたい。生徒と深くかかわる教師でありたい。良い・悪いの線引きだけでなく、どんな生徒にも寄り添いたい。自分自身の勉強もしたい。そんなワクワクがいっぱい詰まった4月だった。しかし、約1年たつという今、達成されたことは何もない気がする。

先日の成果報告を聞いていると、何も変わっていないのは自分だけではないかという不安に襲われた。大学生の時は自分の興味関心も高くいろんなことに取り組めたが、今はそんな力もない。つ

らい、しんどいという気持ちはないけれど、自分自身に前向きな気持ちがなくなった。「そんなことできへんやろ」という無言の圧力みたいなものが学校にあると思う。「こうしたい」「ああしたい」という自分の考えや意見はたくさんあったはずなのに、そんな思いさえ湧かなくなってしまった。

初任研に行くとキラキラした大学院生や成長している初任者、実践を語ってくださる先生方。さまざまな人と出会えて、現実から抜け出せた感じがしていた。道徳の授業などは、自分にとって希望の光のように感じた。大学院で学んだときは、自分自身にプラスになっていると感じ、学校でもしようという気持ちが起こった。でも、実際に学校に帰ってきてできたことはほとんどない。それ

が非常に心残りである。同時に、自分自身のこれから課題にしたいと思った。

学びは自分自身を前向きにさせてくれると実感した初任研だった。教師という職業に慣れてきたところだが、もっと前向きに新しいことに取り組む力を身につけたい。

森下真実（日進中）



この研修は、授業について学び、授業改善をしていく研修でしたが、そこまで到達していない自分がいたと思います。辻本先生の模擬授業を見ると、先生自身が授業を楽しんでおられて、とても素敵なお先生だなと思いました。私にとって、この一年は社会人として初めて過ごした一年であり、担任として初めて子どもたちをお預かりした一年でした。そこで分かったのは、教員として、特に担任として必要なのは子どもの思いを受け止めることだということです。辻本先生は、学級の子どもたちに温かい目線を配り、子どもたちとのやりとりを大切にしておられました。そんな辻本先生だからこそ、授業について貪欲に学び、素敵な授業ができるのだと思います。子どもたちとの心の交流が、授業を豊かにするのだと思います。

ふり返ってみると、「こうすればよかった」と思うことばかりです。大変な一年間でしたが、学ぶ意欲の高い方々に刺激を受けることができたことが一番の成果です。自分を見つめなおす機会になりました。



崎濱木実（高松小）

## 一年間、お疲れさまでした～

長いようで短かったこの一年間。最後が新型コロナウイルス感染予防対策ということで、子どもたちとじっくり一年間のまとめをする時間もなく終わってしまったことは心残りだったと思います。

ながーい休みでストレスをためていたり、学習が遅れがちになっていたり、生活リズムが崩れいる子もいることでしょう。でも、それ以上に学校に期待している子どもたちと保護者がたくさんいることを忘れずに！ 間もなく新学年。心機一転、仕切り直しの1年がまた始まります！

2020年度もよろしくお願いします！

## V. アンケート調査結果の概要

豊田充崇（和歌山大学教職大学院）  
貴志年秀（和歌山大学教職大学院）

### 1. はじめに

当調査は、和歌山県教育委員会並びに和歌山市教育委員会の協力のもと、連携協力校の学長、拠点校指導教員、校内指導教員、初任者及び2年目の教員を対象に実施したものである。本プログラムの結果を示すとともに、その評価・判断を加え、今後の本プログラムの改善・充実に役立てるという視点から実施した。

### 2. 調査の目的と内容

当調査の主たる目的は、本プログラムの実施内容や実施方法と成果や課題との関係性を捉え、本プログラムの目標がどの程度達成されているかを可能な限り把握することにより、本プログラムの評価・考察を行うとともに、その改善と充実を図ることにある。

また、調査結果の考察を通して、「適切な初任者研修のあり方」、「初任者・2～3年次教員の成長を支える環境のあり方」に役立てることができると考えている。そのため、初任者への指導的立場にある学校長、拠点校指導教員、校内指導教員に対しては、「学び続ける教師」の育成という観点から、校内環境づくり（指導体制を含む）などに対する考え方、初任者の成長とその要因、協力校の教員や研修に対する影響、ならびに本プログラムへの要望等についてリサーチすることとした。また、初任者及び2・3年次教員に対しては、「学び続ける教師」へと成長するために重視している点、初任者の成長をどう捉えているか、校内カンファレンスの評価や校内研修への影響等について調査を行うこととした。

### 3. アンケート調査結果

学校長8名・拠点校指導教員7名・校内指導教員9名・初任者教員10名から得た回答結果を以下に記す。

#### 3.1 「学び続ける教師」として重要と考えられる点について

まず、下記の3者に対して、「学び続ける教師」として成長していくための取り組みについて、自由記述で回答を得た。

（学校長向け設問）初任者や若手教員が「学び続ける教師」として成長していくために、貴校が重要と考え取り組まれていることは何ですか。

（拠点校指導教員・校内指導教員向け設問）初任者や若手教員が「学び続ける教師」として成長していくために、あなたが重要と考え取り組まれていることは何ですか。

（初任者教員向け設問）「学び続ける教師」として成長していくために、あなたが重要と考え取り組まれていることは何ですか。

学校長からの回答では多く分けて、「子ども理解」と「授業実践力」が重視されていた。「子

供一人一人を大切にした教育を推進することを第一に、子供と正面から向き合い、心に届く指導・支援を心がける」といった回答や、子ども理解は同時に保護者理解にもつながり、「保護者の思いや願いを受け止めるとともに、真摯に対応できる」ような力も同時に求められるとの回答もあった。また、授業実践力については、「単元構成力を身につけさせたい」といった回答が多くあり、目前に迫った授業を単発に捉えるのではなく、連続性のある授業計画が重視されていることがうかがえた。そして「常に同僚から学ぼうとする意識を高めていきたい」といった回答も多くみられ、日々の教員間の同僚性を高めることで、初任者の学びにつなげるような期待がなされていた。

当設問については、これまででは、どちらかといえば、「まずは授業力」が重視されていた傾向があったが、本年度は子ども理解・保護者理解が上回ったのが特徴的であった。

また、「日々の実践の中で出てきた課題や悩みに的確なアドバイスを与える、壁を乗り越えさせ、達成感を積み重ねていくことによって自身の成長を実感させる雰囲気を職場の中に生み出すよう気を配っている」といった記述からも、校長は初任者教員の育成のために、こういった「教員同士がともに学び合う風土」を意図して校内に構築していることが強調されていた。

なお、「綱紀粛正及び服務規律の確保」「コンプライアンス研修／保護者対応に係る研修／学習・生徒指導に係る研修」が重要との回答もあり、教育現場の抱える諸課題に対して、初任者教員といえどもプロフェッショナルな集団の一員であることが求められていることが分かる。

**拠点校指導教員からの回答**においても、やはり子ども理解に基づいた学級経営の力が重視されており、「学級を集団と見る見方の獲得・集団の規律の形成」や「到達したい学級の姿」をイメージさせることが重要視されていた。また、「常に子どもの側に立って考える」といった回答もあった。さらに、「いろんな先生方と交流し、刺激を受けたり、情報を得たり、悩みを相談する」といった回答からは、やはり「同僚性」の重視などもうかがえた。

拠点校指導教員は、自らの長期の教師経験に基づいての指導がなされていることは当然として、「授業や児童への対応をきちんと記録したものをもとに、一緒に振り返り、自ら良かつたところや改善点に気づくことができるよう配慮している」といった回答や、「学び続ける教師として、教師自身も自己の資質向上に力を注ぐ必要がある」、「初任者には現在の課題を明示しながら社会の変化に対応していく柔軟性を身につけさせたい」といった回答があるように、初任者自身が学んでいく姿勢を重視した指導がなされていることがわかる。

また、「グループワークによる共有化、課題解決能力育成に重点を置いて取り組んでいる」といった回答もあるように、「教え込み」ではなく、児童生徒自身がお互いに刺激し合いながら学び合う様子、その成果を初任者自身が実感するような配慮もなされていた。教師自身も他者や多様な情報から学び続けるのであって、児童生徒らもそうであって欲しいという指導員の方々の思いが感じられた。

つまり、単に、ベテラン教員から初任教員に授業のノウハウを直伝するのではなくて、他の教員との連携を重視したり、目前の授業実践だけではなく、今後の教師としてあるべき学び方の姿勢までを意識して指導されている拠点校指導員の姿が浮かび上がってくるのである。拠点校指導教員は、その指導の厳しさの反面、良き理解者・相談者として的一面も兼ね備え

た存在であり、初任者の励みにつながっていることは確かであろう。

次いで、「校内指導教員」の回答についても、上記と同様であった。つまり、子ども理解と学級経営力を基盤として、授業研究・授業実践力を高めることが重視されていた。

「学級経営を何事にも優先させること、学級経営の土台がしっかりとしないと上には何も乗ることはないことを常に意識させる。」といった回答や、「単元をどう見通して、子供たちに身につけさせたい力は何なのかを明確にして取り組むようにしている。興味をもって取り組める教材づくり、学ぶ楽しさを味わえるような授業展開など、学級の子供たちの実態に応じた学習展開について考えるよう心がけている」といった回答はその1例である。

また、こういった力をつけていくためには、やはり初任者に対して様々な先生方の授業を参観し、自らすんで授業をみてもらい、周りの先生方の意見を聞くことが基本原則であることが述べられている。その際の助言やアドバイスを素直にきく姿勢・謙虚な態度が重要であること、失敗しても、反省して次に生かしていくべきという思い切りも大事だというような、自らの経験から判断した力強い文体での回答が多くあったといえる。やはり、ここでも同僚性の重要さがうかがえた。

近年、授業指導技術のノウハウ本が多数出版されており、授業実践のアイディアがインターネットで簡単に入手できる時代ではあるが、やはり職員全体の学ぼうとする姿勢や雰囲気が教員の成長を促す手立てになることは間違いないといえる。

なお、初任者の回答は、これまでの指導側の意図を汲んだ物が多く、「他者の意見を肯定的に受け止めたり、他者の授業などから自分にも活かせる物がないかをさがしたりして、自分の授業や生徒指導などに積極的に取り入れていくことを意識している。」といった回答や、「困ったことや悩んだことがあったらすぐに相談する。」というような回答が多くあった。

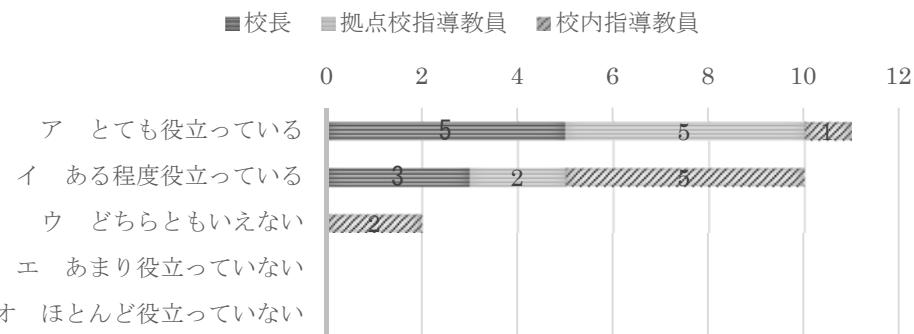
そして、「教材研究を怠らないこと」「一人ひとりに応じた指導を考えること」といった記述や、自らの授業を振り返って指導を仰ぐといった記述も多くあり、初任者の意気込みを感じるとともに、それを支える指導員の方々の存在の大きさを感じとれたといえる。

また、「カンファレンスで助言して頂いたことを実践する」という記述もあり、校内の先輩教員の授業を見て学び、自ら実践して振り返り、そして周りからの助言に耳を傾けるといった好循環が構築されている状況もうかがえた。「学び続ける教師」にむけて、常にまわり（教師集団）から学ぶ姿勢を持つといった回答がみられたことは、学校組織の一員として、成長できる環境にあるということの現れであろうと考えられる。

### 3.2 初任者の成長について

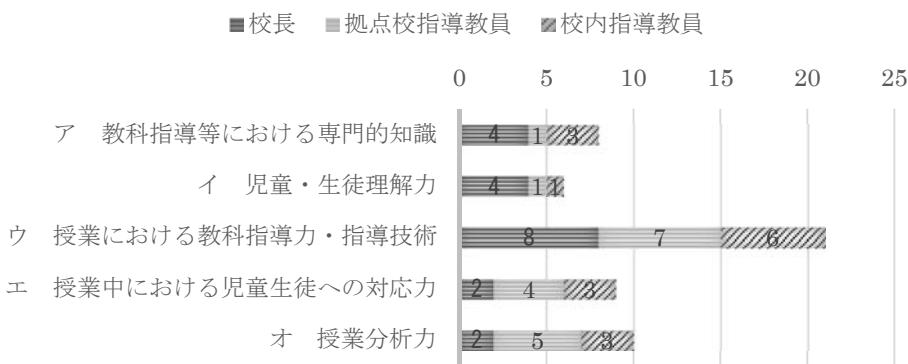
下記の2-1のグラフ（本プログラムが、初任者の成長にどの程度役立っていると思われますか）では、校長、拠点校指導教員とともに、「初任者研修プログラム」が「とても役立っている」「ある程度役立っている」との回答を得た。特に5校の校長が「とても役立っている」と回答している点には注目したい。しかしながら、校内指導教員には「どちらともいえない」との回答が2件あり、後にも詳述するが、「多忙感」や「大学内での研修」に疑問を抱くケースもあったため、この点については真摯に受け止め、改善方策を検討していきたい。

## 2-1 本プログラムが、初任者の成長にどの程度役立っていると思われますか。



以下のグラフは「2-2 初任者が成長していると思われる点」について、3者（学校長8名・拠点校指導教員7名・校内指導教員9名）の結果を比較したものである。

### 2.2 2-1でアかいを選択された場合にお答えください。初任者が成長していると思われる点を、次からすべて選んで下さい。

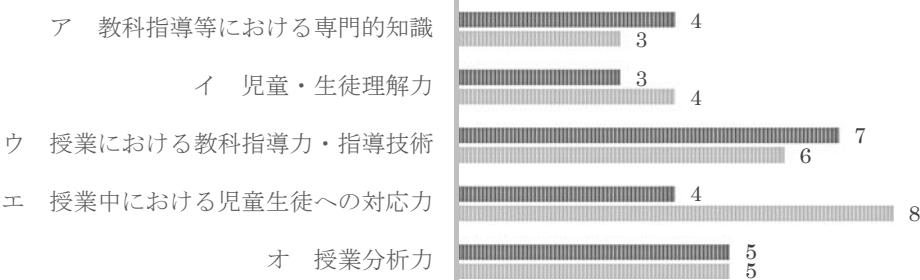


この2-2のグラフによると、初任者の「授業における教科指導力・指導技術」について、学校長・拠点校指導員の全員から「成長したと思われる」との回答を得ることができた。これは4年連続同じ結果となっている。当初任研プログラムでは「実践力向上」を第一の目標に掲げており、特に「授業実践力の向上」については、毎回の初任者授業参観後にカンファレンスを実施するなど、重点的に実施しているため、4年間連続での価値ある結果といえるだろう。

なお、校内指導教員からも9名中6名がこの項目を選んでおり、初任者が最も顕著に成長した点であると捉えられていることがわかる。しかしながら、「イ 児童・生徒理解力」の成長については、拠点校指導員・校内指導員とともに1名ずつしか回答がなかった。この点については、長期間の教師経験によって獲得されると考えられるが、本プログラムによる指導の不足点とも考えられるため、留意すべき項目であるともいえる。

3. 本プログラムにおける授業参観やカンファレンスの実施等により、あなたが成長していると思う点は何ですか？

■初任者 ■2年目



(※2年次教員は、「初任の頃のあなたと比べ成長していると思われる点は何ですか？」との設問)

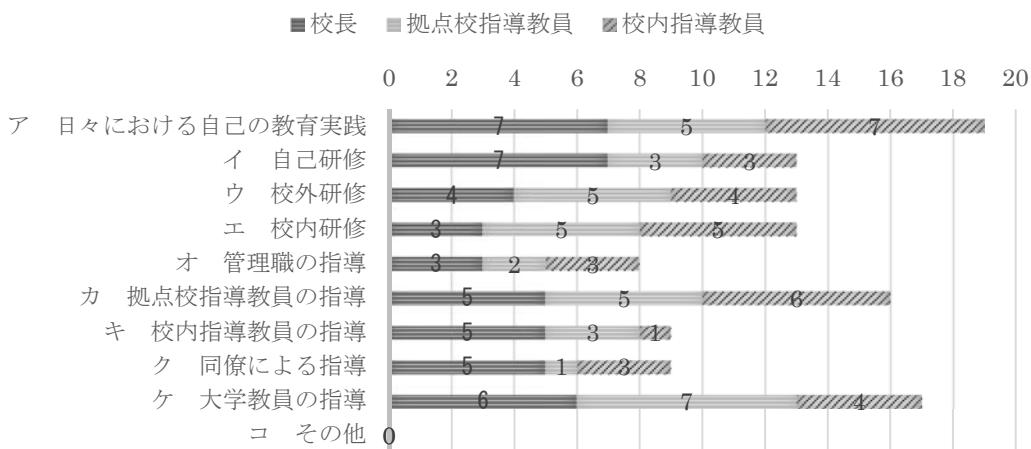
上記3. のグラフは、初任者・2年次教員の結果であるが、やはり「ウ 授業における教科指導力・指導技術」が比較的高い結果となっている。「エ 授業中における児童生徒への対応力」については、2年目で飛躍的な伸びをみせている。

また、例年の傾向ではあるが、2-2のグラフと比較すると、「校長」は初任者の「オ 授業分析力」をあまり成長項目として捉えていない一方で、初任・2年次教員の半数がそれを成長項目として捉えている。つまり、校長の判断では、初任者の授業分析力はまだ身に付いていないとの判断であるが、初任者らの自己評価としては比較的高い結果となっている。

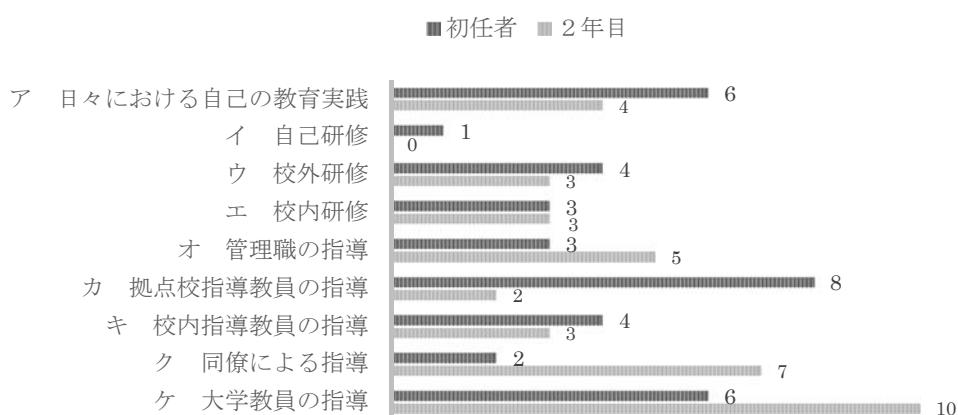
授業分析力の認識に大きな違いがあるのは、初任者は大学での初任研プログラムにおける講義（授業・教材研究Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ等）で、示範授業や模擬授業について実施したり、授業分析のワークを日々実施しているため、これらの経験上、「授業分析力」を獲得しているとの認識を得ているのだと思われる。

なお、2-2および3のグラフの双方で、「児童・生徒理解力」が課題（最小値）になっている点も例年同様である。これは、児童・生徒理解力が向上すればするほどに、子どもたちの深い部分を捉えることができるようになり、さらに理解力・対応力の必要性に迫られるといったことも考えられるため、一概に「向上した」とは回答しづらい項目であることは確かである。基本的な授業実践上の指導技術の向上は捉えやすいが、子ども理解においては、やはり年間を通じてより困難さを増す場合もあり、その力量が向上していたとしても、対応力不足を実感する場面を経験していくこともあるからだと思われる。当プログラムの4年間を通じて、同様の傾向が続いているため、継続的な課題（配慮すべき点）として重視したい。

3. 初任者の成長要因として考えられる点を  
次からすべて選んでください。



4. あなたの成長の理由として考えられる点は  
次のうちどれがあてはまりますか。



上記の3. 4. のグラフは、初任者の成長要因と考えられる項目を、指導的な立場にある三者（学校長、拠点校指導教員、校内指導教員）と、初任者・2年次教員に問うた結果を示したものである。

3. のグラフでは、「ア 日々における自己の教育実践」が成長要因として最も高く、やはり日々の実践の積み重ねが一番の成長要因であると捉えていることがわかる。4. のグラフでは、2年目教員全員が成長要因として「大学教員の指導」と回答いただいたおり、3. の指導者側からみてもこの項目は高い数値となっている。

逆に、4. では「自己研修」との回答が最も低かったが、これは例年の傾向と一致する。

なお、成長要因について、初任者は「拠点校指導教員の指導」が最も多かったが、2年次教員は「同僚による指導」が多くなる。年度によって、関わり方が異なるため、当然の結果ではあるが、初任者の際に拠点校指導教員からの手厚い丁寧な指導の後、2年目からは自ら同僚の教員から学ぼうとしている姿勢がうかがえる結果となった。

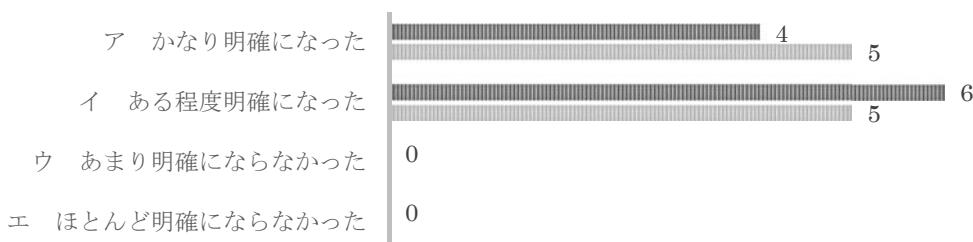
いずれにせよ、初任者教員の成長要因は、初任者自身の回答からも指導的な立場になる方々からの回答からも、多岐に渡っていることがわかる。なお、昨年に引き続き、拠点校指導教員の7名全員が「大学教員からの指導」を初任者の成長要因として回答いただけていることは幸いである。

自由記述からは、初任者の成長要因について、1つの大きな要因を見出すのではなく、初任者を支える校内の体制や、初任者の意欲・熱意によってその体制の中でコミュニケーションをとりながら日々の授業改善につなげる問い合わせができているかどうかなど、やはり複合的な要因が挙げられていた。管理職の方々からは「拠点校指導教員」の丁寧な指導が大きな成長要因であると記述し、拠点校指導教員からは、同僚教員の授業参観や教職大学院教員の影響が大きいとの記述があった。加えて、校内指導教員からは、拠点校指導教員や管理職のリーダーシップなどが初任者の成長に関わっていると言及している。指導者側は、全般的に謙虚な回答が多く、当設問については特定の要因が定まらない。

ある校内指導教員からの「初任の先生に限らず、多くの先生が様々な要因から影響を受けて成長していくため、要因を限定することは難しい」との記述は的を得ており、同様に「すべてが成長要因であるし、それに対して初任の先生自身も前向きに取りくもうとする姿勢が見られる。」との記述からは、初任者の意識次第で、全てが成長要因となり得るということが示唆されたといえる。よって、当設問自体が、特定不可能な要因を問うている可能性もあり、再考の余地があるとも考えられる。

#### 5. 大学からのプログラム教員の指導や授業後のカンファレンス指導により、あなたの教育実践上の課題はどの程度明確になりましたか。

■初任者 ■2年目



次に、初任者教員・2年次教員に「教育実践上の課題はどの程度明確になったか」について問うた回答結果を5. のグラフで示すが、いずれも肯定的な結果となった。月3回のカンファレンスによって、初任者の抱える課題が明確になってきていることは確かであり、2年目の月1回の訪問によても、継続してその効果があがっている。

自由記述からは、週1回というカンファレンスで「何度も指摘される」ことで、自分の課題に明確に気づくとのことがみられ、「改善されているところ」が確認できたり、課題の指摘だけではなく、加えて励ましも得られるなど、カンファレンスでの学びが大きいことがうかがえる。当プログラムに参加した初任者には、講師歴の長い方もいるが、全受講者（2, 3年次教員も含めて）、自らの課題に気づき明確になったという成果は注目に値するといえるだろう。

### 3.3 当プログラムによる学校への影響

#### (1) 抱点校指導教員・校内指導教員への影響

当プログラムが、抱点校指導教員や校内指導教員の学びにつながっているかを確かめるために、学校長・抱点校指導教員そして校内指導教員向けの以下のような問い合わせを設定した。

- ① **学校長向け**：「校内指導教員が指導助言者として授業後のカンファレンス指導に参加することで、どの程度成長したと思われますか」
- ② **抱点校指導教員向け**：授業後のカンファレンス指導等に参加することで、抱点校指導教員として初任者に対する指導にどの程度役立ったと思われますか
- ③ **校内指導教員向け**：本プログラムに参加することで指導教員としてのあなたの学びにどの程度役に立ちましたか。

その結果、①学校長向けのアンケート結果では、校内指導教員が「ア とても成長した（1名）」、「イ ある程度成長した（4名）」、「ウ どちらとも言えない（1名）」となり、概ね良好な結果を得た。

②抱点校指導教員に対しては、「初任者に対する指導」に、「ア とても役に立った（4名）」「イ ある程度役に立った（3名）」と更に良好な結果を得ることができた。

③校内指導教員からは、「ア とても役に立った（1名）」、「イ ある程度役に立った（4名）」、「ウ どちらとも言えない（3名）」となり、概ね肯定的な意見だが、「ウ=どちらとも言えない」の回答が3名あった。校内指導教員については、初任者授業の時に授業と重なっていたり、カンファレンスに参加できない場合も多く、当プログラムとのかかわり方によって回答に差が生じているものと思われる。

当プログラムは、初任者の成長を第一目的としているが、教職大学院教員が関わることで、抱点校指導教員・校内指導教員の初任者への指導の方法について学んでいただく（参考にしていただく）ことも趣旨としている。その点では、指導者側に概ね好影響を与えていたい、「どちらともいえない」の回答が散見されるのは気になる点である。

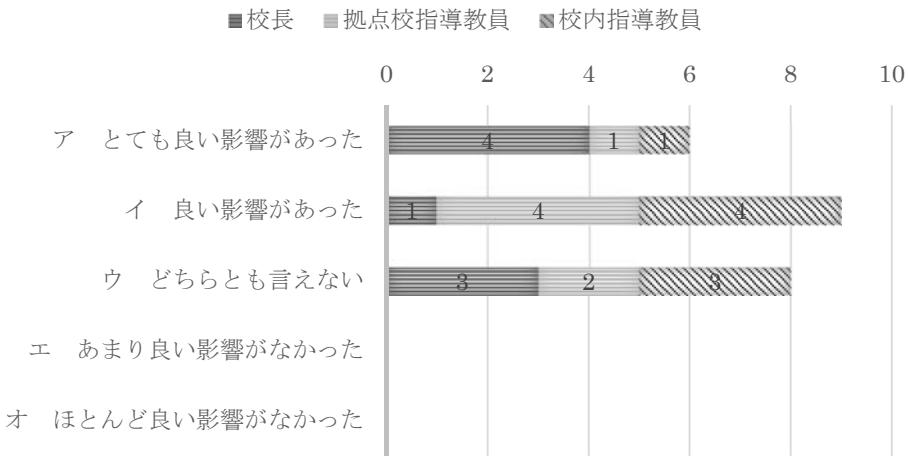
#### (2) 研修への意識の影響

最後に、6. のグラフは「教員の研修に対する意識に良い影響があったか」について問うた結果である。教員研修に概ね良い影響があったとの回答であるが、どちらとも言えないとの回答も多数確認できる。ただ、マイナス回答「エ・オ」がなかったことは幸いである。

当回答については、学校の体制にも左右されることがあり、例えば中学校では初任者の特定教科への指導となり、校内の全体研修にまでは広がらない。一方、小学校では初任者の授業の振り返りの時間（カンファレンス）を、校内での現職教員研修に位置付けて、全教員と共に学ぶ機会とした場合もあった。また、「学校が請け負っている研究授業へのアドバイス要請」などを教職大学院教員が受けた場合は、当項目が高く評価されることとなる。

いずれにせよ、学校の研究ニーズや指導要請に応えることができるかによって回答結果が左右されるため、校内での当事業の意義を広めることや、実施内容を日常的に学校全体に伝えていく工夫が必要であると考えられる。

## 6. 本プログラムが貴校教員の研修に対する意識に良い影響があったと思われますか。



## 4. 本プログラムへの要望等

最後に、本プログラムの充実を図るうえで改善すべき点や要望事項について整理する。これまで述べてきたように、全体として高い評価を得ていることは確かではあるが、それ故に初任者に過度な負担を強いているとのご指摘が本年度も多く寄せられた。

当プログラムは本年度で4年目となるが、開始1・2年目にも同様の過重負担軽減への改善事項が出されていたため、本プログラムの趣旨(履修証明等を含む)を損なわない範囲で、3年目には研修時間・訪問回数等の負担を軽減する措置をとった。このために、「負担が大きくなりすぎないような配慮をこれからも続けていただけると嬉しい」との評価を得ることができたため、4年目には特に大きな変更もなく実施した。しかしながら、学校の働き方改革が叫ばれる状況の中で、当プログラムに参加する初任者の負担感を、校内の他の教員も継続して感じ取っていることは事実である。「土日に出勤して月曜日の学校訪問のための授業準備を強いてしまっている」ことや、「夏季休業中の大学での集中講義」等への批判も強まることとなっている。特に、当プログラムの準備負担(訪問指導に向けた授業、研修レポート等)に追われ、「学級経営が疎かになっている」との指摘は一考に値する。

よって、今一度、当プログラムの成果を捉える一方で、その対象者にかかる負担度についても検証をやり直す必要がある。初任者の抱える負担感が校内で伝播するようになつては、当プログラムの趣旨にも反することになるため、負担軽減についての再度の検討をおこないたい。

次に、「カンファレンスが授業後の講評だけになっている」との指摘があり、「振り返りばかりでなく、事前に指導案を一緒に考えることによって、目標や本時の流れ、発問、切り返しなどを実践しながら学ぶ機会が欲しい」との趣旨の要望がいくつかみられた。時間的な都合や次回(例えば1週間後)の授業内容・計画を特定しづらいといった点はあるが、ここはカンファレンスの持ち方だけで改善できるため、次回の授業につながる指導をおこなうことと共通認識として、教職大学院教員内で周知していきたい。

ほかには、「本プログラムの重要性を（校内に）周知していくことが大切。より深い理解のためにも、学校管理職、教職大学院教員、拠点校指導教員との連携会議の必要性を感じる。」との回答もあった。確かに、当プログラムについて、校内での検証を行う機会がなかったことは確かである。個々にアンケートをおこなうだけではなく、それぞれの立場での意見を出し合う場の設定についても検討をおこなっていきたい。また新たな負担を生み出してはいけないため、この開催についても学校側と協議をおこなう必要があろう。

その他、「授業評価シート」について、チェック項目の多さに迷うケースも多々あるとの意見もあった。確かに、45分（50分）の授業で全項目をチェックするのは困難であること、そしてチェックした結果がどのように以後に活用されていくかが不明確である。授業評価シートの活用についても、単なる授業記録の一環ではなくて、「成長の見える化・指針」につなげられるような配慮が必要であるため、この点も教職大学院内の検討・再考を促したい。

## VI 成果と課題

### 1.はじめに

初任者研修履修証明プログラム（以下、初任研プログラムと称す）を立ち上げて4年。今年度も過去3年間と同様に初任者を対象とした研修はもちろん、2年次教員（昨年度の初任者）を対象とした研修も並行して行ってきた。

初任研プログラムに協力いただいた学校は、この4年間で13校（小学校7校、中学校6校）、対象となった初任者は合計39名（小学校24名、中学校15名）になる。各校に配置された初任者、また2年次を迎える教員の研修を計画・実施することが本プログラムの大きな目的である。さらに、プログラム2年間の研修を終え、3年次や4年次を迎えるプログラム修了教員のその後の成長も見守ってきた。

初任者や2年次教員がどのように成長していくかを見取るためには、教師としての「どのような力」を「どのような方法」で検証するのかが大きな課題である。そこで、初任研プログラムでは、教師として必要な様々な資質や能力のうち、とくに“授業実践力”に焦点をあて、それを向上させるための手立てをプログラム化している。

具体的な取組内容としては、

- ・理論と実践の往還を重視した教職大学院での科目受講
- ・連携校への訪問指導（初任者や2年次教員の参観授業と校内カンファレンス）

今年度の成果についてこの2点について報告する。

### 2.理論と実践の往還を重視した教職大学院での科目受講について

和歌山市や和歌山県で行われている初任者研修がこれにあたる。大学での受講科目は、授業実践力の育成という観点から、初任者には「学校・学級経営Ⅰ」や「課題研究」をはじめ、授業の設定方法、展開方法、分析方法、評価方法、改善方法など「授業・教材研究」科目群の内容に特化しており、大学教員による示範授業や初任者自身の模擬授業、授業分析に係るワークなども多く実施された。さらに2年次教員には「学校・学級経営Ⅱ」や「子どもの権利」などの集中講義を開催し、初任時の研修をさらに広げ、深める内容を盛り込んだ。

クオーターI	クオーターII	クオーターIII	クオーターIV
研修日 4/2(火) 初任研①13:30～18:00 学校・学級経営Ⅰ	研修日 6/13 初任研⑤9:10～18:00 授業・教材研究Ⅰ	研修日 8/29 初任研⑧9:10～18:00 授業・教材研究Ⅱ	研修日 11/28 初任研⑪9:10～18:00 授業・教材研究Ⅲ
4/4	6/20	9/5 初任研⑨9:10～18:00 授業・教材研究Ⅳ	12/5 初任研⑫9:10～18:00 授業・教材研究Ⅳ
4/11	6/27	9/12	12/8(日) 初任者集中講義②(道徳) 9:10～12:20
4/18 初任研②16:30～19:20 学校・学級経営Ⅰ	7/4 初任研⑥9:10～18:00 授業・教材研究Ⅰ	9/19	12/12
4/25	7/11	9/26	12/14(土) 2年次集中講義③(子どもの権利) 9:10～18:00
5/2 国民の休日	7/18	10/3 初任研⑨9:10～18:00 授業・教材研究Ⅱ	12/19
5/9 初任研③9:10～18:00 学校・学級経営Ⅰ	7/25 初任研⑦9:10～18:00 授業・教材研究Ⅰ	10/10	12/21(土) 2年次集中講義④(子どもの権利) 9:10～18:00
5/16		10/17	12/26
5/23	8/7～8 2年次集中講義①(学校・学級経営Ⅱ) 9:10～18:20	10/24	1/11(土) 2年次集中講義⑤(子どもの権利) 9:10～18:00
5/30 初任研④9:10～18:00 学校・学級経営Ⅰ	8/21～23 初任者集中講義①(道徳) 9:10～18:00	10/31 初任研⑩9:10～18:00 授業・教材研究Ⅱ	1/12(日) 初任者集中講義③(道徳) 9:10～18:00
6/6	8/21～22 2年次集中講義②(学校・学級経営Ⅱ) 9:10～18:20	11/7	1/16 初任研⑫9:10～18:00 授業・教材研究Ⅲ
			1/23
			1/30
			2/6 初任研⑬9:10～18:00

大学で行われた初任研（木曜日）と集中講義　日程

## 2. 1. 教職大学院での科目受講について

教職大学院で行われている初任者研修の最大の特徴として次の3点が挙げられる。

- ① 大学院生と共に学ぶ
- ② 全ての講義に授業担当者全員が関わる
- ③ 能動的・体験的な講義内容の充実

とくに①②については教職大学院で初任者研修を行っているからこそできることである。この3点について以下に詳しく述べる。

### 2. 1-① 大学院生と共に学ぶ

今年度、教職大学院の授業実践力向上コースには6名のストレートマスター（以下、ストマスと称す）が、学校改善マネージメントコースには9名の現職教員院生（以下、現職教員と称す）が入学している。

初任者は月1回行われる科目受講（初任研）では6名のストマスと共に学んだ。また、長期休業中等に開かれる集中講義では、初任者とストマス・現職教員が一緒になって学んでいる。とくに現職教員が同席する集中講義は、初任者にとって貴重な学びの場となっている。教職大学院で学ぶ現職教員は、各学校では核となる中堅教員であると同時に、若手を指導する立場の教員である。その現職教員から授業づくりや学級づくりについて具体的なアドバイスをもらえることで初任者の学びは一気に深まるのである。

写真下は外部講師を招いて行った集中講義 道徳教育（小・中）の1シーンである。



現職教員がリーダーシップをとる授業協議

この日は受講者の代表が模擬授業を行い、授業後、各々が作成した授業評価シートをもとに、授業から学んだ点、改善すべき点について話し合った。

代表授業者である6名は、初任者3名、ストマス2名、現職教員1名と授業実践の経験値も異なっているため、扱う読み物資料の価値項目の捉え方、価値に迫らせるための授業構成や発問の組み立て方も様々である。

各模擬授業後に行ったカンファレンスでは、各グループにいる現職教員（1グループ1～2名）がリーダーシップを取り話し合いを進める。初任者やストマスは、具体的な授業を体験しての話し合いになるので、それまでの講義で学んできた理論を実際の授業の場を通して確かめられるのである。

一方、ストマスは大学での講義と並行して、毎週月曜日、インターシップ実習として初任者の所属校で教育実習を行っている。

月曜日は初任者への訪問指導日（後出 3. 連携校への訪問指導）でもあるため、大学教員と共に初任者の授業を参観し、放課後のカンファレンスにも参加する。当初は発言に戸惑うストマスが多いが、初任者との人間関係ができてくると、大学で学んだ視点で授業を参観し、

授業展開・発問・板書等、具体的な授業場面を取り上げ、授業者である初任者に質問をしたり、疑問を投げかけたりしながら授業づくりについて学ぶことができるようになる。

一方初任者にとっても、同じように大学で“授業実践力”について学んでいるストマスと共に自身の授業を振り返ることは大変有意義であると言える。



ストレートマスターが参加した月曜日の訪問指導

## 2. 1-② 全ての講義に授業担当者全員が関わる

教職大学院で行う初任研プログラムの講義は、基本教職大学院の教員が講師を務めるが、講義内容によっては、より専門性の高い大学教員に協力を要請し講義を行っている。

第1クオーターの「学校・学級経営Ⅰ」では、教育学の教授による講義を盛り込み、“こころの地図”や“学級地図”と題した子どもとの関係性やの子ども一人一人がもつ特性について学んだ。また、第2クオーターの「授業・教材研究Ⅰ」では、教職大学院の実務家教員（元校長等）が学校現場での実践経験を生かして、それぞれの専門分野での示範授業を行い、授業づくりや学級づくりのポイントを実際の授業を通して初任者に参観させた。

しかし、これらの指導を単発的に行うだけでは、各講義間のつながりを欠いたり、講義内容の重複を招いたりすることも考えられる。本学で行っている講義は、こうした懸念を払拭しつつ、専門性の高い講義が実現できるように、主に本プログラムを担当する7名の担当教員が必ず一緒に講義に関わり、必要に応じてコメントを加えたり、自身が担当する講義の中で、関連づけて再度位置づけたり、整理させたりして、一貫性のある指導ができるようにしている。また、それらの講義を担当している教員が初任者の配属されている学校を訪問して参観およびカンファレンスを行うことで、講義での学びと実際の授業とを結びつけて考えられるようにしている。



担当教員全員が参観する初任研プログラムの講義

○印が担当教員

## 2. 1-③ 能動的・体験的な講義内容の充実

本学の初任研プログラムでは、体験的な学びを特に重視しており、その特徴的なものとして次の2点が挙げられる。

- ア) 教職大学院スタッフによる示範授業
- イ) 初任者による模擬授業

## 2.1-③-ア 職大学院スタッフによる示範授業について

初任研プログラムの講義では、今年度、以下のような大学教員による示範授業を行った。

- ・ 6月13日 小学校4年生・算数科「折れ線グラフ」
- ・ 7月 4日 小学校6年生・社会科「源氏と平氏の戦いと鎌倉幕府 元との戦い」
- ・ 10月 3日 小学校3年生・国語科「まとまりとらえて読み、かんそうを話そう」

いずれの日も初任者及び一緒に講義を受けているストマスが児童・生徒役になり、授業に参加する。講義日により多少の違いがあるが、おおよそ次のような流れで講義が行われる。

- ① 受講の視点・協議の持ち方についての説明(5分)
- ② 示範授業(45分;中学校の授業の場合は50分)
- ③ 学んだことを付箋に記入【教材研究・教材の与え方・単元の捉え方・子どもの活かし方・思考を促がす指導や発問等】(5分)
- ④ グループで学んだことの共有(10分)
- ⑤ グループ別発表(3分×グループ数)
- ⑥ 授業者よりのショート講義(15分)
- ⑦ ふり返り(5分)

以下に、それぞれの示範授業を受けた後の初任者の振り返りを一部紹介する。これらの振り返りからは、授業づくりの基礎となる子どもへの声かけ、初任者が自身の日々の実践を振り返り、省察していることがわかる。

★示範授業を受け、私は感銘を受けました。私は子どもの頃（現在も根本的な部分はそうですが）、とても引っ込み思案で積極的に挙手や発言をする人間ではありませんでした。そのため、グループワークやクラスでの活動、交流を深めるようなアクティビティは非常に苦痛でした。そんな背景がある私ですが、示範授業の際に、自分が考えた意見に対して、机間指導の際に『そうか！そんな意見もあるな！』と言葉を添えて、ワークシートに○を付けてくれたことが、とても嬉しく、自分の考えに対して、とても自信を持つことができ、発言したい！という気持ちが湧き出きました。その後の挙手の機会では、『当ててほしい！』という気持ちがいっぱいでき、無意識に手をまっすぐ上にあげることができました。示範授業を通して、『○付け法』を体験し、自分を認めてもらうことの嬉しさや、安心感を直接肌で感じることができ、私にとって教師人生の大きなポイントになったと確信しています。このことを踏まえ、私は翌日から、授業で『○付け法』を実践しています。英語授業の小テストの直しの際に、机間指導をしながら、29人の生徒に『頑張ってるな！』『あと5分、ラストスパート！』などと声をかけながら、ワークシートの片隅に○をつけました。声のかけ方や、学習への促し方、○の付け方は適切なものだったことはわかりませんが、私自身とても気持ちよく授業を終えることができました。初任研で決意をし、実行に移せたという、自己満足だったのかもしれません、子どもを褒めて伸ばすということは、同時に教師も人間として成長できるのではないかという可能性を感じます。

じます。（6月13日算数科示範授業での感想；中学校 初任者）

★今回の示範授業では、自分が成長するためには、自分の意志・行動が何よりも大切であるということが一番心に残りました。板書計画の作成では、工夫する前と後の差が一目瞭然でした。私は日頃から1時間にどんなことを行ったのかが分かる板書を目指していますが、実際には、まとめが入りきらなかったり、図が大きすぎて説明が書けなかったりとなかなか上手にいきません。今の状態に満足するのではなく、文字の大きさや黒板の使い方に注意して板書について考えていくたいです。今回の示範授業では、初めから終わりまで授業に引き付けられっぱなしでした。ほめ方・板書・ICT[活用と様々な面で「私もこんな授業ができる先生になりたい！」と思いました。教科書に載っている絵や図だけで終わらず、授業中に様々な資料・道具を用いて考えを深めることができ、新しい発見をすることができました。（7月4日社会科示範授業での感想；小学校 初任者）



7月4日社会科示範授業での板書

★「久しぶりに掲示物やチャートをつくって、楽しかったです。」今回の示範授業で先生がお話されるのを聞いて、授業づくりは楽しいものなのだということにハッと気づかされました。朝の会の「先生の話」は、必要事項の伝達をするだけしかできていません。先生の魅力的なお話がある方が子どもは先生のことをきっと好きになるし、教科の学習につながることをすれば子どもの学びにもなるし、とっても素敵な取組で、それを丁寧にされる先生は、心から授業を楽しんでいることが分かって勉強になりました。豊かな学級は、朝の会を大切にして、色々な取組をしていると聞いたことがあります。先生が担任した学級もきっとそんな風だったのだろうと思いました。まだ、一年間の流れや学級運営の方法が分かっていないので、どこまで何をしてよいのか（自分ができるのか）分からないです。正直、経験しないとできないことばかりで、新卒であることをコンプレックスに思ってばかりでした。でも、示範授業を受け、みんなでワークする中で、より良い経験を重ねるとできることもより良くなっていくのかなと思い、日々向上心を持たなければいけないと反省しました。（10月3日国語科示範授業での感想；小学校 初任者）

## 2. 1-③-イ 初任者による模擬授業

大学教員の示範授業とは別に、10名の初任者には、次のようにそれぞれ教職大学院授業内での模擬授業、和歌山市内の初任者研修参観授業に組み込んだ公開授業、成果報告会での発表のいずれかひとつを選択して担当することとし、今年度は以下の模擬授業および公開授業を行った。

**【模擬授業】**

7月 25日 小・道徳 A 小学校 H 教諭  
9月 5日 小・算数 B 小学校 I 教諭  
10月 3日 小・社会 B 小学校 J 教諭  
10月 31日 中・家庭 C 中学校 K 教諭  
12月 5日 小・外国語 D 小学校 L 教諭  
2月 6日 小・理科 D 小学校 M 教諭

**【公開授業】**

9月 19日 中・国語 E 中学校 N 教諭  
10月 10日 小・道徳 A 小学校 O 教諭  
【成果報告会での発表】  
3月 7日 F 小学校 P 教諭  
G 中学校 Q 教諭

ここでは、上記のうち、12月5日おこなったF教諭の小学校外国語活動の模擬授業を通しての初任者の学びについて報告することにする。

F教諭が行ったのは小学校4年生の单元“What do you want? (ほしいものは何かな?)”で、本時は欲しい食材（果物）を尋ねたり要求したりする表現に慣れ親しむことをねらいとした学習活動であった。

模擬授業を受けた初任者は、授業者が取り組んでいる授業づくりの工夫や子どもたちへの対応の仕方の素晴らしさを挙げると共に、自分自身の授業にその良さを取り込もうとする意欲を見せている。



初任者による外国語活動の模擬授業

★自分の学級でも実践してみたいことがありました。自分の学級では、チャンツやちょっとしたゲームはしているが、クラスルームイングリッシュは使えていません。外国語で実際にやり取りする時間が多くとることもできていません。今回の模擬授業での外国語を使った活動やクラスルームイングリッシュも意識して外国語活動に取り組んでいきたいと感じました。（小学校 初任者）

★外国語活動での発問の工夫や英語を活用した活動の工夫がとても参考になりました。楽しく英語を発話し、コミュニケーションをとることのできる授業になっていました。次の学年でぜひ参考にしたいと思います。（小学校 初任者）

★外国語の授業は、楽しい雰囲気でなければ会話練習も意欲的に取り組むことが難しいと思うので、先生のように楽しい雰囲気の授業づくりを目指したいです。授業後の検討会や助言を聞いて、チャンツや発話練習の機会をたくさん設けることの大切さを学びました。子どもたちが分かりやすく、楽しい発話練習に取り組めるように、動物や掲示物の用意に力を入れたいです。（小学校 初任者）

★学校でも同じ授業をみせてもらっていましたが、そこから修正されていて、子どもたちにとってよりよい授業に作り替えようとする教師の気持ちが大切で不可欠であると感じました。子どもたちにとって「英語を話すことが楽しい」「英語を使って伝わることがうれし

い」という体験をたくさんさせることができが最も大切なかなと思いました。そのためにも、授業の中で外国語に触れる機会を保障することが大切であると思いました。（授業者と同じ小学校 初任者）

★先生自身が誰よりも明るく、楽しそうに、そして元気に授業を進める姿がとても印象的でした。授業を受けて、子どもたちが学校生活を楽しいと思えるために、自分は子どもの前で笑顔でいるか、授業を楽しむための工夫を凝らしているか、改めて考えさせられました。助言にもあった、外国語活動の授業に必要な教師のK B G (Keep smiling : 笑顔でいること, Big voice : 大きな声で発話させること, Good job : 子どもたちをほめること)は、外国語活動だけではなく、授業に於いて常に意識すべきことだと感じました。（小学校 初任者）

### 3. 連携校への訪問指導（初任者や2年次教員の参観授業と校内カンファレンス）について

今年度は、小学校4校、中学校3校の計7校に配置された初任者の学校へは月3回のペースで月曜日に訪問指導を行った。また、2年次教員（昨年度の初任者）いる小学校2校、中学校4校の計6校には月1回程度の訪問指導を行った。（下表参照）

2019 一学期		2019 二学期		2019 三学期	
訪問日		訪問日		訪問日	
4/1		8/26	小・中 始業式	1/6	始業式
4/8	始業式	9/2	初任者訪問⑨	1/13	成人の日
4/15	初任者訪問①	9/9	初任者訪問⑩	1/20	初任者訪問⑯
4/22	初任者訪問②	9/16	敬老の日	1/27	2年次教員訪問日⑧
4/29	昭和の日	9/23	秋分の日	2/3	初任者訪問⑯
5/6	振替休日	9/30	2年次教員訪問④	2/10	建国記念の日
5/13	初任者訪問③	10/7	初任者訪問⑪		
5/20	初任者訪問④	10/14	体育の日		
5/27	2年次教員訪問①	10/21	初任者訪問⑫		
6/3	初任者訪問⑤	10/28	2年次教員訪問⑤		
6/10	初任者訪問⑥	11/4	文化の日振替		
6/17	初任者訪問⑦	11/11	初任者訪問⑬		
6/24	2年次教員訪問②	11/18	初任者訪問⑭		
7/1	初任者訪問⑧	11/25	2年次教員訪問⑥		
7/8	2年次教員訪問③	12/2	初任者訪問⑮		
7/15	海の日	12/9	2年次教員訪問⑦		
		12/16	初任者訪問⑯		
訪問回数合計	初任者8回, 2年次3回	訪問回数合計	初任者8回, 2年次4回	訪問回数合計	初任者2回, 2年次1回

毎週月曜日は連携校訪問指導；年間学校訪問スケジュール

訪問時には、初任者（2年次教員）の授業を1校時参観し、放課後、そのカンファレンスを行うことを基本としているが、校長からの要請があれば、若手教員や講師の先生の授業を参観、放課後のカンファレンスでその授業についての助言を行うこともあった。

#### 3.1 拠点校指導教員との連携

本プログラムも今年度で4年目であり、初任者（2年次教員）が行う授業を参観する観点、授業後のカンファレンスの進め方、また、カンファレンス内の初任者への指導・支援の仕方等については、過去3年間の実績、反省をもとにプログラム化されている。

とくにカンファレンスでは、初任者（2年次教員）が自らの授業を客観的・分析的に振り

返ることができるよう、自身の授業ビデオを視聴したり、授業評価シートを活用したりしながら、

・教師の身体的技術　・子どもへの対応　・学習環境　・教材研究、授業展開　・授業技術の5観点から、初任者（2年次教員）に自らの授業を振り返らせた。

また、それまでの授業と比べ改善してきた点を挙げ、初任者（2年次教員）の頑張りや成長を認めると同時に、当面の課題を明確にし、その解決と授業改善への具体的な方策を拠点校指導教員のアドバイスをもとに初任者（2年次教員）に考えさせた。

とくに各校で直接初任者指導を行っている拠点校指導教員の先生との連携は何よりも大切であり、今年度も訪問時にはカンファレンス前に十分な話し合いの時間を設けた上で、初任者（2年次教員）への指導・支援を行ってきた。

### 3.2 連携校の拡大と初任者の学びの広がり

今年度、本初任研プログラムに新たに3校が連携校として加わった。毎年、連携校が増えることは、プログラムの広がりという点で大変ありがたい話である。また新規3校の校長先生方は、本プログラムの意義をご理解いただいた上で十分なご協力を頂けたことには感謝申し上げたい。

また、訪問指導における初任者（2年次教員）の学びが他の若い先生たちに広がり、学校全体で授業づくりについて学び合おうとする学校もある。

右写真はB小学校におけるカンファレンスの様子である。初任者・2年次教員の他たくさんの中学校教員がカンファレンス参加し、初任者の授業を通して、学級づくりや授業づくりについて共に学び合っている。



B小学校のカンファレンス

すなわち、指導される初任者を見ることで、若手教員は

自らの授業実践も振り返る機会になっているのである。もちろん初任者にとって2年次教員を含めた若手教員は、身近な教員の先輩として自身の学級づくりや授業づくりの良きサンプルになる存在でもあり、困ったときや悩んだときの相談相手でもある。一方、若手教員にとって初任者は、自らの実践を振り返るための基準となっているのである。

このような意味で、本プログラムを若手教員の学び合いの場として活用いただいているB小学校は、本プログラムを基盤にした学校づくりの良きサンプルになるのではないだろうか。

### 4 今後の課題

冒頭でも述べたが、和歌山市教育委員会と連携し取組を続けてきた初任研プログラムは4年が経過した。プログラム初年度に受講した教員は、すでにそれぞれの学校の核となり、中性的に学校運営に携わっていると聞く。つまり、本プログラムは初任者にとって間違いなく

有意義な研修であり、連携協力校にとっても初任者を含めた自校の教員の授業実践力を向上させるために役立つ研修であったと考える。

和歌山市教育委員会からは次年度以降も本プログラムの継続を要望されているが、以下のような課題が考えられる。

### **① 和歌山市教育委員会との協同・連携による初任者研修の開催**

本プログラムで和歌山市よりお預かりしている初任者は毎年最大で10名である。しかし、本市で新規採用される教員はここ数年この5倍以上になっている。つまり、50名余りの初任者は和歌山市教育委員会が開催する通常の初任者研修を受講している。もちろん、和歌山市でも市立教育研究所が中心となり、工夫された初任者研修を企画・開催されていると聞く。

しかし、できるならば和歌山市で採用された先生方が同じ初任者研修を受講し、互いの学校の情報交換を行いながら共に学び合えたらと考えている。そのためにも、和歌山市教育委員会と連携しながら、協同した研修会を催したり、教職大学院の初任研担当教員が和歌山市で行われる初任者研修で講義をしたりと、互いの研修の連携・連動を今後図っていく必要があると考える。

### **② 新たな連携協力校との関係性の構築**

本プログラムには4年間で和歌山市内の13小中学校に連携協力をいただき、良好な関係を築きながら初任者研修を進めてくることができた。とくに訪問指導では、各学校とも初任者の時間割の配慮、カンファレンスルームの設置等、全面的にバックアップいただいた。しかし、少子化による学校規模の縮小に伴い、和歌山市内の小中学校全体でみれば各学校の学級数は減少傾向にあり、一つの学校に毎年初任者が入り続けることは職員構成上難しい。したがって、今後も新たな連携協力校と密接な関係を築きながら本プログラムを進めていく必要がある。

### **③ 教科の専門性への対応力の強化**

本年度の本プログラム受講初任者の中には、中学校の技術科及び家庭科の教員が在籍していた。また、昨年度は音楽科が専門の初任者が在籍していた。このように、初任者の専門性によっては、教職大学院の専任教員だけでは指導・支援が難しい場合があり、専門性を備えた教育学部の教員のサポートや外部講師の確保を今後も考えていきたい。

## **おわりに**

本プログラムも4年目が終了し、プログラムの成果が明確になった。具体的には、プログラムを体験した初任者の成長であり、連携校との連携強化であり、2年目の教員はもとより本プログラム修了教員のさらなる成長でもある。

本プログラム修了教員や彼らと一緒に学んできた教職大学院の卒業生が、各学校現場において高い評価をいただいているという話を聞くにつれ、「学び続ける教師」を体现し続けている彼らのことを嬉しく思う。

今後は和歌山市教育委員会との協同・連携をさらに深め、本プログラムの成果を和歌山市の初任者全体にも広めていきたいと考えている。

## (C) 有識者との意見交換会



## 有識者との意見交換会

### 1. はじめに

本学が本年度行った研修プログラムは、前項で紹介したように「現職教員研修プログラム」及び「初任者研修履修証明プログラム」という形で一定の評価を得ることができた。

また一方で、和歌山県教育委員会や和歌山市教育委員会との間では、現職教員研修を育成指標に応じて見直しをするための研修会や検討委員会を開催、今後の協同・連携に向けて話し合いを始めることができた。そこで、これまでの取組についての評価と今後の展望の指針を得るために、以下の日程・内容で有識者による意見交換会を開催した。

今回來学いただいたみなさんは、過去、教育委員会に在籍されたり、学校長として学校運営に携われたりし、それぞれの立場で教員研修や校内研修に手腕を発揮された方々である。

2. 日 時 令和2年2月4日（火） 14時00分～15時30分

3. 場 所 和歌山大学 教育学部 東4号館

### 4. 協議内容

- (1) これまでの和歌山大学における現職教員研修の取り組みの概要について
- (2) 和歌山大学教員研修プログラム開発における成果と課題について
- (3) 今後、求められる現職教員研修のあり方と、和歌山大学の役割について

### 5. 出席者

#### ○有識者

- ・大阪体育大学教育学部教育学科 教授 岸田正幸氏
- ・和歌山県スポーツ振興財団常務理事 田村光穂氏
- ・宝塚医療大学和歌山保健医療学部リハビリテーション学科設置準備室 花本 明氏
- ・大桑教育文化振興財団 細田能成氏

#### ○和歌山大学

- ・クロスカル教育機構副機構長（副学長） 添田久美子
- ・教育・地域支援部門長（教育学部評議員） 寺川剛央
- ・教育・地域支援部門 特任教授 貴志年秀
- ・教育・地域支援部門 客員教授 中家 英
- ・教育・地域支援部門 客員教授 南 知孝

### 6. 有識者からの助言内容

### A 氏

和歌山大学で研修を受けている初任者は毎年10名程度。それが今後は多くの初任者を預かり初任者研修を行うことも視野に入れることになる。大学として、また教育学部としてこの初任者指導に関わっていくのでしょうか。

初任者研修の資料では、教職大学院の一部の先生に多くの時間や負担がかかっているような気がします。この状態で乗り越えられますか。今後、学部の先生方で危機感をもち協力する教員は多くいるのでしょうか。

### 添田

(既設の大学院はすべて) 教職大学院に一本化したので、教職大学院に関わらないと大学教員としてはやっていけない。学部全員の先生方が関わるのは難しいかも知れないが、現場経験のある先生を含め、これまでよりは多くの方が(初任研に) 関わることになる。

### B 氏

大学の現状、教職大学院の取組を理解し、こちらを向いてくれる教員を増やしていく必要があるのではないか。3割の教員が関わっている取組だと「3割しかやっていない」となり大学全体の取組にはならない。

### 寺川

現状ではその3割の教員の関わりもなかなか厳しい。次年度、教育学部から教職大学院の移籍が10名程度ある。移籍してくれる先生方は十分に理解してくれている。ただ学部教員が70名程度いるが、大学の置かれている立場を知り、危機感をもってもらうことが先決である。

### B 氏

これまでの大学の取組としては、①初任者研修のモデル化事業(2013・2014年度)があり、それを受け、②4年間の初任者研修履修証明プログラム(2016~2019年度)があった。

それぞれの取組をどう評価をどうするのか。また、これらの取組を下敷きにして、③大学や教育委員会が連携し今後どう動いていくかを考えていくことが大切である。

②の取組の説明はよくわかった。③の今後どのような形で進めていくかということも大切だが、一番感じたことは、それに関わるすべての人が全体像を理解した上でそれぞれの動きをすると言う関係をつくることが最も大切であろうと思う。(大学教員や教育委員会の指導主事ばかりではなく) 全員がその役割をわかって行動することが大切である。

例えば拠点校指導教員なら、新しい初任者研修の中で自分がどういう役割なのかを考え



意見交換会の様子

られる取組でなければならないと思う。例えれば、初任者研修というジグソーパズルを仕上げるときに、そのパツとなる各ピースの人たち（大学教員・校長・拠点校指導教員・校内指導教員等）に、初任者研修の全体像が見えているかが大切なである。

学校で行う教育活動は、一つ一つがピースである。それぞれのピースがなければ学校運営は成り立たない。しかし、それぞれのピースが目指す全体像を見えていないことが多い。その全体像を見るような形にするのがカリキュラムマネジメントである。

それから、これからのことでの思ったのは、和歌山大学はこれまで、初任者研修である程度実績を上げて来たので、「初任者研修と言えば和歌山大学」と言うものにどう創り上げていくかを、これから先も外さずにやっていった方が良いんじゃないかと思う。

国の方も含め（外部の人は）これまでの取組には一定の理解はしてくれていると思う。

本来的にはこの初任者研修の議論は育成協議会で論じられるのだろうが、育成協議会には県教育委員会も和歌山市教育委員会も関わっている。協議会は大学側も教育委員会側もこれから教育をどう考えていくかという意見を出し合う場である。その場で今日のような議論が本当は出来たらいいのではないかと思う。

### 添田

B先生のご指摘については、昨年度から学びの丘（県教委）と勉強会をし、研修の持ち方の話もしている。

しかし、根本的な初任研の改革というような話にはなかなか進まないのが現状である。

教育長にも初任研の話、出前講座の話はしている。今年度の事業のタイトル（「教員育成指標に連動した体系的現職教員研修プログラム開発」）にあらよう、県作成の育成指標に準じた職員研修を考え、学びの丘にも紹介しているところである。

### B氏

やはり育成協議会で議論して・・・本筋から攻めていくのが大事だと思う。

### 添田

管理職を対象とした研修などは、すでに教職大学院で行っている。そういう研修をぜひ使っていただければ嬉しいし、ご紹介はしているのだがなかなか進まないのが現状である。



お招きした4名の有識者のみなさま

### B氏

それはやはり説明し続けていく。

**C氏**

私も育成指標作成に関わってきた。育成指標があるということは研修もこれに合わせて行っているということである。和歌山大学が育成指標作成にリンクさせた研修内容をつくってくれているのだから、県としてもありがたいと思ってくれるはずである。

**添田**

もちろんすべての研修を大学でできると思っているのではない。

大学が協力した方が効果のあがる研修もある。さらに例えばその先生の学びたいと思うことを深めていけば単位になったり、履修証明がでたりして、その先生の学びが明示化できることにもなる。

アメリカなどでは、(各先生方が)何をどれだけ学んだことが分かりやすくファイリングできるようにしてある。その中には大学で学んだもの、教育委員会の研修で学んだもの、民間で学んだものも、全部このような指標のようなもののどこに当たるかが書かれているので、この先生が何を学んだかと言うことが分かるようになっている。

今、私たちがどんなものをつくろうとしているかというと、各先生方が自分の不足している力(授業実践力・生徒指導力・マネジメント力等)を補うために受講すべき講座(研修)がすぐに見つけられる研修表である。

イメージ的には、探したい相手先がすぐに見つかる昔の電話帳のようなもの、あるいは目録のようなもので、例えば大学の単位になるものは丸がついているとか、パッケージが書いてあればそれをいくつかとれば履修証明プログラムが出るとかいうものをつくりたいと考えている。そういうものがつくれれば、大学の今考えている研修もお役に立てるのではないかと思う。

**C氏**

“カリキュラムマップ”“研修マップ”ですね。ポートフォリオみたい積み上げていってファイリングしてどれだけできたかふり返るわけですね。

**D氏**

学びの丘は研修機関。自分たちで研修を計画しやっていかなければならない。

大学も大学で地域に根差した教育活動を行わなければならない。

コンソーシアム・地域連携・協同など言葉は踊るが、結局独立したそれぞれの機関が自分たちのやるべき仕事の枠を破れずにいるのが現状だと思う。

それぞれの機関が(単独で)やれることは高々知れている。例えば30人居ても、現在の教育課題と多様な科目と発達段階に応じた指導を自分たちだけでマネジメントできるわけがない。だからこそ「どこかと繋がってやっていくことが必要だ」という切実感があるかどうかだ。

大学も同じではないか。大学だけではやれない。大学だけで求められていることをクリアすることはできない。そのことに気づくことが大事ではないか。

だからどうすればいいかと言えば、「餅は餅屋」で独立独歩(それぞれの機関が自分の)

得意なことをする。そして「一緒にやりましょう」ということが大切ではないだろうか。

大学がこれまでやって来た方向は間違いではない。だからこそ続けていくことが大切ではないか。それは必ず和歌山にとってプラスになる。それぞれの機関が（お互いに）にらめっこしていると一番不幸なのは教員である。

そんな中で突破口になるのは和歌山市との関係ではないか。

もともと（教員）採用は和歌山県。しかし初任者研修は和歌山市だけは基本別枠。

県も（初任者）研修は和歌山市に任せている。それに対して和歌山市は研修スタッフが限られている。大学が研修の手伝いをやって、和歌山市と一緒にやっていくのはどうか。俗に言う「合弁会社」みたいなものができたらいいと思う。例えば、イメージの一つとして、附属学校などを使って、そのスペースの中に新たに研修事業体のようなものをつくってみてはどうだろう。

それに対して、企業的に言えば、大学も市教委も出資をし、費用を負担し合いながらその事業体が研修を引き受けていくというイメージ。そこでは同じテーブルについて、市の指導主事の方と大学の教授の方が同じラウンドテーブルについて協議をすることができればいいと思う。そういう場所をそれぞれの場所じゃないところにつくればいいのではないだろうか。

そして最終は、その研修事業体が他の市町村の研修も引き受け、多くの費用を捻出してもらえるようになればいいのではないかと思う。

県との関係は、（現状を）変えていくのはなかなか時間がかかるのではないか。なぜなら、学びの丘は独立した研修機関であり、大学との連携・協同ということはハードルが高いと思うからである。

#### B氏

県との関係を変えていくのは、学長と教育長の話し合いによるしかない。

#### D氏

大学の先生にしても、今まで教育学部一本でやって来た先生方が「さあこれから県との連携・協同してみんなでやって来ましょう」と言っても動き出すのはなかなか難しいのではないか。それを変える・変わらせるのを待っていて本当に動けるのか？

添田先生や歴代の学部長の先生方がこれまでずいぶん連携についての取組は行ってきている。

だから大学はずいぶん変わってきている。けれどもそれはそれだけの長い時間を持って変わって来たもの。環境が変わるのを待つのではなく、環境を変えるためにやり出した方がいいのではないか。

そう考えるとやっぱり和歌山市との連携・・・。

和歌山市の初任者の採用は県の採用の1/3。多くの初任者を預かる大所帯の和歌山市は大変だらうと思う。

もちろん連携のやり方は相談をしていかねばならない。例えば附属学校などを使って先

導的授業や研修をやっていければいいのではないか。

それぐらい挑戦していかないと、他の教育委員会もついてこないのじゃないだろうか。効果的な事実をみれば他の教育委員会も動き出すはずである。

#### A 氏

最初に言わしてもらったのは、この取組について、教育学部のすべての先生たちが動き出すなんてことはあり得ないと思ったからだ。（大学の現状に）危機感を感じているのは、ここにいらっしゃる添田、寺川先生であり、教職大学院でこの事業に関わっている先生方である。関わる度合いの大きい先生程危機感を感じている。何をすればいいかと言う課題も見据えながら、これからどんな取り組みをしていけばいいのか考えているはずである。

「学部の先生がどれぐらい関わり、理解されているのですか？」と尋ねた時に、寺川先生が指おりで数えられる姿を見て、それだけ関わってくれるとしたら、関わった分だけ理解されると思うし、危機感も感じてもらえると思う。

第一、添田先生が高度化モデル事業からの引継ぎをされて今に至っている。

これは和歌山県の教育の希望である。

こういうことをされていないと、いつまでたっても「和歌山市は和歌山市、和歌山県は和歌山県の初任者研修」とそのままの状態だと思う。

実際に自分たちが教育に関わっていく根本は情熱である。

添田先生が、他府県から来られて、これだけ和歌山大学のことを考えられて、最初はおそらく危機感もあったと思うが、「初任者研修がいかにあるべきか」ということ考え、その研修の在り方を考え続けている。これは情熱以外の何でもない。

貴志先生も同じである。校長として勤めた学校では、初任者2名ずつ受け入れた。

その時の校内カンファが充実したものになったのは、初任者研修どうこうよりも、「この初任者を何とか一人前に仕上げたい。」「教員同士が学び合う土壤を作り上げたい。」等の思いを持ち、そのために教育課程はどう編成するかと考え、見事に仕掛けをして学校を変えた。これも情熱に他ならない。

規模は違うが、その大型版がこれからやろうとしている。そこに乗り越えなければならぬハードルは、一つの学校の比ではないわけだが、教育者として火がともっているかどうか、その火をともそうとしているのが和歌山大学での取り組みであると思う。

待っていてもだめなので、やっぱり仕掛けていくしかない。これが実現するととっても面白いと思う。

ご苦労を何年もそばで見させていただいて、今日のお話を聞かせて頂いて、課題は何か、それにどう手を打つべきか等、全部背負いこんで大学でこれだけされているわけで、うまくいけばいいなと思っています。

#### C 氏

拠点校指導教員まで指導していただき高めていただくような、ここ（出前講座）に書かれ

ている研修は素晴らしいと思います。

学びの丘では年間1回程度（拠点校指導教員）を寄せて研修を行うことはありますが、事務連絡が中心になる。

そういう意味からすれば、今回の提案には、2段階、3段階、4段階のいろいろな仕掛けがあり、初任者研修もパワーアップできるような絵が描かれていると思います。

和歌山市が（大学と連携する研修に）ちょうど当てはまりやすいので、和歌山市との連携を今後考えていくべきだ。もちろん県との連携・協力関係は、交流等を含め継続しておかねばならない。

研修は、受けている初任者の目がキラキラ輝く内容であってほしい。そういうプログラムを私も過去に開発しようと努力してきた。そういう仕掛けを今後やってほしい。

指導主事と大学の先生方どれだけ繋がっているかということも大切。繋がっていれば、その指導主事たちが「研修に来てくれ」と講師に呼んでくれる。その繋がりを大切にしてほしい。

#### B氏

育成協議会の話をしたのは、今、国が大切に考えているところだからだ。

今、国が力を入れているのは ①育成指標 ②育成協議会 ③教職大学院 などである。

本来、今日の議題は育成協議会で議論してよいものである。これ（今日の議題）をもっと提示してみたらどうだろうか。話し合いが進むかどうかは別として、育成協議会で（今、大学では）こういう動きをつくろうとしているのだと議論することは、国に対しては大きなインパクトをもってくると思う。

あと、指標と教職大学院。教職大学院をどうつくるかも大切である。

先ほどの出前講座は面白かった。これは今（似たようなものを）大阪市と大教大がやっている。大阪市は大教大で管理職育成の新規講座をつくっている。それによく似た形である。国の動きを踏まえた上の具体的なものをどうつくっていくかということが大事になってくる。

現実的には、大学との連携先は和歌山市が一番いい。

和歌山市と協同して5年間ぐらいをどう育てていくかというような視点をきちんと持つておくこと。初任者研修だけと言わないで、和歌山市の5年間の育ちが和歌山市の教育を変えていく。「5年間の教員の育ちを協同でつくっていく」というぐらいのスタンスで、和歌山市と協議をして行かねばならない。

和歌山市と協議をするときに大切にしてほしいのが、添田先生の説明の中で出てきた“蓄積性”と“深化性”。

高度化モデル事業をやり始めたときに、この“蓄積性”と“深化性”を、初任者の「学び続ける気質」のコンセプトにした。このコンセプトでみんなが共通してやっていこうとした。あの時、「学び続ける資質」をどうつくっていくかは、すなわち“蓄積性”と“深化性”だった。あの時の取組が成功していったのは、“蓄積性”と“深化性”に絞ったからである。

このようなコンセプトをきちんと持つて、5年間ぐらいをどう育てるかということを考えていくといいのではないかと思う。

「学び続ける気質」を育てるためには、これまで行われてきた網羅的な初任者研修ではだめだ。もちろん初任者にとってはいろんな資質が必要ではあるが、その研修内容には、“蓄積性”と“深化性”が存在しにくい。

だからこういう（“蓄積性”と“深化性”）視点を新たに持ちながら、和歌山市との間に5年間ぐらいの構図を描いていくことが現実的であると思う。

また、その時に指標や教職大学院をどう使うかも大事である。

#### 添田

初任者は日々勤務をし、校内でも研修しているわけで、網羅的なことは周りの校長たちからOJTで学んでいける部分はある。

しかし、初任者が一番最初に身に付けなければいけないのは、やはり「授業力」である。

学校なので「学び」を子どもたちにしっかりと指導できる「授業力」である。

もちろんクラスには課題のある子どもたちもいるので、その子どもたちをこちらに向かせというのも「授業力」の一つと考えてあるが。だからこそ、初任の間にそのベースを積み重ねさせ、その後は自分で回転できるように積み重ねてやるということこそ大切である。

「授業力」をつける・育てるための内容を集合研修でやるべきで、それ以外の校務のこと等は、OJTでやっていけるだろう。OJTでできないぐらいの大きな課題が初任者にあったとすれば、それは当然誰かが初任者の助けに入るべきことで、そのことも備えて網羅的にというのは初任者にとっては酷な事ではないかと思う。

現在行っている教職大学院での初任者研修は、授業づくりが中心であり、目の前の子どもたちに合った授業をどう組み立てていくのかというのが中心のプログラムである。

#### B氏

そのプログラムを進めていくときに、やっぱりジグソーパズルの全体の絵をみんなに見ておいてもらう必要がある。絵を見ておいてもらったうえで、当事者意識をもってやってもらう必要がある。その仕掛けをきちんとつくっておく必要がある。

### 7. 意見交換会を振り返って

先にも述べた通り、有識者のみなさまは、過去それぞれの立場で教員研修の計画や実施、また見直し等に携わっていた方々である。本学が目指す現職教員研修を理解した上で、要約すれば次のようなご意見・ご提案をいただいた。

#### 【有識者のみなさまのご意見の要約】

- ・大学は一部の教員だけでなく、それぞれの教員が危機感をもってこの取組を続けなければならない。
- ・教員研修に関わるすべての者が、目指す全体像を理解した上でそれぞれの動きをするということ。喻えるなら「初任者研修」のジグソーパズルを仕上げるために、そのパートと

なる各ピースの人たち（大学教員・教育委員会指導主事・校長・拠点校指導教員・校内指導教員等）に、目指す「初任者研修」の全体像が見えているか ということである。

- ・「初任者研修」と言えば和歌山大学と言われるようになってほしい。
- ・育成協議会でこのような議論をすべきである。
- ・教育委員会や研修センター、また大学等、独立した機関がやれることは限られている。大切なのは互いが繋がり合うこと。それぞれの機関がにらめっこしていて、一番不幸なのは教員である。
- ・連携のキーになるのは和歌山市。和歌山市と連携することが望ましいと思う。
- ・「合弁会社」のようなものができればいい。市の指導主事と大学の教員が同じラウンドテーブルについて協議をすることが大切である。
- ・やはり和歌山市との連携。和歌山市と連携し、附属学校などをを利用して授業や研修を行う。
- ・教員研修では和歌山市との連携を考えていくべき。ただ、和歌山県との連携・協力関係は継続すべきである。
- ・根本は情熱。教育者として心に火が灯っているかどうかだ。その火を灯そうとしているのが和歌山大学の取組だと思う。
- ・「出前講座」は素晴らしい取組だと思う。大阪でも同じような取組がある。国の動きを踏まえた上で、このような具体的な連携研修を今後どうつくっていくかが鍵となる。
- ・「どのような教員を育てたいのか」という視点をお互いに共有しながら、5年かけて合同研修を行い、「教員の育ちをつくっていく」スタンスを両者（和歌山大学&和歌山市）がもつこと。5年間がキーとなるのではないか。
- ・網羅的な初任者研修はだめ。「学び続ける資質」を育てるためには“蓄積性”と“深化性”が大切である。
- ・育成指標や教職大学院をどう使っていくかが大切である。

## 8. 岸田氏よりのメッセージ

後日、意見交換会へご出席いただいた大阪教育大学の岸田正幸氏より以下のようなメッセージを頂いたので合わせて紹介する。

メッセージの終末にある「和歌山大学教職大学院の初任段階教員育成について」の5項目は、今後の本事業の目指す先を的確に示してくださっていると思う。本学の存在価値を高める自律的活動が行うためにも、取り組み始めた本取組を引き続き継続実践したいと考える。

## 「和歌山大学教職大学院への期待」

大阪体育大学 岸田 正幸

私の研究室に今も飾られている一枚のポロシャツの背中には、こんな文字が書かれている。「昔習ったことで飯食うな！！ Since2013, 2014」。2012年度末に構想し、二年間和歌山大学で行ってきた「初任者研修高度化モデル事業」を終える際、受講生がその記念として作ったポロシャツの背に記した文字である。このモデル事業のコンセプトは、「生涯にわたって学び続ける教員としての資質・能力の育成」にあった。主に、初任者教員として求められる知識・技能、資質・能力を伝授する形で行われている従来の初任者研修から、「学び続ける教員を育てる」ことに特化した初任者研修への転換とでも言うべきものであった。

モデル事業が始まる約一年前、2010年から始まった「中央教育審議会教員の資質能力向上特別部会」の下に作られた「基本制度ワーキンググループ会議」において、これからの教員に求められる資質能力が改めて議論され、「学び続ける教師像」という大きな柱が生まれようとしていた。私もこの議論に参加し、このことに関して「この自主的・自発的に学び続けるというか、自己成長能力というか、こういうものを別立てにして、ここでの大きな柱立てとして考えていいんじゃないか」(2011年「第2回議事録」より)と述べるなど、その重要性を強く認識していた。とりわけ、団塊の世代の大量退職に伴う大量採用時代へ向かおうとしている時であり、初任者等、若手教員を対象として、学び続ける資質・能力を育成することが、日本の教育を支える大きな力になると想っていたのであった。そして、こうした課題意識を背景として、和歌山大学に対しての「初任者研修高度化モデル事業」への提案となり、徹底的に学び続けることの重要性をたたき込まれた受講者が、前述のポロシャツの背に「昔習ったことで飯食うな」と残したのである。彼らは今、それぞれの学校において中核的役割を果たしつつあると聞いている。

「初任研修高度化モデル事業」の立ち上げから10年近くが経過した。そして、改めて、教員養成に係る環境の変化の大きさに気付くのである。和歌山大学には、教職大学院が設置され、この事業を発展させる形で様々な取組がなされてきた。また、作られた教職大学院を取り巻く環境の変化も大きい。研究科大学院と一本化したことに伴う定員増と求める入学者像との関係、制度化された教員育成指標や育成協議会での教職大学院としての役割といった課題等を抱える中で、これから教職大学院が自律的にどう動いていくのか、その判断と行動力が試される時期に来ているように思うのである。

そうした中、「教員需要の減少期における教員養成・研修機能の強化に向けて」(2017年)有識者会議報告書を待つまでもなく、「現職教員の教育・研修機能の強化」と「地域の教育課題解決のためのコンサルテーション機能を担う組織」という視点は、今後の教職大学院にとって避けて通れない課題となっている。特に、「現職研修機能の強化」に向けた取組は、過去にも教員採用数の多寡によって、所謂「0免課程」や「在り方懇」を経験してきた教育学部にとっては、大げさではなく、背水の陣といった感がある。なぜなら、少子化による採用減という大きな流れを覆い隠して、浮かれていた大量採用期が終われば、教育学部淘汰の時代に入るの明瞭だからである。その意味では、既に、10年余り前から始まった「教員免許更新講習」の導入時から、教育学部は、新規教員の養成から現職教員の養成へと舵を切り始めたと私は考えていた。

一方で、「現職教員の研修機会の強化」というテーマは、教育委員会にとっても悩ましい課題となっている。大量の若手教員を育成しようとしても、核となる中堅教員が少なく、ベテランから若手への指導技術等の伝承が思うようにいかないこと。次世代の管理職となる人材の育成が必要なこと。教員の育成指標を作成したが、これに基づく体系化された教員研修をどう進めるか、などといったことである。加えて、働き方改革の動きも視野に入れなければならず、頭の痛い問題となっている。実はここに、「現職研修機能の強化」が求められている教職大学院、現職教員の養成へと舵を切りつつある教育学部が参画していかなければならない根拠がある。

中でも、和歌山大学教職大学院は、初任者研修を中心にこれまで取組を進め、数々の実績を積んできた経緯を踏まえれば、また、全国どの学校においても、大量採用された若手教員の育成が課題となっていることを考え合わせれば、主として、この時期の教員研修に焦点を絞って、全国モデルの研修体系を構築する取組をすべきであると考えている。ただし、これまでの「初任者研修高度化モデル事業」を下敷きとした発展的取組という意味合いではなく、全く新しい和歌山大学教職大学院の取組として、他を牽引するモデル研修体系を再構築して欲しいと思っている。そこで、その際の考え方等について、個人的見解にすぎないと断りつつ、期待を込めて以下のことを示しておきたい。

#### 【和歌山大学教職大学院の初任段階教員育成について】

1. 初任研修を肩代わりするという発想ではなく、5年程度をかけて若手教育を育成するモデルを構築する。その際の基本コンセプトは、やはり「生涯学び続ける資質・能力」をどう育てるかであり、その取組の中で、自ずから優れた指導力や実践事例が生まれてくるものと考える。
2. 教育委員会との共通認識を大事にする。モデルを作るという意味では、共通認識を持てる自治体に絞り、単発的な取組としての参入ではなく、研修体系の中で多くの教職大学院が担う等、枠組みとしての関わりをもつことが適当と考える。
3. これまでの初任者研修に係る取組の発展形ではなく再構築とする。その際、5年後の求める姿を明確にし、そこからのバックワード的なプログラム構築により、モデル研修体系の信頼性を担保すべきであると考える。
4. 教員の育成指標との関係を明確にする。教員の育成指標の有効活用と教職大学院の地域における実質的役割の明確化は全国的な課題であり、こうした取組実績を残すことは、大きな意味をもつものと考える。
5. 働き方改革の視点と多様な学びの場の提供といった視点を大事にする。働き方改革の観点から、今後オンデマンド研修が教員研修の1つの役割を担っていくことが予想される。関連して、土日での研修や勤務しながらの教職大学院での学びなど、多様な学びの場を設定していく必要があると考える。

この他にも、今後の教職大学院の在り方として、校内研修の醸成等にどうかかわるか、力量のある管理職をどう育てるか、といった本来的業務に係ることなど、様々な分野での意欲的取組を求めるところであるが、そうしたことも含めて、和歌山大学教職大学院の存在価値を高める自律的活動が行われていくことを強く期待するものである。



## (D) 研修プログラムの体系的構想について



## 研修プログラムの体系的構想について

今年度の実践及び省察を踏まえ、和歌山県教育委員会が作成した教員育成指標（P7~8 参照）に適応する教員研修を別紙のとおり計画・考案中である。

### 1. 教員としての資質の向上に関する研修（P7）

ここ数年の新規採用者の増加に伴い、指標の第1段階（基礎形成期；1~3年目）や第2段階（伸長期；4~10年目）にあたる教員向け研修が最も必要とされている。そこで、これらの段階をさらにそれぞれ3つの区分（A~C）に分け、若手教員の授業実践力向上を目指した研修を考えている。

ここに掲げた研修は、これまでに行ってきいた初任者研修履修証明プログラムや開発してきた校内研修（授業研究）改善プログラムを基に、初任者や2年次・3年次教員等若手教員が実際の授業づくりで迷ったり悩んだりしていた内容を加味し、それらに対応する構成にしている。

また、それぞれの研修は「総論編」と「教科編」に分け、総論は教科・領域の枠を超えた授業づくりの基本とし、参加者全員がこれを受講、それを受け行う各教科研修は、選択制で自分の受けたい教科を選んで受講することになる。

当然、第2段階の教諭が、第1段階の各研修を受けることも可能で、育成指標に明記されている資質・能力に今の自身の授業実践力を照らし合わせ、補いたい部分を受講できるような形を考えている。

### 2. 校長・教頭及び主任等に求められる資質・能力に関する研修（P8）

管理職やこれから管理職を目指す教員に向けた研修は、現在、本学教職大学院で学校改善マネジメントコースに籍を置く大学院生（現職教員）向けに、実際に行っているものである。例に挙げその内容を紹介する。

#### ① 管理職向け研修「学校と法」

- ・学校の役割の再考
- ・制度の再編とその背景
- ・教職員の管理
- ・施設・設備の管理
- ・学年及び学級編制
- ・教育課程編成
- ・地域との連携
- ・校務分掌
- ・職員会議 等

#### ② 主任等向け研修「問題行動と保護者との連携」

- ・保護者との連携の意義
- ・「いじめ」被害児童生徒の保護者への支援
- ・「いじめ」加害児童生徒の保護者への支援
- ・「いじめ」についての学級及び学校全体の保護者への説明
- ・「不登校・引きこもり」児童生徒の保護者への支援
- ・「発達障害」児童生徒の保護者への支援
- ・「非行」「暴力行為」の児童生徒の保護者への支援 等

これらの研修は、受講者の校種、勤務校の実態、また与えられた研修時間によって、その内容を柔軟に編成し直すことも可能である。

**教員育成指標(和歌山県教委作成)に基づいた研修一覧表**  
**教員向け研修(案)**

1段階 基礎形成期		2段階 伸長期		3段階 充実期		4段階 貢献期	
1~3年目		4~10年目		11~20年目		21年目以降	
A	B	C	A	B	C		
○本時の授業(総論)  ・優れた授業とは ・授業の構造 ・指導案作成 ・板書計画	○めあて・評価(総論)  ・教師のねらいと 子どものもめあて ・ねらいを重いた授業づくり ・評価と指導の一體化 ・評価基準と評価規準	○総合授業(総論)  ・総合的な学習の時間とは ・指導計画 ・言語能力育成 ・協働的学習 ・キャラクア形成 ・深究的活動	○単元構成(総論)  ・単元とは何か ・単元研究 ・教材とは何か ・教材研究 ・単元構想と教材の活用	○総合年間計画(総論)  ・探究的な見方・考え方を 育てるために ・教科横断的・総合的 (他教科・領域との関連性) ・地域性を活かした ・深究課題とは ・発達段階に則した 課題設定と探究方法	カリキュラム・マネジメント  ・指導助言(技術・技能) ・指導助言(授業計画) ・指導助言(配慮)  ○基礎形成期への教員への関わり方(出前講座1)  ○授業を通じての校内研修充実のために(出前講座2)  ・授業を観る観点 ・授業評議シートを使つた授業づくり  ○ねらいを貫く授業づくり(出前講座3)  ・授業を観る観点 ・ねらいを貫く授業にするために  【その他】 ①管理職向け ○チーム学校 学校経営力向上のために(講座7) ・コミュニケーションの図り方 ・校内カンファレンスによる授業力アップ ・ワークショップ  ②講師向け ○授業力・学級経営力向上のために(講座5) ・目指してほしい授業づくり ・教室で大切にしたい学習規律 ・"4つの魔法"を考える ・学習規律をどう定着させる		
授業構想能力	○めあて・評価(国語)  ・国語科で大切にしたいこと ・具体的な授業例を通して ※以下教科毎で同じ	○総合授業(地域素材)  ・地域素材の魅力 ・具体的な授業例を通して ※以下教科毎で同じ	○単元構成(国語)  ・国語科における単元づくり ・具体的な授業例を通して ※以下教科毎で同じ	○総合年間計画(実践)  ・各校の総合見直し ・各校の実情に応じた 総合単元づくり			
授業実践力	○本時の授業(算数) ○本時の授業(理科) ○本時の授業(社会) ○本時の授業(体育) ○本時の授業(道徳) ○めあて・評価(英語)	○めあて・評価(数学) ○めあて・評価(理科) ○めあて・評価(社会) ○めあて・評価(体育) ○めあて・評価(道徳) ○めあて・評価(英語)	○本時の授業(算数・数学) ○本時の授業(理科) ○本時の授業(社会) ○本時の授業(体育) ○本時の授業(道徳) ○めあて・評価(英語)	○单元構成(算数・数学) ○单元構成(理科) ○单元構成(社会) ○单元構成(体育) ○プログラミング(総論) ・プログラミング教育の目的と 方法 ・具体的な授業例を通して			
指導技術	省察						

**教員育成指標(和歌山県教委作成)に基づいた研修一覧表**  
**校長・教頭及び主任等向け研修(案)**

基 準		主 任 等	教 頭	校 長
組織マネジメント 学校教育目標の達成に向けて行動する力	構想力	授業研究の理論と実践 教育課程編成の理論と実践 学校組織と経営 学校と法 学校安全と危機管理		
	調整力			
	行動力			
家庭や地域等との連携・協働する力	連携力	問題行動と保護者との連携	教育と福祉の連携	
	育成力	若手校内研修への支援		
教職員の専門性を高める力	省察力	課題分析		
人材育成 組織におけるリーダーシップを執る力 教育に対する使命感	垂範力			